特11
613

演劇脚本

塩原多助經濟鑑

自二幕目
至大詰

勝諺藏著作

088578-000-7

特11-613

塩原多助経済鑑

勝　諺蔵／著

M27
DBJ-0237

演劇脚本

塩原多助經濟鑑

場割

序幕　野州大原村茶店の場
上州東口逢貝村の場
猟師塩原角左衛門住家の場

二幕目　市川道鴻の巣驛田本の場
保泉村お亀危難の場

三幕目　百姓角左衛門内の場
同奥座敷の場
向玄關先の場

四幕目　沼田地獄縄手雨舎りの場
同中家圓次郎殺しの場
庚申竹屋座敷の場
下新田塩原住居の場

五幕目　下新田居酒屋の場
塩原多助内の場

六幕目　沼田ヶ原奏馬別れの場

七幕目　（上州八崎在庵室の場）
（岩上村多助盜難の場）
（吾妻川岸邊の場）

八幕目　（筋違内廣小路の場）
（同　戸田家門外の場）
（鹽原角左衛門長家の場）
（佐久間町炭問屋の場）

九幕目　（本所四つ目掛茶屋の場）
（藤野屋杢右衛門内の場）
（相生町多助住家の場）

大詰　鹽原多助婚禮の場

特11
613

演劇脚本　鹽原多助經濟鑑

二幕目　（中仙道鴻の巣驛田本の場）
（保泉村於龜危難の場）

役人替名

一百姓鹽原角左衛門　一金山の松五郎　一講頭五兵衛
一卯之助女房お龜　一江田村の源三　一娘　お栄
一又旅のお覺　一下女お由　一講中大勢
一道連の小平　一同　お松
一百々村の倉八　一同　お吉

本舞臺常足の二重眞中三尺の落間諸講中の板看板田本と印せし暖簾を軒先に掛け榛名妙義講中の納め手拭を棹に括り是を上下の柱に括りかけ上下共床机を並らべ下手黑の株木門を開き玄關の口を見せ是に高崎御宿泊所前橋御小休彦根御小休諏訪御宿泊所と記したる板をかけ掛念佛に法螺の貝をあしらひ幕明く（ト爰に惣出の人數榛名山妙義山講中揃の着附脚半甲掛の拵らへにて床机に腰をかけ飯を喰ひ居る下女お由お松お吉給仕をして居る先達五郎兵衛世話を燒て居る此大勢の中に又旅のお覺胡麻鹽鬘卷帶上品なる旅形り道連の小平前

髮髭旅形にて這入り食事をして居る百々村の倉八金山の松五郎江田村の源藏旅駕屋の搭らへにて居る」　五郎兵衛「サア皆なたも支度はい〳〵かあしたはお山故一里でも先へ出越して置ねへとあしたがるらうムり升せチイ〳〵女中〳〵　お由「ハイ〳〵　五「まだあつちの方にお膳の廻らぬ所がある　お松「夫でも一時になつており升から　五「夫はおめへの所も名代の田本じやァねへか講中の百人か二百人で手が廻らぬ、へなんて正五九月にて參詣をする元講の講頭五郎兵衛だこんなに隙が入ちやァ叶はねへ　お吉「ハイ〳〵誠に濟み升せん　五「チイ〳〵まだ向ふの親子連れの所へはお膳を上げた切りとび〳〵酒を呑まれちやァ騒動だ　由「モシ〳〵あのお方は講中樣じやムり升せぬぞへ　五「成程あんまり世話を燒かせるに因て目が〳〵らんで仕舞つたゞ〳〵〳〵〔ト向ふよりお龜丸髷髮旅形りにて子役のお榮の手を引き疲れたるこなしにて出て來り駕屋三人花道へ行き〕　源藏「モシおかみさん御都合迄駕はどうでムり升　倉八「乘つてやつて下さい升せ　松五郎「おかみさん〳〵　お龜「ハイ有難うはムり升が足も草臥たといふでもなし　源「何の草臥ねへ事があるものか　倉「そんな事をいはねへで乘つてやんなせへな　三人「チイどうだへ〳〵〔ト舞臺へ來りお龜床机へかけやうとしても大勢にてかける事の出來ぬこなし〕　お榮「モシおかみさん爰へお掛け被成升せ　小平「爰が明ており升から　龜「左樣なればお詞に甘へ升て掛させて貰ひ升サ、お榮お前もゆつ〳〵りと休みやお榮「アイ〳〵私しやおなかゞすいて來たわいなァ　龜「チ、さうであらうが爰も人込み故急な事ではあるまいわいなァ　榮「アイヤおかみさん可愛想にお子達だもの　小「幸ひまだ箸も取らないお膳があり升から　龜「イエ〳〵夫では恐入り升わいなァ　榮「何のお前さんサア爰へお出〇本によいお子達でムり升るかァ　龜「イエ骸斗り大きうムり升て　榮「サア是をお上りよ　榮「アイ〳〵　小「チイ姉さん大急ぎで一人前持て來ておくれ　由「ハイ〳〵　源三「モシおかみさん駕はどうでムり升　榮「チイ〳〵是は私の道連れのお方だよ　小「駕へ乘り度きやァ勝手に乘るから惡勸めを仕ねへがい〳〵せ　倉「そんならあなた方のお連れでムり升か　三人「夫は麁相を申升た　龜「本にマアよいお方にお出會ひ申此樣な有難い事はムり升せぬ　榮「私抔は年中旅をしており升故安心してお出被成升せ　龜「有難うムり升る　小「さうしてあなたは何所へお出でムり升　龜「ハイ私は上州小川村迄參り升るが何所へ出升たら宜しうムり升るぞいなァ　小「小川村といふは上州も東口とやら此山國のゑらい所へお出でムり升るなァ　龜「ハイ私の連合が小川村におり升る故夫へ參る積りで娘を連れて出升たが旅馴れ升せぬ故色々難義を致し升たわいなァ　榮「ヤレ〳〵夫はお氣の毒な事　小「然し私共は今晩は伊勢崎で泊る積りでムり升か御迷惑でなければ御同道を致し升せうか　龜「夫い私からお願ひ申所お邪魔樣でもお連れ被成て被下升せ　榮「あの伯母さんと一所に行くのかへ嬉しい〳〵　小「

ろんなら今宵は伊勢崎の錢屋泊りと致し升せう　覺「ナイ駕屋さん〳〵　源「ヘイ〳〵　小「お〳〵　覺「ろんなら二挺拵らへておくれよ　松「ヘイ　覺「いつもの通りでよいかへ　松「宜しう厶り升　龜「どうぞ其所へ宜しき樣にお願申升　小「夫はお氣使ひは入り升せぬ何れ晩の泊りで御勘定致し升せう　倉「モシ駕は出來升た　覺「サア〳〵おかみさん　龜「左樣なれば御免を蒙り升て○「ト松五郎源藏にお龜を乘せる「サアお榮お出よ　榮「イエ私しや此伯母さんと乘るわいなア　覺「本ゴ夫がいゝよ可愛事モシどうぞ此子を貸しておくんなさいよ　龜「夫ではどうも恐入升　小「モシ勘定は爰へ置升たせ　由「ヘイ〳〵大きに有難う厶り升　小「サア駕屋さんやつておくれ　「ト小平先に駕二挺附て上手へ這入る」　五「サア〳〵大變に際が入つたみんないゝか　皆々「どうに支度をしよう厶り升せ　「ト皆々捨臺詞にて舞臺へ棹に並び」　皆々「大きに御厄介になり升た　「ト五郎兵衛は法螺貝を取て吹く〳〵請頭は梵天を突立るが木の頭」　下女「どうぞお歸りをお待申升る　「ト是を掛念佛になり此仕組宜しく道具ぶん廻はす

本舞臺平舞臺一面に樹木の植込み舞臺前花道共水に濡れたる草原の畝松の釣枝都て上州保泉村の摸樣夕立雷鳴にて道具納る　「ト向ふより源藏松五郎駕を舁き出て來り直ぐに舞臺へ來つて」　源藏「ヘイお約束の所迄參り升た　松五郎「お浮雲厶り升せ　「ト駕の垂を上げる是

にお龜居て」　お龜「駕屋さん爰は何所で厶んす約束は伊勢崎の錢屋といふ宿屋迄では厶んせぬか　源「夫は大違ひだおれは與久村の者故是からは行このねへのだ　龜「夫では跡より今の兄さんが來る程に夫迄待て下さんせいなア　松「馬鹿な事をいつたものだ何しに跡から來るものか　龜「イエ〳〵來ぬ事は厶り升せぬ然も私の娘迄が一つ駕で厶り升れば　源「ナイ〳〵さつきの二人は此海道の護摩の灰又旅のお覺に息子の小平といふ者で手めへの餓鬼があんさり可愛所から勾引したのよ　龜「エヽヽろんなら深切に見せたのはさういふ工みであつたるか　源「まだ夫斗りじやアねへ手めへも二人が慰さんだ跡は極りの旅女郎　龜「エヽヽコヤモウどうも「ト行かけるを」　松「ナツトどつこい逃がしてたまるものか幾らじたばた仕たとても往來稀な片山里じようになつて居るがいゝハサ　龜「エヽ聞けば聞く程腹の立○アレエヽ誰ぞ來て下さんせいなア　源「エヽ喧ましいわい大きな聲を仕やアがるとふんじばつて念佛講だッレ相棒　松「合點だ　「ト宜しく立廻りお龜は逃げやうとする能程に百姓權原角左衛門合羽掛け脚半甲掛菅笠を弱し出て來り宜しく立廻りド、両人叫はず下手へ逸散る這入る」　角左衛門「コレ女中怪我はないか　龜「ハイ危い所をお助け被下升て此樣な有難い事ゑム厶り升せぬ　角「一体どういふもので此山中へは來さつしやつた　龜「よう御深切にお尋ね被下升○元私は何某の藩の娘にて不圖した事より家來と密通終に屋敷を立退升て本郷邊に微

の暮らし夫は以前の恩義を思ひ此上州の小川村へ逼塞致す主人を尋ねに參り升て今日が日迄も歸り升せぬ故家財を賣て路用とおし參り升内今日斗ちず鴻の巣の田本にて親子の者に欺かれ娘は婆々の駕に乘せ伊勢崎の錢屋とやらへ泊る筈にて二挺の駕で一所に參り升る内俄の雨で度を失ひ行衛も知れす此原へ私を置て今のしぎ既に差かしい目に會ふ所をお蔭樣にて助り升たが西も東も分らぬ私不便と思ふて被下升せ　角「成程愍れお其お話し慣いは旅のごさの灰然し今から伊勢崎へ往たとても中々ろこらにうろつく奴じやムらぬ命さへあつたなら又巡り逢ふ事もあらうさうして其娘の子の年の頃は　龜「ハイ今年で七歳になり升る　角「さうして今の商賣は　龜「ヘイ本郷春木町二丁目にて旅商人を致し升る岸田屋卯之助と申者の女房と娘でムり升る　角「エヽ岸田屋卯之助樣が御内義か　龜「ハイ　角「ろんならお前は盤原角左衛門樣といふお侍の妹御岸田右内樣の女房お龜樣でムり升たか　龜「どうして夫を委しくも　角「知るも知らぬも此國の小川村にてお兄さんの角左衛門樣は御浪人　龜「夫はよいお方に巡逢ひ此樣な嬉しい事はムり升せぬ定めて夫右内にも兄と一所に居る事でムり升せう　角「エヽ　龜「どうぞ逢はして被下升せぬか　角「是には色々談しもあればマア私の内迄行き其上の事に仕升せう　龜「夫は有難うムり升るが夫に逢はぬ其内は心かゝりでムり升れば　角「夫程迄に逢ひたいか　龜「どうぞ逢はして下さり升せ　角「チヽお前の尋ねる其夫は○

「ト懷中の桐卷より書附を出し「是じや程に必らず恂りせまひぞや　龜「何夫が此書附とは○「ト手に取上げ「徹底忠孝信士俗名岸田右内エヽヽヽ　角「サヽ夫じやに因て恂りするなといふたじやないか　龜「ろんなら夫右内殿にゑ死なれ升たかモシ旦那樣何病氣にて何時の頃でムり升たかどうぞ聞かして被下升せ　角「サア譯をいふのも涙の種コレお内義能う聞て被下や○然も去年九月二日田地の賣物ある故に金を持て貝村へ行く途中にて右内殿が主人の爲に五十両どうぞ貸してくれとの頼みこつちは夫を盗人と大聲上げていふた故おゞしに拔た旅脇差丁度兄御が通に見てやつぱり是も盗賊と思ひ違へで鉄炮の的いはづれぬ右内殿先祖は一つ名前も同じ盤原角左衛門其角左衛門を世に出したいとの事より起りし五十両右内殿に犬死をさせまいと無理に一人息子の多助殿を貰ひ請ての結納に五十両を進せたが其金にて角左衛門殿には定めて江戸へ行かれたに違ひはあい譯といふのはかうじやわいのう　龜「聞ば聞程不仕合無夫にも殘念でムり升せう便に思ふ夫には死別れ兄御には江戸出立一人の娘は勾引され生甲斐のない此身の上寧ろの事一思ひに「ト行かけるを」　角「コレ女中早まるまい　龜「どうぞ止めずと殺して被下升せ　角「イヤ〳〵知らぬ先なら兎も角も現在そなたの甥子の多助内におれば親類中どうして〳〵殺してたまるものか是から右内殿の墓へも

參り又多助の面倒見て成人さして下さる内には江戸へ往つた角左衛門殿の有所も分り娘御の有家も知れう短氣は損氣只何事も此角左衛門に任ゑて置かつしやい 羅「段々の御深切何とお禮を申升せうやら便り少ない此身の上御不便かけて被下升せ 角「夫でわしも安心仕升た然し遲うならぬ内行升せうか○〔ト雨車になり「ヲヽ又降つて來た○サア女中行升せう 羅「ハイ〔ト疲れて立兼るこなし」 角「是では中々ひつのしい○〔トお龜を抱上げ肩にかけ「サアそろ〳〵と行升せう 羅「有難うムり升る〔ト源藏松五郎窺出て」 両人「其街妻をどうしやアがる 羅「エヽヽ 角「是ころ今の 源藏「何を○〔ト角左衛門拳固にて源藏の頭を打つ「アイタヽヽ 松五郎「うぬ〔ト角左衛門にのゝるを一寸立廻りあつて捻伏せ」 角「エヽ今の手際に○〔ト両人を押附けるを木の頭「懲りねへのか 源、松「アイタヽヽ〔ト下にてもが〳〵此仕組宜し〳〵誂らへの鳴物に雨車を冠せ宜し〳〵拍子幕

三幕目

役人替名

一據原多助　一下　男五八　一作男源太兵衛
一同角左衛門　一下　女お爲　一又旅のお髭
一角左衛門女房お龜　一太左衛門娘お作　一道連の小平
一娘お梅　一作男重太夫

本舞臺平舞臺眞中葉茸家根の門此柱に諸事儉約の札を張り上手葉茸二重家根の土藏下手塗舞松の鈎枝爰に重太夫襦袢形にて半切の米櫃と茶桶を入れし御膳籠を置き天秤棒に腰をかけ下手にお作在所娘の拵らへお爲山出しの下女の拵らへにてお作に日傘をさしかけて居る此摸樣在郷唄にて幕明く お作「ろんなら彌々多助さんいお留守でムんすかいなア お爲「イヱ〳〵お嬢樣夫は陸でがんす昨日あんたも聞ての通り親御角左衛門樣が江戸からお歸りのない内は馬と一所に内ゑ居るといもつせへ升たが 重太夫「デモ居ん者はしよ事がないじややらうと靑を曳て沼田の棒鼻迄迎ひに出やしやつたのでがんすから 爲「夫ではお嬢樣爰に居ても駄目でがんすお内へお歸りなせへまし 作「イヱ〳〵伯父さんのお迎ひに往たとあれば歸つて來やしやんを迄わしは伯母さんゑ三味線の稽古をして貰はうわいなア 爲「成程さうなせへまゑ重太夫さんお邪魔でがんしたサアお出なせへまし〔ト両人門の内へ這入る」 重「アハヽヽヽ蔭裏の豆も時分が來れば妙あものじやコレ源太兵衛來う〔ト門の内より源太兵衛作男の拵らへにて出て來り」 源太兵衛「何じや旦那樣の留守じやと思ふてのらをかは

いてきた行んのか　重「何のさうじやない今其所へ往た分家のお作さんは内の若旦那にムつて居るぞ　源「駄目こくなあのお子と幸右衛門どん所の息子どんが養子に行くと極つて居るのじや　重「其圓次郎どんが養子に行く話は聞ておるが毎日來ておかしな目附をするが怪しい一体先のおかみさんは植附にも出證にもかゝつて稼いだお人であつたが今度のおかみさんは村の娘に三味線を教へてやつたり踊りの稽古にムんせ抔といふは百姓の女房には向かぬじやないか　源「サア夫もさうじやけれど若旦那には實の伯母なり色々入組だ譯のあるので太左衛門樣を始め村一統より旦那に勤めて後妻に直したおかみさん三味線も又陽氣でいゝわい　重「馬鹿ぬかせ夫じやに因て村の娘が皆浮氣になるわい〔ト源太兵衛向ふを見て〕　源「ナヽ旦那樣が歸つてがんした　重「ナヽさうじやコリヤ斯うして居たら叱られるであんべへ　源「早く小正半を持て往てやれ　重「そんなら源太兵衛　源「田草取に出て居る者に旦那樣のお歸りじやといふてやれ　重「ナヅト合點じや〳〵〔ト重太夫御膳籠をかつぎ橋掛うへ這入る向ふより角左衛門旅形り五八矢張り旅形り下男の拵らへにて天秤棒に括りし荷物をかつぎ出て直に舞臺へ來る〕　源「旦那樣御機嫌よう　角左衛門「ナヽ源太兵衛漸う今歸つて來た　源「江戸ハでかい火事があつたさうでがんすなア　五八「イヤモウ魂消た其火事よ追駈けられて逃げて來たのじや　源「さうして若旦那はどうなせへ升た　角「多助は此村の口迄一所に來たからモウ歸つて來るだらう　多助「ナヽイとつ樣待てくんさい〔トいひながら多助草鞋がけ大百姓の息子の拵らへにて白馬を引て出る此馬にお梅島田髷江戸引手茶屋娘の拵らへにて怖さうに乘つて居る〕　角「悴呼ぶのは何じや　多「何じやといふて此娘つ子が怖いといふて泣さうになつて居やんすから　角「成程江戸で生れた女子にて馬よ乘つた事もあるく又下荷がない故怖いのも尤じや〔ト お梅馬より下りる〕　源「其娘つ子は何でがんす　五「源太兵衛どん是は江戸の火事場で拾つて來たのじや　源「ヒヨウ江戸の火事にはいゝ女が落て居るものじやな　多「源太兵衛どんおとつさんの歸つた事をおつかさんに知らして來い　源「ハイ畏り升た〔ト門の内へ這入る〕　角「多助今日はよう沼田迄迎ひよ來てくれた旅馴れぬ此子の事故昨日から足を痛め馬や駕を勸めても遠慮をして乘らなんだが内の馬故沼田から乘つたといふもの　お梅「誠に不思議な御縁にてあなたへ迄の御厄介何とお禮を申升せうやら　多「何の禮には及ばぬ事今道々おとつさんから聞升たからお前は十三年前勾引されたわしが今のおつかさんの實の娘でがんすとの事　梅「サア夫が斗らず分り升たも神や佛に此年月お願ひ申た皆御利益　五「然し旦那樣早う逢はしてやらつしやり升せ　角「そんならわしと一所に來て　多「絶て久しき親と子が　梅「積る話去の艱難も　五「モウ今日からは安心さつしやい　角「及ばずながら引取り　梅「何分宜しう此身のお世話を　五「夫では旦那　多「おとつさん　角「ろ

ちも疲れを休めてくれ　多「ハイ○青よわれも寛くり休んでくれよ」ト角左衛門お梅五八附添ひ多助は跡より馬を引き門の内へ這入る引連へてお作お爲出て來り」お爲「モシお嬢樣今の娘つ子を御覽なせへ升たか　お作「大層美しい御器量じやがあれは何であらうどいおア　爲「あれはてつきり角左衛門樣が多助さんのお嫁さんに江戸から連れて歸つた女子に違ひねへでがんす　作「本統に多助さんのお嫁さんであつたらどうせうどいおア　爲「此上はあんたが思ふ心の丈を手紙に書て上げなんしヨウ　作「夫で多助さんが得心して下さんせうかいなア　爲「サア其所があんたの運次第一本で得心せずば千本も万本も根限り上げなんしよ夫で男も仕舞にゝ往生をしてあんたの方へ札の落るは知れた事　作「コヲヤどうしたらよからうぞいなア」ト向ふより小平跡よりお角呼びながら出て來り」お角「チヽイ悴待たねへかちつとは年寄の足にも附合つてくれ　小平「おめへに附合つて居たばつかりでとう〳〵玉を見失しなつて仕舞つた　お角「うつちやつて置けあいつが消てなくなつても先の名前が分つて居るから　小「おめへ名前を覺へて居るか　お角「所がすつゝり忘れて仕舞つた　小「よしねへな笑談じやアねへやな　お角「向ふに人が居るから聞て見ろ　小「だつておれの内く内は何所だといつて聞かれるものか　お角「手めへはだまつて年寄に任ゐして置け」ト両人舞臺へ來り」お角「モシ姉さん今爰へ馬に乘つた娘が來た筈だが何所の家へ這入つたか　お知りでおいかは此内へ　爲「夫故心配して居る所サアお嬢樣ちつとも早くお内へ歸つて　作「折を見合せ筆にいはして　爲「サアお出なせへなし」ト作お爲向ふへ這入る」　小「チヽイおつゝア成程話に聞た通り此門搆へでは三百石の田地を持た大百姓に違げへねへどう轉んでもレコになるせ」ト金の形を仕て見せる」　お角「夫はいはねへでも知れた事だがどちを組ぢやアいけねへせ小「案じなさんな憚りおがら道連の小平さんだ　お角「其小平さんが誠よけんのんだが斯ういふ段取にやつて見な　小「どういく　お角「耳を貸しな　小「よし來た」ト手拭を取て肩に掛けるのが道具替りの知らせ両人下にかゞみ小平に呟く此樣樣宜しく在郷唄にて道具ぶん廻す本舞臺平舞臺見附押入小摸樣の唐紙上下折廻りの障子家体眞中に角左衛門着流しの拵らへ上手にお龜百姓女房の拵らへにて住居お梅お龜の膝に泣伏て居る下手に多助着流しの拵らへにて住居合方にて道具納る　お龜「其なつゝしいはるなた斗りか別れて丁度十三年　角左衛門「明暮案じた娘よ逢ひ　多助「無かつかさんお嬉しうムり升せう　爲「あんまりの嬉しさに涙斗りが先立つて聞度事も聞なんだがそなたい今日迄どうして居やつたどいのう　お梅「申も涙の種ながらお聞被成て被下升せ○勾引された其時ゝら養はれたは女ながらも又旅といふ悪者にて近頃三田の三角へ引手茶屋の家業を始め旦那を取れの藝者になれのと無理難題の折

爲「其娘なら壇原角左衛門樣といふ此内へ　小「違へねへ壇原角左衛門夫々　お角「そんなら娘

蟹に身に生疵のたへがたない義理ある兄の無理口説悲しい月日を送る内此四日の江戸の大火赤坂より品川迄燒通つたる火災に罹りおつかさんから預けられたる着類の包みを道で盗まれ其誤りの折檻を思へば夫が恐ろしくいつそ死だが増しであらうと本所お竹藏の大ぞふへ身を投やうと仕た所を助けられたは實の親かゝさんのお連合とは私しや夢の樣でムんすわいなア　角「サア夫が緣は不思議なもの今度江戸に用事があつて五八を供に出立なし馬喰町に宿を取つたが今の話の大火事から一日置て又神田から大火事じやおりやモウ火事に追廻され逃る内に斗らずも助けたは此娘なだめすゝして淺草の山の宿へ宿を取り三日の間親御を尋ねて引渡さうと駈廻つたれど江戸中が燒原にて皆碁行衛の知れぬは若し燒死でも仕はせぬかと宿へ歸つて談を仕たれば親兄弟が死でくれたら身の仕合せじやといふ話から血筋の緣が分つて來て連れて歸つた其方の娘　多「聞けハわたとも從弟同士おつかさんは猶以て實の娘の事なればおつかしいも悲しいも御尤でがんすけれどわんまり泣て煩ひでも出てはなんねへ是迄一つに居た者と思ふておつかさん泣んすなお前が泣くとわし迄が身につまされて實親の○イヤサ實に悲しくなるのでがんす　龜「何かに附ても私の身をいたはるお前の心使ひは厚う受くれど今娘の話を聞けば別れてから十三年が其間嘸つらい目をした事と思へば夫が悲しうて　角「是はしたり死だと思ひ諦めた娘が無事に戻つたを何泣く事があるものか今日からしては傍に置親子中ようしたがよいわい　龜「うんなら今から娘をば内に置て下さんすか　角「ハテうちの子ならおれにも娘餘所外へやる程なら江戸から連れて歸らぬわい　梅「本に嬉しいあなたのお詞　龜「夫で私も一つの安心　角「夫に附て相談があるのじや多助も今年廿になれば其子の年も十九とやらうこでおれが考へにはお袋は多助の伯母なり此二人は從弟同士頭ふてもない二人が年合何と今から夫婦にして此身代を讓つたら家に風波の愁ひもなく此盤原の名跡の絶へる心配があるまいとおれは思ふがどうであらう　龜「夫はマア能ういふて下さんした十三年振で實の子に無事で逢ふた悦びの其上ならずさうなれば猶々親が身の悦び　角「然し緣談斗りは親の儘にもならぬ故先當人の腹を聞き○コレ多助ろち此子を嘸に持氣はないか　多「そりやモウおとつさんの言附けならわしやお詞を背かぬのでがんすがこんな者は先が不承知でがんせう　龜「コレ娘お前今からあの多助と夫婦になる心はないかへ　梅「ろりやモウおつかさんのおつしやり附なら決してお詞は背き升せぬが此樣な不束者は所詮お氣に叶ひ升まい　角「どうじや多助どうするのじや　多「先さへ嘸にならうといふなら　角「持つか　多「ハイ　龜「娘お前は　梅「あなたさへ女房にしてやらうとおつしやるなら　龜「お前お成りか　梅「ハイ（ト両人羞かしきおなしにていふ）　角「お龜　龜「旦那樣　角「自出度是で本極りじや　両人「ハ、、、、、　角「聞は元の名はお榮とかいふたさ

うなが　梅「今はお梅と申升る　角「ろんなら元の名に改め　鶴「善は急げといふからは　角「今夜直ぐに内祝言を」ト五八奥より出て來り」　五八「旦那さんあんたに逢てへつて玄關へ人が見へてゝがんす　角「何おれに逢度とて　五「何じや知らんが擂原角左衛門に逢てへつて一人は男に一人は婆ァさんでがんす　角「何の用で來たものか多助往つて聞て來い　多「ハイ畏り升た」ト奥へ這入る」　五「今一寸聞升たがお目出度事でがんすな　角「サア年も似合相應故今日から此お榮をば多助の嫁にする積りじや　鶴「悪い所があつたならお前叱つてやつておくれよ　五「勿体ねへわしも餓鬼の時分から旦那様のお世話になつて居る骸其若旦那の嫁つ子を叱るおんて事をして濟やす者でがんすか然し江戸で生れたら百姓業は知んねへでがんせう夫はわしが敬へ升べい　梅「かよわい骸で出來る事ならお使ひ被成て被下升せ　五「何百姓業がつらいてへつて江戸の火事の事を思へばよつほど楽なもんでがんす　角「其火事故に斗らずも　鶴「親子が無事の再會は　梅「災返つて身の仕合せ　五「夫を思へば旦那様　角「嫁よ　梅「ハイ　角「火事が出雲の神じやとてコレ焼餅は○ト鼻をすゝり込むが道具替りの知らせ「ならないぞ　鶴「ナホ、、、、ト笑ふ此摸様宜しく浮た合方にて道具ぶん廻す

本舞臺聟葺家根數臺附の玄關見小附摸様の唐紙此上に鞘附の鏡六尺棒抔掛あり上手腰板の中窓下手臺所の入口多助二重に住居平舞臺に小平お覺立かゝり居る合方にて道具納る　小平「夫じやァさつき這入た女はお前さんの所の娘に違げへねへのだねへ　多助「さうでがんす　小「じやァ眞平御免おせへ○ト數臺へ上り「チイおつかァ上んねへ　お覺「ハイ御免なさい○ト臺數へ上り「さうしてお前さんは　多「わしは爰の家の悴でがんす　覺「是はお初にお目に掛り升私は江戸の三田の三角で引手茶屋を家業にする仇屋のお覺といふ婆々ァでムり升がちと掛合があつて參り升たよ　多「ハァ掛合とは何でがんすか　小「チイ〳〵とぼけおさんなさつきお前さんが馬に乘せて這入た娘はわつちの妹で此お袋の娘だが一体何所から貰つて來なさつた　多「あれはわしが家の先から娘でがんす　覺「いゝ氣な事をいひなさんなあれは私の金箱娘然も此間の大火事の時途中ではぐれて行衛知れず捜した所山の宿の山形屋といふ宿屋に泊つて居た客人が娘を連れて斯う〳〵いふ所へ一所に歸つたと聞き悴を連れて來た所沼田の入口で見かけた故跡をつけて參り升たが人の娘を我物顔に連れて來て濟むと思ひなさるか江戸育ちの娘はねへちいさい内からお蹴ぐるみ金に飽して藝事を敎へて是から楽を仕様と思つて居るのに恩を忘れ現在親を振捨て家出をする様なあまだからどの道只は置れないサァ娘は何所に居るか早く爰へ出しておくれ「ト二重へ上らうとする」　多「モシ上つてはいけ升せん　覺「何ど上つてはいけぬとは何所迄も娘をば隠し立をするのだなよ〳〵よ是から名主へかつぎ出し勾引の罪に落すよ　多「何で勾引でがんす　覺「勾引だから勾引

といふのだ　小「チイおつかァ爰でくす〳〵いはうより名主へ出るのが近道だ　覺「ムヽサァ悴一所に來い」「ト立にかゝる奥より角左衛門出て來り」　角左衛門「イヤモシ一寸待て被下升せ　多「チヽおとつさんいヽ所へ來て被下升た　小「そんならお前さんが　覺「盥原角左衛門さんでムり升か　角「ハイ私は盥原角左衛門でムり升が多助一体どうしたのじや　多「おとつさん斯うでがんす人の娘を斷りなしに連て來たのは勾引し夫故名主へ出るといふて　角「成程夫は御尤な事じや　小「ろこで此息子さんが家の娘だといひ被成るがどういふもので人の娘をおれの娘といひ被成のか　角「成程お話を仕ないと分り升せぬが今度始めて江戸へ參り馬喰町に逗留中御案内の大火事實に驚いて逃廻る内お竹藏の大どぶへ身を投げやうとする娘を助けて樣子を聞升れば親兄弟を見失ひ其上大事の包みをば惡者にさらはれた身の言譯に死ぬとの事夫故宿へ連歸り三日が間捜し升たれどあなた方の行衛は知れず又親類もないとの事故據なく娘にして連歸るより外仕樣がないでは厶り升せぬか　小「モシ〳〵笑談をいひなさんな此下新田で盥原角左衛門さんといはれては名主から何番目とかにすはるといふ立派なお百姓さんでありながら親の行衛が知れぬといふて他人の娘を斷りなしに自分の娘にしたとはどうだ町内には名主もあれば自身番もある事だゝら夫々へかゝつて往つて預けて歸るが本統の深切といふもの親子が路頭ゑ迷ふのもみんなおめへさん故の事だ　覺「人の娘を一晩でも留めて見れば疵を附けたとより外は思はれないよ　多「夫は何をいふのでがんす連て來たのはたつた今まだ一晩も此家へは　小「イヤ宿屋斗りも三日の間泊つておつた其内に何があつたか知れるものか　多「何のおとつさんが何がゞんせう　角「イヤ多助モウ何事もいふには及ばぬシタガあなた方はどうしたらよいのでムり升る　小「此上州くんだり迄來た談を附た上妹を連て行のだ　覺「イヤ悴疵物にされた上は娘は連れて歸らねへよ　角「そんならわしの方へお貰ひ申て置升せう　覺「貰ふなら貰ふ樣に談を附けてお貰ひなさい　角「夫はどういふ譯でムり升る　覺「金のかゝつた娘だから欲くば金を出してお貰ひ　角「シテ金とおつしやるは　小「安く負けて三百両　多「エヽあの三百両出せといふのでがんすか　小「知れた事だ女が當の引手茶屋其娘を卷上げられては家業をする事が出來ねへから商賣替への元手の金三百両おら安いものだ　角「成程出せとおつしやるおら出さぬ事も厶り升せぬがあのお梅といふ娘は七つの年に中仙道の鴻の巣で勾引されたお榮といふ者　両人「ヤ　角「夫をどうしてお前さんが子に被成たので厶り升る　覺「サァ夫は勾引されたか何だか私は一向そんな事は　多「コレモウとぼけたつて駄目だよ○おつかさん爰へ來て被下升せ「ト奥よりお龜お梅の手を引出て來り」　お龜「お覺さんとやら　お前私をお忘れでは厶んすまいなァ　覺「本にお前は　小「チヽ違へねへさうだ　お梅「兄さんおつかさんも能う違い所へ來おさんしたおァ　小「覺さ

やァがれ是もみんな手めへ故だ　覺「親不孝のふんばりあまめ　鶴「ア、モシお角さん親不孝とは誰が事是は私が實の娘十三年其以前に鴻の巣の岡本にてお前さんが彼此と可愛がつて駕に乘せ連て往たなり行衛知れず　角「まだ夫斗りか惡者に慰まれうと仕た所を斗らず助けて連歸り今ではわしの女房なれば　多「娘に違ひがんそまい　覺「そんならあのお前さんは　小「今では愛の女房に　與「不思議な緣で十三年連添ふ夫の家とは知らずゆすりがましい事いふて來なさんをとは厚皮しい一体誰に沙汰をして自分の娘に仕なさんした　覺「マアおかみさん成程お腹が立升せうがあの時はお聞なさいよお前さんにはくれてからどう捜しても行衛が知れずあの子に聞けど何も分らず身寄りも知れず仕方がないから江戸へ連れて娘にしたは當り前ではあり升せんか　角「成程あなたのおつしやる通りわしもお前さん方の行衛も身寄りもない故連歸つて娘に仕たは御同然今實親が知れて見れば返してくれるで厶り升せう　覺「返そつて　どうも只では返され升せん私も江戸から路銀を使つて態々尋ねて來たのだも　小「ナイ〳〵おつかァお前は考考して居るから詰らねへ事斗りいつて居るせふれに任してだまつて居ろ旦那わつちの方じやァ七つの年からお袋が育上げ是から樂と思つて居る其恩義を忘りやァがつたあまつちよもあまつちよだ夫をこつちの内へ取り只歸さうといつちやァ談が出來升せん出る所へ出て談を附けやせう　角「夫は御勝手よなさるがよいあの時伊勢崎の錢屋といふ宿へ掛つて人手を分け捜して貰ひ升たれど娘の行衛が知れぬから八州方へお頼み申詮議をすると馬方の倉八松五郎源藏を縛つて調らべて下さつたら親子連の護摩の灰に三両づゝ金を貰つて頼まれたとの卽座の白狀　小「ヤ　角「サア其時の事を表向にさつしやるならこちらも廻ふ所じやがお前方の其腰へ繩の附くのは知れた事○サアろんな荒い事も仕度ない故五両の金を上げ升せうから草鞋錢と思つて娘を返したといふ書附を書て往つて被下升せ　覺「モシ七つの年から育てた上路銀を使つて尋ねて來て五両斗りの端金で歸れるこの歸られねへか考へて御覽なさい　多「歸れずば矢ッ張出る所へ出て貰ふ方がようがんす　小「エヽ手めへにいつて居るのじやァねへナイおつかァ彼此いつちやァ面倒だ大負けに負けて歸んねへ　覺「だつて親子二人の天窓へ五両とこあんまりだなァ　小「ハテ夫も是もおれの腹にあるあんまり强情を張るとよくねへこのらうんといつて置ねへ　覺「此あまめひとい目に逢はしやァがらァ　小「ナイ旦那わつちも道連の小平といつて是迄隨分臭い飯を喰つて來た微だから今の樣なおゞし文句に恐れて歸る者じやァねへがあまつちよめがふてくされて居やァがりやァ往つた所で始まらねへ草鞋錢で歸るとするから五両の金を出してくれねへ　角「如何にも金は進せ升せう悴硯箱を　多「ハイ○コレ五八硯箱を持て來い　五八「ハイ〳〵

○〔ト奥より五八硯箱を持出て來り「旦那樣樣子は奥て聞升たが五両の金でも取られると

惜しいものでがんすなア　角「コレ物をいへば面倒故何にもいはず硯箱をば　五「サア是で早く書け」〔ト小平書附を認め」　小「旦那是でいゝかへ〔ト書附を出す」　角「ムゝ是で宜しい夫では五両受取らつしやれ〔ト胴巻より金を出して渡す」　小「馬鹿〳〵しい話だなア　覺「是だからおれがいはねへ事じやアねへや　小「モウ文句をいひなさんな今日は此儘引込んでもおれにもちつとは腹があらア　多「金受取たら言分はない筈早〳〵往つて貰ひ升せう　梅「是迄邪見にされたを思へば顔を見てさへ恐ろしい　鶴「本に怕い人達じやわいなア　覺「何だ顔を見てさへ恐ろしい此あまめ育てられた恩を忘れやアがつて晒落た事をぬかしやアがるな　小「ハテ何といはうと書附を書て渡せば今は他人　覺「夫が手めへがどぢだから書附なんぞを渡すのだ今の樣な事ぬかしやアがると口でも引ッ裂てやりてへや　五「馬鹿こくな今日からは若旦那の大事の嫁御口を裂れてどうなるもんか　覺「ムゝうんならあまめは　小「こんな百姓の嗅アになりやアがるとは〔ト息込ひを」　五「エゝ何をそるのじや　小「馬鹿女め〔ト五八の横面をくらはす」　五「アイタゝゝゝ　小「覺へて居やアがれ　覺「サア小平行う〔ト向ふへ這入る」　五「ヤイ待てムのれどたまをぶつたぞ　角「コレ何をいふもかつたいに棒打捨て置たがよいわい又元はわれが突合から悪いのじや　五「じやて若旦那の嫁御になるのじやといつたらおつかねへ目を仕おつて　梅「サア夫といふも不斷から私に否らしい事ばつかり　鶴「大方其腹立であらうけれど　角「手を切たれば安心して　五「善は急げでがんすから　角「太左衛門にも談した上　鶴「ちつとも早う内祝言を　多「夫にしてもわの樣な　梅「悪い者の事故ま　五「何ぞ仇でもさらしは仕升べいか　角「何のそんな事もあるまい　鶴「とはいへ人の娘をば　梅「勾引した其上に　角「能くマア身が怕くもなく　多「金をゆすつて行うと〇おとつさん〇〔ト向ふへ思入あつて身顫ひするが木の頭「おつかねへ奴でがんすなア〔ト此樣樣宜し〳〵謐らへの合方にて拍子幕

四幕目

（沼田地蔵繩手雨舎の場
同　小竹屋座敷の場
庚申塚圓次郎殺しの場
下新田盡原住家の場）

役人替名

一盡原多助　一後家お鶴　一小竹屋の下女お住
一道連の小平　一多助女房お栄　一百姓圓次郎
一原丹次　一下男五八
一同丹三郎　一次立の仁助

本舞臺平舞臺後ろ黒幕敷釐具中松の大樹此下に大きなる石の立地蔵所々に稲村上下植込み

松の釣枝幕の内より多助羽織着流しの拵らへお龜お榮着流しの拵らへにて三人共珠數を持ち五八羽織着流しの拵らへにて松の下よ立かゝり雨を凌ぎ居る大雨電光雷の音にて幕明く

多助「おつこのさん困つたもんでがんすなァ　お龜「此邊は家もなし夫ゑ私は雷樣が大嫌ひだから　お榮「いつろ寺迄引返したらどうでムんせう　五八「夫よりはわしが東陽寺へ走つて歸つて傘を借て參り升べい　多「夫でゝ氣の毒ながらさうして貰ふべい　五「法事に呼ばれた御馳走の腹ごなしにドレ一走り往つて來べいか「ト橋掛りへ走り這入る」　多「おつかさん段々ひどくなつて來升が五八が傘を借て來る迄爰に濡れて居樣より三本榎の茶店迄は三町足らずいつそ向ふ迄走つてばどうでがんす　龜「さうせうかいなァ　多「われも田植に出る樣に裾をまくつて行け　榮「アイさうせうわいあァ「ト身繕ひをなし上手へ行かける下手より小平頬冠をなし出て來り」　小平「ナイ〳〵待ねへお梅よくおれを馬鹿に仕やァがつたな「ト頬冠を取る」　榮「ヤお前は兄さん　龜「本に日外かたりに來た　多「護摩の灰どんでがんしたか　小「喧ましいわへ安く踏んでも三百両の仕事を五両で濟したれど腹の内では業が煮へ此返報を仕ねへ内は江戸へ歸らぬと腹をすへ此界隈に足を留め樣子を覗つて居る内にどねた舅の角左衛門が三十五日の寺參りに出たを幸ひ今日ころと歸りを待た道連小平○ヤイ次立此あまだ爰へ來い「ト橋掛りより次立の仁助道樂者の拵らへにて出て來り」　仁助「夫じやァ兄貴此あまか　小「こいつが元はおれの妹さん〳〵口說ゝ去て置きやァがつて此芋堀の嗔アになりやアがつたのだ「ト お榮を蹴る」　榮「アレエ、　多「コレわしの女房を何とするのじや　小「べら坊め其あまは踏殺してもいゝ女だ　龜「人の娘を勾引し其上ならずゆすりに來た金が自由にならぬとて足蹴にするとはどうでムんす　多「女連れと侮つてあんまり馬鹿にさつしやるなあ　仁「何だ馬鹿にするなへン御てへ層な事をぬかすなへ「ト多助を蹴る」　多「コリャわし迄をどうするのでがんす　仁「おれの兄貴が目を掛た女を横取にするといふうぬが面の此ざまを見ろへ「ト又横面をはる」　多「アイタ又横面をくらはしたな　榮「アヽモシ多助さん相手にならぬがよいわいなァ　多「夫じやといふてあんまりじやがな　小「何があんまりだ利た風な事をぬかしやァがるなへ「ト打うとするを」　龜「コレ小平さんとやら如何に人のよい多助じやとて何の科もないものを手込めにするとはあんまりな恨みはこつちにあるわいなァ　小「馬鹿な事をぬかしやァがるなこつちの恨みの腹いせゑ女郎にでも叩き賣らにやァ埋草が出來ねへのだヤイ仁助おれは女をさらつて行くから手めへは野郎を叩きしめろ　仁「合點だ「ト多助の胸倉をしめあげる」　多「コレ無法な事をさつしやるな　小「あまはおれと一所に來い　榮「アレ誰ぞ來て下さんせ　龜「人殺じや〳〵「ト小平はお榮を引立にかゝりお龜多助は小平を支へ仁助は小平の邪魔をさせぬ摑合の立廻り宜しく此内向ふより丹次丹三郎脊割羽織大

小旅形りにて菅笠を冠り早足に出て來り」　丹次「今のは慥に女の泣聲　丹三郎「狼藉者に出會ひし者か」ト舞臺へ來り丹三郎は仁助を取て突退け丹次は小平を引退け又立かゝると扇にて小平の頭を打つ」　小「お待コリヤわつちをどう仕なさるのだ　仁「譯があつてする事だからうつちやつて置ておくんなせへ　龍「あなた方のお出がなくは娘を勾引される所　栄「お蔭樣を以升て災難を遁れ升てムり升るわいなア　丹「夫では是はお前の娘ゥ　多「ハイわしの嗅でムり升る　丹「コリヤ其方共は憎い奴じや悴両人共引ッくゝれ　丹三「心得升た　小「アゝモシ〳〵こいつ等のいふは嘘でムり升此女はわつちの妹でどせへやすが江戸で勾引して此下新田へ連れて來たのでお袋と二人して掛合に來升た所が土地の者が大勢寄つてわつちに赤恥をかゝせて歸さうと致し升から腹が立てたまらねへのでどせへやす　仁「夫があんまり氣の毒故友達の好身と思つて此男ゑ力を添へ取返してやらうと思つた所へあなた方がお出になつたのでどせへやすが　小「どうぞお武家樣のお情で取返して被下升せ　丹「夫は甚だ悪い奴だな　多「モシ殿樣あれは皆嘘でがんす　龍「是は私の實の娘でムり升るが七つの年にあいつに勾引されたのでムり升る　栄「どうぞお助け被成て被下升せ　小「何あなた方は御存じない故あんな事をぬかすのですが此女はわつちの妹ゑ違ひないので此間の江戸の火事に行衛の知れぬを段々聞き親子の者が路銀を使ひ遥々と尋ねて來て手ぶら編笠で歸られ升せうの多「イエ〳〵殿樣あの男がわし方へ此嘘を渡したといふ印形押た証文を渡したから五両の金をやつたのでがんす　小「何そんな事は決してないです　多「何のない事があるものか　女両人「夫に違ひなムり升せぬわいなア　丹「貴樣等のいふのはさつぱり分らぬが悴是はどういふ者であらう　丹三「是ゝろいつのいふのが偽りであり升　小「モシ〳〵若旦那ろんな事をいつちやア困り升ね　丹三「だまれ其方彼是申せども手前身性を知つて居るぞ　小「何だわつちの身性を知つて居るとは　丹三「身共の顔を存じておらう「ト笠を取る」　小「違げへねへおめへさんは能くわつちの所へ遊びに來た　栄「本に原さんでムり升たかいなア　多「夫ではお栄此お方を　龍「お前知つてお出かへ　栄「引手茶屋へお出被成たお馴染のお客樣　丹三「誠に親人の手前では言にくい事なれど江戸動番の其間三田の仇屋といふ茶屋へ折々參つて知つて居る其家のろやつは悴にて道連の小平といふ譏摩の灰母も餘程の悪黨者此お梅といふ娘は慥幼年の頃勾引した者とやら　小「何だおれを護摩の灰だと　丹三「ぐす〳〵申さば手討に致すぞ　小「べら坊め足があらアざまア見やアがれ「ト両人下手へ逃て這入る」　多「誠にお陰を以升て有難うムり升る　栄「夫にしても原さんに今日の危い難義をば救ふてお貰ひ申さうとは夢にも存じ升せなんだわいなア　龍「シテ旦那樣にはどちらの御藩中で居らつしやり升　丹「手前は當沼田藩中ゑて原丹治と申者　多「夫では御領主樣の御家中でがんすかわしは此下新

田の百姓で鹽原角左衛門の悴多助といふ者でがんすが以來お心安く願ひ升 丹三「其鹽原角左衛門とは兼て聞に承りし大百姓其子息の嫁とあればお前さん片附たのか 栄「ハイ夫には段々樣子がムり升て 鶴「今日三十五日の佛の差圖で嫁に致してムり升る 丹「シテ今日の佛といふと 多「わしの親仁でがんす 丹「スリヤ角左衛門にと沒したか夫は無憂傷な事であらう 鶴「然し多助旦那樣へ お禮と申ては失禮なれど お近附の其爲に何所ぞて一寸なア一口 多「どうぞさうして下せへまし 丹「イヤ心配なら無用にして〳〵りやれ 鶴「イエ娘は若旦那とお馴染といひお近附の爲御迷惑でもムり升せうがお供をさして被下升せ 栄「原さんどうぞあなたよりお勸め被成て被下升せ 丹三「親人折角の事なればお出被成升せ 丹「さうか夫ハ氣の毒じやな 鶴「何のこちらこそ御迷惑をも顧みずお氣の毒樣でムり升る○多助お前も一所よお出 多「ヘイわしもお供を仕度うがんすが酒は呑ます口不調法あり又昨日頼まれた小麥をば元村へ送る約束をしてがんすからわしは失禮をするでお前さんお榮を連てお供をして下せへまし 鶴「夫から五八に引しておやりなねへ 多「イヤあれも今日は法事で勞れて居るでがんすからわしが引ていつて來升よ 丹三「夫ではお前は歸るのか 丹「一所に來ればよいに 多「めへつた所が御酒が不調法でがんすから駄目でがんす 鶴「夫では私はお榮を連てお供をするからお前は約束の小麥をば 多「ハイさうするでがんす 丹「夫にしても供の者はどうしたか 丹三「モウ見へさうな者ですが〔ト向ふより旅形りの仲間兩掛をかつぎ足早に出て來り〕 仲間「旦那樣雨を止しており升たので大きに遲うなり升た 丹「さうであつたか着替を出さねばならぬから手前も一所に往つてくれ 仲「何所ぞへお立寄になるのでムり升るか 丹三「此婦人と同道致して參るのじや 栄「夫では雨の止だ内 鶴「失禮ながら旦那樣 丹「然らば悴 丹「父上樣 多「わしも其所迄お供をば 仲「サアお越し被成升せ〔ト皆々上手へ這入る橋掛りより小平仁助出て來り〕 小平「今日斗りはと思つた所飛だ彌次馬が出やアがつて無茶苦茶にして仕舞やアがつた何に附けてもあまつちよめ癪にさはつてこらへられねへ 仁「夫はさうたらう箸を附やアと思つた女を五兩の金で百姓の女房に取られちやア江戸ッ子の面穢しだ 小「だから腹が立てならねへのだ〔ト下手より五八東陽寺と印せし番傘を三本かつぎ出て來り〕 五八「若旦那お待遠でがんした傘を借て來やしたらまんまと雨が止み升たモシ若旦那おかみさん 小「うぬは鹽原の下男だな 五「ナニさういふはかたりの男 小「かたりとは誰が事だ〔ト胸倉を捕てしめる〕 五「コレおれをどうするのじや 小「坊主が憎けりや袈裟迄だ 仁「ろんならろいつは鹽原の 小「奉公人でも胸糞が悪いや〔ト天窓をくらはす〕 五「コリヤ又どたまを叩きおつたな 仁「おれの足も戴いて置け〔ト蹴倒す〕 五「コリヤ今日は堪忍がなんねへぞ〔ト傘にて折てかゝるを五平傘を押へる是を兩車にあり〕 仁「兄貴又降つ

て來たせ　小「丁度幸ひ此傘へ這入て行け　五「コリヤ寺から借て來たのだ　小「喧しいわへ○〔ト傘を引たくつて開くが道具替りの知らせ〕「サア出掛けべへ　五「泥坊〳〵〔トわめく此模樣宜しく禪の動雨車にて道具ぶん廻す

本舞臺平舞臺通りの櫛形欄間見附床の間地袋夏模樣の襖上下折廻りの家体爰に田舍めきし酒肴の道具を置き丹次丹三郎は着流しお榮は貸浴衣形りお龜同じ拵らへにて手紙を書き居る此傍にお住料理屋の下女の拵らへにて住居此見得宿場の騷唄にて道具納る　お榮「原さん誠に久し振りにてお酌を致し升おア　丹三郎「是も時の災難であらう　榮「アレ其樣な憎らしい事を　丹次「コリヤ悴如何に江戸にて馴染といへど左樣な失禮な事を　榮「イヱ大事ムり升せぬわいなア〔ト酌をする此内お龜手紙を書仕舞」　龜「夫では女中さん今頼んだ使の者にお前の着物に此手紙を添へ着替の着物を取て來る樣に言附けて下さんせ　お住「畏り升た一体あのお召はどう遊ばして泥まぶれになつたのでムり升　龜「あれは思ひがけない災難に出會ふたを此旦那樣方のお蔭にて助かつたのでムんすわいなア　住「夫はマア怕い事でムり升たなア　龜「夫では早くやつて下さんせ　住「ハイ畏り升てムり升るわいおア〔ト手紙を持奥へ這入る」　龜「大きに失禮を致し升たサアお戴き申升せう　丹「悴其猪口をお上げ申せ　丹三「夫はおつしやらいでも手前の爲にと斯ういふ美しい嫁の親○〔トお榮の手を捕り〕「聟姑の間柄なら何事置でも一つ獻上〔ト猪口を出す〕　丹「是はしたり悴座興とはいひながら主ある婦人に戯ひれにも左樣な事を申て間違にでもなつては相成らぬ　龜「イヱ〳〵其夫といふも私の實の甥決して遠慮のある者ではムり升せぬ　丹「左樣でもあらうなれど夫婦の中といふものは又格別おものなれば　榮「其夫婦といへばおつかさん此若旦那の樣なお方と連添ふたら嘸嬉しい事でムんせう○チヤ私とした事が御酒に酔ふて失禮な事ばつかりヲホ〳〵原さん御免被成いよ〔ト猪口を出す〕　丹三「是は思ひさしとは有難いな　龜「何と旦那樣お馴染程よいものゝムり升せぬなア然し憚りながら〔ト猪口をさす〕　丹「成程江戸での馴染といふも大分道樂を致しかつた故勘當とは存じたなれど實は親も餘り堅くない方故勘當も致し兼今度伊香保へ湯治に參つたも嫁の見合旁なれど我儘者で氣に入らぬには困り切た　龜「夫では若旦那樣は御獨身でムり升るか　丹「親子共に獨身者じや　丹三「おとつさん何も此席で左樣な事をおつしやらいでも宜しいではムり升せぬか妻なれば少しと撰みも致し升せうが屋敷奥いの嫁斗りは眞平御免だ　榮「アレお武家樣でありながらお屋敷方がお嫌ひとは一体どの樣なお嫁がお好きなのでムり升る　丹三「おれの好きなは斯ういふ嫁じや〔トお榮の手を捕る」　榮「アレ文御笑談ばつかり　丹三「おとつさん暫く御免を　丹「何所へ參る　丹三「一寸憚りへ　龜「お榮やお附申てお上げ　榮「アイようムんすわいなア〔ト兩人下手へ這入る」　丹「夫にしても

まだ御亭主に別れてから間がないのじやな　龜「ハイ誠に私も不仕合せな者でムり升て十三年以前に先の夫に死別れ其上娘は勾引され角左衛門が後妻となり別れし娘に逢ふと間もなく夫の病死其墓詣の歸るさに御恩を受けし今日の仕合せ有難う存じ升る　丹「何さしてもおい事に斯樣に馳走に相成り誠に以て氣の毒千万　龜「是は又お堅いお詞もそつとどうぞお碎け遊ばせ私が思ひざしを致し升せうわいなァ〔トさす〕　丹「斯くあてやうなるお内義の思ひざしに預つて是が呑まずに居られうか　龜「そんならあなたお否でなく　丹「浪々とおつぎ下されし○〔トお龜酌をする〕「然しお前さんは幾つにおなりだ御器量といひ女の盛りを後家で置くは惜しい者何と誘引水あらばいなんと思ふ心はないか　龜「何のマア私の樣な者を誰が拂ひ人がムり升せうど　お「あア　丹「若しあつたらどうおさる　龜「サア夫もあなたの樣なお方樣なら　丹「ヤ　龜「サアどうムり升せうやら〔トお住盃に精進物の肴を鉢に入れ乘せ持出て來る〕　住「お詰らへのお精進物が出來升てムり升る　龜「おいしい物をたんと持て來て下さんせ　住「ハイ　龜「一寸お待ち是は少し手りだけれど〔ト金を紙に包みお住の前へやる〕　住「是は有難う存じ升る〔ト這入る〕　龜「モシ旦那よいお肴が參り升た　丹「成程今日は三十五日の精進日　龜「其精進も打捨て私しやあなたと　丹「然らば身共と　龜「心解合ふ雞卵酒　丹「精進落しを○〔ト手を捕るを道具替りの知らせ「させずとなるまい〔ト此摸樣宜敷く唄にて此道具ぶん廻す

本舞臺三間大和葺の小庇附見附上の方二間腰張りの茶壁下の方一間二枚の唐紙下手葦下ろし家根の茶室前側の下手にじり上り此横手茶立口下地窓いつもの所風雅なる切戸四つ目垣植込みつくばいの手水鉢木燈籠上手廊下此見附腰板の鼠壁是に半月形の掛行燈此行當り便所の心にて唐金の手水鉢釣手拭廊下取合袖垣女竹の植込み都て小竹屋奥座敷の摸樣二重に丹三郎お榮居て宿場驛唄にて道具納る　丹三郎「カウお梅さんではないお榮さん何も此座敷へ逃込んで小さくなつて居ずといゝじやないの　お榮「夫でもあなたが私に水をかけたり惡い事斗り被成升もの　丹三「夫がお主と濡れ度といふやつさ　榮「アヲあんお嘘ばつかり　丹三「嘘とは何だお前がまだ引手茶屋を仕て居る時分遊びに行く度手の一つ位は握らした事もあつたらう夫も今では立派な大百姓を亭主に持たといつて此丹三郎をさうしてくれずともよさゝうなものだ　榮「アヲ又そんな否味な事斗り明けて申せば七つの年に別れたる實の母に巡り合ひ其おつかさんの連合が斯うせいといはれ升から據なく女房になりし私の戯夫でなくば何のマア土臭い男をは　丹三「味くいつて居るせ可愛くなくつて一日も居られるものゝ　榮「夫でも從弟同士でムり升もの　丹三「其從弟同士に鴨の味があればこそ江戸で育つた娘で居ながら此山の中の百姓と夫婦になるとは物好きなよつぽど茶人な女だから　榮「原さん何

もあなたと譯のあつた中でもなし百姓と夫婦になればとて濟ぬの茶人のといはれる筈もあ
ま夫も浮世の義理がなくば私しやとてちつとは好た男をば亭主に持度ムんそわいなア　丹三
「好た亭主とは誰だ〳〵　柔「誰でも宜ま いよ　丹三「イヤ宜ま いでは濟まされぬ立派なお百姓
の夫があるに外に持度亭主があるとは不埒な女だ此茶の間で其詮議を致さにやならぬ一所
にお出　柔「夫でもおつかさんに知れたら叱られ升わいなア　丹三「何をして叱られるのだ　柔「
サア何をなさるか存じ升せねど誰にもいふて下さり升なへ　丹三「誰が何をいふものか　柔「
急度でムんすなア　丹三「ハテ來なといふに（ト下手茶立口の内へ這入る下手の唐紙を明け
お龜丹次出て來り」お龜「旦那私は醉升たよ　丹次「道理で顏を眞赤にして居るま　龜「是はあ
なたがあんな事を被成升て羞かしうてなり升せぬ　丹「ヘン羞かしいといふ年か（ト丹次上
手へ這入るお龜手を洗ひながら下手の聲が耳に這入りし思入あつて抜足して覗き見て悔り
なし上手へ來る丹次出て來り手を洗ふ」龜「モシ旦那大變な事が出來升た　丹「何大變な事と
は　龜「一寸來て御覽被成升せいな（ト下手へ連來り丹次内を見て」　丹「是はけしからん　龜「
濡れぬ先こそ露をも厭へモウ斯うなつたら若旦那を娘の聟に被下升せ　丹「エヽ　龜「サア最
前からの樣子を見るに娘もどうか若旦那に心あり氣な素振り目使ひ夫なればこそ今のしき
何と聟に被下升せぬか　丹「デモ娘には多助といふ　龜「サア亭主のある身よ違ひはなけれど

山家に育つた男をば持たすは可愛想と思ひ升たが夫には義理の柵みにせかれて水の出花の
娘を添はし升たも此身の甥今では夫も死去せられ外に義理ある者もなく成らう事なら好た
男を亭主に持たしてやり度さ故若旦那と娘を夫婦に仕升たらあなたと私の其中もナアモシ
旦那　丹「そりやモウ音に聞へし下新田の舊家にて田地の高も三百石上みへは病身と言立れ
ば如何樣とも相成れど現在亭主のある女に　龜「其所が一つの御相談○多助を殺せば何でも
ない事　丹「エヽ　龜「サア娘に斯ういふ不埒があれば知れずにはおり升せい知れたら田舍と
いふものは村の者が一致して竹鎗でも持出せば御子息の身にもかゝはる事　丹「成程悴の身
を思へは災ひの根を斷つて　龜「ろんなら彌々多助をば　丹「如何にも　龜「殺して仕舞へば世
間晴れ　丹「枕を高く閨の樂しみ　龜「マア一服お上り被成升せ（ト下手より五八風呂敷包を
持出て來り」五八「盛原のおかみさん何所にお出でがんす　龜「五八かへ私は爰に居るよ　五「
チヽおかみさん着物を持てめへりやした　龜「夫い御苦勞であつたさうして多助はへ　五「若
旦那は小麥を積で元村へ然し若旦那に聞やしたらひどい目に會つたさうでがんすがわしも
此間の惡者にひどい目に合ひやした　龜「其難義も爰にお出の旦那に助けられ其お禮に此家
へ　五「さうてがんそか是は始めてお目にかゝり升る今日はでけへ御深切に相成やして有難
う　丹「イヤおれも斗らず通合して　五「さうでがんすか○おかみさん命の親の旦那樣たんと

御馳走をさつしやり升せ　鶴「夫は勿論せいでかいなア　五「夫では着物は置て行升殿様左様なら「ト橋掛りへ這入る跡時の鐘になり」　鶴「アリヤモウ暮六つ　丹「時刻も丁度宵月の頃も雨夜を幸ひに　鶴「夫ではどうぞ御苦勞ながら　丹「シテ又歸りの道筋は　鶴「一筋縄手の庚申塚　丹「然ちば歸りを待受けて　鶴「馬の桐油に盃原と　丹「印してあるか　鶴「ハイ夫を見當に　丹「たつた一討　鶴「モシ女中さん〳〵「ト手を叩く お住出て來り」　住「何ぞ御用でムり升るか　鶴「此旦那様がお歸り故最前のお腰の物を　丹「次手に傘を貸てくれ傘は印のないのがいゝぞ　住「畏り升た「ト這入る」　鶴「夫では旦那若旦那と一所に内に待升れば是非共今晩お歸りを　丹「如何にも仕止めし其上にて　鶴「今宵とゆつくり「ト奥よりお住大小傘を持出て來り」　お住「ハイお腰の物を持て參り升たお傘は是で宜しうムり升るか「ト丹治傘を取り」　丹「ナヽ是でよい〳〵〇「ト お住奥へ這入る「夫では時刻の遲れぬ内　鶴「多助の歸りを待受けて　丹「最期の場所と庚申塚　鶴「其吉左右を　丹「ナヽ〇「トツカ〳〵と花道へ行傘を開くが道具替りの知らせ「待て居やれ「ト雨の音烈しく丹次向ふへ走り這入る此摸様宜しく道具ぶん廻す

本舞臺平舞臺後ろ黒幕此前松の立木同じく釣枝本雨木魚入りの合方雷の音にて道具納る「ト西の通ひ道より多助脚半草鞋襦絆の上へ糸立を着たる拵らへよて菅笠を冠り摠原と印せし桐油をかけし馬を曳き出て來り」　多助「アヽ能く降るこんだなア夫にまだ雷がごろつくとはどういふものかコレ青よ早く歩んでくれ〇「ト中の通ひ道へかゝり曳け共馬歩まぬ故「コレ青どうしたものだ荷は皆下ろして仕舞つたから歩けねへ事はあるめへ此通り日は暮れるし雨は降るしおつかさんが雷嫌ひだから歩んでくれといふに困るじやないか「ト西の通ひ道より圓次郎御膳籠をかつぎ出て來り」　圓次郎「其所に居るは多助どんか　多「さういふは圓次どんか　圓「お前何をして居るのだ　多「青が歩まねへので困つて居る　圓「コレ青どうした歩んでくれ「ト是にて馬歩き出して花道へ行く」　多「圓次どんお前のいふ事は聞おつた〇アレ又跡へ下るが青々　圓「コリヤ困つたなおれ見てくれべい〇「ト御膳籠をおろし「コレ青どうした足でもどうかなつて居るか〇ハイ〳〵〇多助どん歩くが　多「誠に有難うがんすサア一所に參り升べい〇「ト多助替つて馬の口を取り曳けども歩まず「アレ又とまつた〳〵　圓「今おれが曳たら歩くじやねへか青動かねへか〇「ト替つて口を取り「ハイ〳〵〇多助どん歩くが此馬おれが曳べいわれ此荷をかついでくれ　多「ハアさうして下せへ此荷はおれがかついで行升べい　圓「ハイ〳〵〳〵〳〵「ト馬を曳き上手へ這入る」　多「おれ馬は曳くけれども肩が利ぬから待て下せへさうシヤッ〳〵曳て往つてナイ圓次どん〳〵「ト上手へ這入る是を知らせにて前側の松並木を上手へ引て取り黒幕を切て落す

本舞臺平舞臺具中瓦家根の辻壹」此中青面金剛の立石此前石の花立壹の左右に馬頭觀世音廿三夜燈榎の大樹向ふ闇ぼうしの在体の遠見上下藪壹稻村都て庚申塚の体本雨雷の音電にて道具納る〔ト上手より圓次郎馬を曳き出て來り跡を見返り〕圓次郎「何をして居るかどうしたのか爰で待合して行べい〔ト立止る上手稻村の蔭より丹次頬冠をなし窺ひ出て來り後ろより笠越しに頭へ切附ける笠仕掛けにて裂け頭より血汐流れ馬の綱を放す馬下手へ逃げて這入り圓次郎苦しみ落入る丹次止めを刺す此仕組宜しく右の鳴物にて道具ぶん廻す

本舞臺前幕の盤原門前の道具尤門の扉しめあり爰に馬イみ居る右の鳴物にて道具納る〔ト向ふより多助御前籠をかつぎ出て來り〕多助「圓次郎どんは馬を居けてくれたか知らん○〕ト舞臺へ來り「ヲヽ青われ獨り爰へ來て圓次どんはどうしたあの男も人の大事の馬を爰へ放して置て歸るといふがあるものか〔ト門の内より五八番傘をさし弓張提灯を持出て來り〕五八「其所に居るのは若旦那じやがんせんか　多「五八何所へ行くのだ　五「あんたの歸りが遲いで迎ひに行うと思つて　多「五八聞てくれ歸りに庚申塚の手前で馬が動かねへ所へ圓次どんが通りかゝり曳てくれたら歩くからおれ曳てやるべいとおれ此御膳籠をかつぐ内馬を曳て往つて仕舞た故今爰へ歸つて見れば青斗り居て圓次どんの見へぬのは内へ歸つたであらうわれ此荷を居けてやつてくれ　五「そんなら往つて來升べい　多「さうしておつかさんは歸つたか　五「ハイさつきの殿樣の息子どんを連て歸つて是から内で又馳走をするといつて　多「夫ではおれもお目にかゝつてお禮をいはねばならぬ　五「夫じやア若旦那　多「ちつとも早う此道具ぶん廻す

本舞臺常足の二重見附床の間違棚小摸樣の襖前側雨戸上手鼠壁の中窓是にも雨戸下手藁家根三尺の鼠壁此次一間の臺所口繩簾をかけ上の方に石の手水鉢都て盤原住家奥の間の体矢張り本雨にて道具納る〔ト上手より丹次出て來り戸を叩く是よりお熊寐間着形りにて戸を明け〕お熊「あなたは旦那　丹次「シイ　熊「首尾は如何でムり升た　丹「手もなくたつた一討に　熊「さうしてあなたはどちらから　丹「裏手の垣根を押破り這入つて參つた　熊「夫は御苦勞でムり升たどうぞこちらへ〔ト前側の雨戸を取退ける内に寐御座を敷し布團の上に枕を並ら べ酒肴の道具を置き行燈灯しあり〕丹「是はお支度が調つて居るな　熊「サアあいつさへ殺して仕舞へば誰に遠慮もない内故お疲れ休めのお寐酒を　丹「夫ハ有難い足を洗つて寛くりと○〔ト手水鉢にて足を洗て二重へ上り着替をなし〕「よつぽどひどひ雨であつた　熊「嘸お困りでムり升たらうなア　丹「此雨であればこそ馬の桐油に盤原と書た名前を目印にやつてのけたる今夜の上首尾　熊「是で娘も此身も安心　丹「さうして悴は　熊「委細の事をお談申て宵

から其間で娘と一所に 丹「モウ察たのか 糟「ハイ（ト下手より多助出て來る）」多助「おつかさん只今（ト両人恟りなし」 糟「ヤアお前は多助 丹「どうして爰へは 多「ハイ元村から歸りがけ馬が歩かぬので圓次郎どんに曳て貰ひ夫で遲くなりやした 糟「エヽろんなら馬を目印に 丹「庚申塚でやつたのは（ト上手中窓より両人顔を出し」 丹三郎「聞し談に相違して お榮「アノ人違ひであつたるか 多「そちは女房あなたはさつきの若旦那 糟「今夜はお止め申たわいなア 多「若旦那のお出は五八に聞たが此殿様のお出とは 丹「ヤ 多「見れば枕も二つあり殊に一間のアノ内には 丹三「榮「エヽ（ト恟りするお龜明りを吹消すが木の頭」 糟「多助明りを持てお出 多「ハイようがんすよ（ト お榮は丹三郎お龜は丹次に呀く多助怪しむ此模様宜しく合方にて拍子幕

五幕目（下新田居酒屋の場）（壇原多助内の場）

役人替名

一壇原多助　一百姓七兵衛　一百姓平右衛門
一原丹三郎　一同八十　一子守お徳
一後家お龜　一同九蔵　一下男五八
一太左衛門娘お作　一居酒屋婆々小菊　一壇原太左衛門
一多助女房お榮　一百姓紋左衛門　竹本速中
一下女お爲　一同榮之進
一百姓六助　一同勘太郎

本舞臺三間の間軒に杉の葉の酒林を釣り角の中に十の字十文字屋と印せし紺暖簾を掛けし落間の家体見附酒樽の書割縄暖簾段椅子前側下の方一間の丸太格子是に上酒御小賣とせし看板其外酢醤油味噌壇豆腐崑蒟蒻染類の看板を掛け下手常足の二重前側丸太格子上手在体の片遠見在方居酒屋の体爰に紋左衛門榮之進勘太郎平右衛門羽織着流し百姓の拵らへにて床机に腰をかけ小菊居酒屋婆々ァの拵らへにて立かゝり居る在郷めいたる唄にて暮明く小菊「どなたも今日は御苦勞樣でムり升る下新田の壇原さんの御分家太左衛門さんもお出でムり升る二階へお上り被成升せ 紋左衛門「ハァいつもながら寄合には早い人じやな 榮之進「夫よしても今年は角左衛門どんが死なしやつたので席順はどうしたものであらう 勘太郎「夫は跡取の多助どんがあれば席順は先格の通りにして置つしやい 平右衛門「ろんなら角左衛門どんの所へ多助どんをすへるかな 紋「下新田では草分同樣の舊家名主から三番目へすへたとて誰が指のさし人があらうか 榮「夫は尤の事なれど何うも此頃は風聞が悪いからな 糟「

夫は後家のお龜の事　平「イヤ聞けば多助どんの嫁もどうやら　紋「ア、コレ二階には伯父の太左衛門殿が來てあれはろんな事はいはつしやるな　勘「夫ではお釜畑の平右衛門どん　平「イヤ〳〵マア星の塔の衆之進どんから上らつしやい　衆「イヤ〳〵あんたから　紋「夫では順にわしから　勘「小菊さん今日はお邪魔で　四人「ムるのう　小「どなたも寛りとして被下升せ　〔ト四人階子を上り後ろへ這入る向ふより丹三郎大小編笠にて釣竿をかつぎビクを提げ出て來り〕　丹三郎「大方今日もいつもの所へ使が來て居るに違ひはない○〔ト舞臺へ來り〕婆さん今日も暑いお　小「ヲ、是はいつもお出のお殿樣今日はお釣でムり升るか　丹「今日は非番だから釣に來たがいつもの使は來なかつたか　小「ハイあんたを尋ねて最前のら子守が度々參り升た　丹「さうか夫では一盃呑で居る內又來るかも知れないな一盃つけてくれ　小「ハイ畏り升た今日乙村の寄合がムり升てお氣の毒樣でムり升るが夫で御辛抱被成て被下升せ　丹「顏がさしてはならんから爰へ對立を立てゝくれ〔ト二重へ上る〕　小「夫では對立を斯うして呼升る〔ト對立を置くこなし向ふより多助羽織着流し跡より六助七兵衛八十九藏菅笠を冠り鋤鍬を擔ぎ出て來り〕　六助「其所へ行つしやるは盤原の小旦那　四人「多助さんではがんせんか　多助「ヲ、誰かと思へば村の衆精の出る事でがんすなア　六「イヤモウわし等は、あんた方とは違ひ　七兵衛「皆小前の者でがんすから　八十「稼がにやア水も呑れねでがんす

九藏「さうして多助樣今日は　四人「寄合へ行つしやるのでムりやすか　多「サア去年迄は親父樣が出たけれど今年はわしが行かにやなんねへでがんす　六「誠にあんたもお氣の毒な譯で四人「がんすなア　多「ハイ親父に死なれ升て　十「イヤ親父樣は壽命づく　八「あんたの身が氣の毒だといつて　九「村一統が言暮らして　四人「おるのでがんす　多「そりや何をでがんす　六「そんならあんたはしんねへのでがんすか　七「六助どん小旦那の爲だに因て　三人「いつて上げなんしよ　六「夫では多助さんあれ迄いつて　四人「下せへやし〔ト舞臺へ來る此內小菊酒肴を下手家体へ運ぶ事あつて奥へ這入る〕　多「シテわしへの用事とは　六「外の事でもねへのでがんもがあんたおかゝ樣や嫁樣の事を御存じでがんすか　多「エ○〔トぎつくりして氣を變へ〕「どうしたんでがんす　六「あんたの所へ原丹次に丹三郎といふ親子の侍が行くでがんせう　九「一体あれは何しよ行くのか知つてゞがんすか　多「サアあれは去年寺參りの歸りにでけへ難義を助けられ其縁で遊びに來さつしやるのでがんす　六「夫があんたは人がえいといつて村中が氣の毒がつて居るのでがんもあの侍親子はおめへ樣のかゝ樣や嫁御と惡い事をして居るは誰知らぬ者もねへのでがんす　七「こんな事はお心易い中でもいはれる事ではねへでがんすがあんまりあんたが馬鹿にされるが口惜しいからいふのでがんす　八「早く太左衛門樣よぶちまけておかゝ樣は隱居さすか尼にさつしやるか內に置ては爲になんねへヨ

りじやがんせん角左衛門様の位牌が汚れるでがんす　九「其位牌斗りならいゝでがんすがあんたの顔迄汚れる事でかんす第一嫁様も憎い奴でがんすから　四人「出して仕舞ふがようがんす」ト此内多助術なき思入あつて氣を變へ」　多「是はしたり村の衆わしが所のおつかさんや嗅はろんな者ではおんぜん科ない者に悪名附け親子夫婦の縁を切らうと水をさすのでがんすのか　十「コレ多助様夫は何をいふのでがんす決してわし等が悪氣でいふのじやねへでがんす　六「あんたの心に迷ひがあつてい　四人「なりましねへ　多「假令どんなに焚附けやうが心は迷はぬ鹽原多助重ねていふて下せへやすな　六「コリヤモウ駄目だ何にもいはねがようがんす併しながら多助様　七「必らず後悔　四人「さつしやり升なや　多「何の後悔仕升べい　四人「アヽ情ないこんだあア」ト橋掛りへ這入る」　多「村の衆能ういふて下せへやしたわしも去年から知り抜ては居るけれど是を荒立る其時は血で血を洗ふ家の恥死なれた養父に濟まぬと思ひ知つて知らぬ顔すれど段々に附上りわしを邪見にすると斗り口惜しいとは思へども相手は御領主土岐様の御家來の事なれば迂濶に言立る事も出來ずいつろ家を駈出さうと思へども左すれば原親子が乗込み終には鹽原の家も必らず潰れて仕舞に違ひはない其家を潰してと八つの時から育てられた親父様に濟まぬに因て孝行を盡したなら母も身に恥ぢ直らうかと夫ばつかりを楽しみに胸をさすつておるのでがんす決してお前方の深切を無足にもるじやアねへのでがんす右の譯故免るして下せへ〳〵「ト男泣に泣く橋掛りよりお作お爲出て來り」　お爲「アレ又本家の若旦那が泣てゝがんを泣なら一所に泣ろべつて泣つせへと　お嬢様いはつせへよ「ト突やる」　お作「アレお爲浮雲わいなア　多「チヽお作さんでがんすかお作「多助さん今日は村の寄合でお出なさんしたのでムんすこのへ　多「サアいつもは親父が來たのだけれど今年は親父がない故に　作「夫で泣て居たのでムんすか　多「エヽ　作「無悔去い事でムんせうなア　多「何だわしが悔しいとは　作「サア義理を留ふてあなたは何にもおつしやらねど私しや伯母さんの事もお榮さんの事も能う知つており升わいなア」ト多助又いはれてはならぬといふ思入あつて　多「ドレわしは寄合の席へ　爲「イエ〳〵あんたをやる事はならんのでがんすあんたはつれない男でがんすなア○去年中から嬢様かおつ惚れて居る事は知つてゝがんせう夫にお榮様を嫁御に貰はしやつては濟まぬ事だよ夫もいゝでがんすが其嫁御様には間男して居るでがんせう　作「アヽコレお爲其様な事を　爲「何皆知つて居る事でがんすそんな自墮落お嗅に義理立して死ぬ程惚れて居る嬢様を嫌はしやつて毎日送る手紙の返事を終に一度さつしやらねへは道理に叶はぬではがんせぬか今日は是非共お嬢様の此手紙の返事をば聞して下さいよ「ト袂を渡さうとするを多助押返し」　多「又こんな事をしてはおれ困るよ伯父様は物堅い人だに因て決してよさつせへといふて居るのに　作「サアあな

たはよせとおつしやれど思切られぬ私の因果　多「お前は圓次郎どんと夫婦になる筈であつたのにこんな事をしては濟まぬでがんす　作「サア其圓次郎さんは庚申塚で　多「サア切られて死だは氣の毒なれどわしとは深い友達中其圓次どんの女房と定まつて居たお前とわしと若しろんな事でもあつては世間は固より佛へ對しても言譯がないでがんす　作「そんならあなたはどうあつても　多「是ばつかりは免るして下さい　多「マアろんな事をおつしやらねへで「ト袖を振切る是にて弥落る「伯母さん今日は「ト階子を上り後ろへ這入る」　多「エ、しつこいがな○「ト袖を振切る是にて弥落レお爲所詮多助さんは得心して下さんせぬわいなア　多「イエ〳〵今日斗りはあんたの手紙を袂へねじ込んで置やしたからあの手紙を讀みやしたら色よい返事をさつしやるでがんせう　作「ろんなら夫を樂しみに　多「歸つて返事をお待なさへまし　作「どうぞ嬉しいお返事を仕て下さんすればよいがなア「ト お作お爲橋掛りへ這入る下手の二重より丹三郎出て來り」丹三郎「おれが爰に居るとも知らず土百姓の詞を聞けばおとつさんと鹽原の後家の中もおれとお榮の譯ある事も多助を始め皆能く知つて居る樣子滅多に油斷はならねへわへ○「ト落てあるみを見て拾取り「是は慥に今の娘が鹽原多助へ送つた弥取て置たら何ぞの役に立だらう「ト袂へ入れる奥より小菊出て來り」小菊「殿樣お銚子をつけ升せうか　丹「イヤモウ酒はいゝ勘定は一所ゑ仕やう「ト橋掛りよりお德赤子を十文字に脊負ひ出て來り」お德「伯母さん又來たよ　小「ナ、お出かモシ最前お話申升たは此子守でムり升る　丹「ム、手前何所から來た　德「アノ私はアノ何から頼まれて「ト言兼る」　丹「よし〳〵分つて居る手紙でも持つて來たか　德「アイ此手紙を丹三郎さんといふ殿樣にしつかりと渡せといふて「ト手紙を出す」　丹「さうか爰へ寄越せ　德「あんたが丹三郎さんに違ひないかへ　丹「何ぢをいふものゝ德「ろんなら「ト手紙を渡す丹三郎開き見て」丹「よし〳〵跡から行くといつてくれ　德「イエ一所に連れて歸るのだといふてゞあつた故一所に行かぬとお駄賃が貰へぬもの　丹「夫では一所ゑいつてやらう「ト手紙を丸めて袂へ入れやうとして落す」　小「夫ではモウお歸りで厶り升るか　丹「又明後日來るから其ビクと釣竿を預つて置てくれ　小「畏り升て厶り升る丹「ろんなら行うか「ト丹三郎お德橋掛りへ這入る階子より太左衛門羽織着流しにて出て來り」　太左衛門「まだ歎際の新太どんは見へぬかな　小「ヲ、太左衛門樣で厶り升るかな宜だお見へでは厶り升せぬ　太「何をして居るか併し酒は入らんが何かたべる物を二階へ出して下さい　小「畏り升て厶り升る「ト奥へ這入る太左衛門丹三郎が落せし手紙を拾取り」　太「丹三郎樣參るお榮より○「ト恟りして文言を譯ひこなしあつて「ヤ此文面でゑ世間の噂に違ひなくお榮といひお龜迄此丹三郎親子の者と道ならぬ不義いたづらの迎ひの弥「ト多助階子

より下りて來り」多助「伯父さん其所にでがんすの〔ト太左衛門恂りして手紙を袂へ隠し〕太「ナ、多助か　多「あんた何して居るんでがんす　太「叡際の新太どんが見へぬ故　多「夫を待て居るのでがんすか　太「こんな亭主のあるものを　多「エヽ　太「多助　多「ハイ〔ト太左衛門ほろりとするのが道具替りの知らせ　太「思へば憎いやつじやなァ〔ト思入多助は合點の行ぬこなし此摸樣宜しく矢張り在郷めいたる唄にて道具ぶん廻す

本舞臺平舞臺見附押入此次淨土宗の佛壇に佛具一式盡原角左衛門の位牌を飾り下の方墨繪の襖上手折廻りの家体小摸樣の襖下手折廻りの家体横手襖前側明放して向ふ板戸都て盡原座敷の摸樣爰に酒肴の道具を取散らしお龜丹三郎お榮居て浮たる合方にて道具納る　お龜「多助も今日は村の寄合で留守なれば　お榮「丹三さん寛くりと遊んで居て下さんせいなァ　丹三郎「イヤ其村の寄合といへば面白い話しがある貴樣の亭主に色が出來たのだ　榮「あの多助さんに　龜「現在連添ふ女房さへ愛想を盡して居る多助ろんな事があり升かいなァ　丹「所があるから面白いのだ然も當家の分家の娘だ　龜「そんなら太左衛門さんの所の　榮「お作さんではムんせぬかいなァ　丹「如何にも其娘がこんな弥を送つたのだ〔ト以前の弥を出す〕榮見て　榮「本に是はお作さんゝら多助さんへ送つた弥　龜「お榮お見せ〇〔ト お龜見て「成程是は附弥に違ひないがどうして是をあなたの許へ　丹「サア先刻いつもの居酒屋で一盃呑んで居た所村の寄合へ多助が參つたを此邊の者と見へ多助へ告げし意見の詞聞けば拙者の身の上故油斷ならずと存じた所其娘が下女を連れ多助を捕らへて口説事其跡に夫なる弥が落てあつた故持參致したわい　龜「そんならあなた方と譯ある事を　榮「村の者も多助さんも〇モシどう仕升せうぞいなァ　龜「サア夫じやに因て最初から多助を殺して仕舞はねば跡が面倒と思ふたれど人違ひにて誠に殘念此上はちつとも早うあいつを追出して仕舞より外に仕樣はムり升せぬわいなァ　丹「夫ゑはどうか其弥が役に立さうなものではないか　龜「成程此弥を種にして　丹「あの多助が科を拵らへ　榮「追出すのでムんすか　龜「元より太左衛門は物堅い男故此事を談したら多助を追出すに違ひないわいなァ〔ト下手家体の板戸を明け多助出て來り〕多助「おつかさん只今歸り升た〔ト お龜恂り去て弥を隠し〕多「ナ、多助お歸りか　多「是は丹三樣能く入らつしやり升た　丹「ナ、多助毎度來て厄介となつて氣の毒だがお前も元は江戸生れださうだ其江戸ッ子同士が斯う寄集ると乙誠に賴母しい者だ多助持合せの盃一つさゝう　多「是は有難うがんすがわし御酒は一向不調法でがんして　龜「是はしたり折角のお盃お戴申さぬといふ失禮な事があるかいなァ〔ト持たる煙管にて多助の膝を強く打つ多助恂りなし　多「ハイ夫ではお盃斗りでも頂戴致し升べい〇〔ト猪口を受取り丁寧に戴き「お榮つゞ眞似をしてくれ〇〔ト お榮脇を向く多助手持不沙汰のこなしあつて「おつ

ゥさん悔り樣でかんすが　龜「ついでくれといふのかへ　多「イエついじやァいけ升せん眞似事をして下さい○〔ト お龜態とこぼれる程つゝ「アヽモシさうついでは　龜「エヽモ不器用な酒がこぼれたわいなァ〔ト煙管にて膝を打つ多助痛さを堪らへ漸う酒を呑干し盃洗にて猪口をすゝぎ」　多「若旦那樣有難う御返盃を　丹「アハヽヽ百姓といふ者は堅い者だなァ〔ト猪口を受取る」　柴「ドレ私がお酌を致し升せうわいなァ〔ト酌をする」　多「おつかさん何ぞ肴を取つて來升べい　龜「アヽコレ多助用があるから往つてはいけないよ　多「何の御用でがんすか　龜「お前此節ではちつとも内へ寄附のぬと思つたら分家のお作といたづらをして居るのだもの　多「モシそりや何をいふのでがんすわしは浮氣狂ひを去た覺へはがんせん　龜「イエ〳〵書た物が慥な證據是でも陸か是をお見〔ト以前の弥を投附ける多助見て悔りなし」　多「イエ〳〵わしや決して覺へはないのでがんすがどうして是を持て居るのでがんす　柴「假令お前が何といはうとも斯ういふ證據があるからはいけ升せんよ私と一年越し連添ふては居るもの丶終にやさ去い詞もかけぬはさういふ樂みがあればこそ夫程私がお氣に入らずは離緣狀を書て下さんせいなァ　龜「私も娘が可愛想だと思へばこそ夫婦にしたお前に斯ういふ惡さをされて見ると末の事が案じられ外聞も惡い故たつた今離緣狀を渡しておくれ　多「おつかさんどうぞ御免なすつて下せへまし假令書た物がありやしても決して覺へはねへのでがんすからお榮に離緣狀を出す事は出來やせん　丹「コレ〳〵多助こつちには證據があるではないか又男の働きで女を拵らへるは當り前譯があるならいふたがよからう　多「いゝも惡いも旦那樣決して覺へはないのでがんす　龜「覺へがなくば夫でよいから私と一所ゑ來ておくれ　多「何所へ行くのでがんす　龜「ハテお前を分家へ連て行き談をするから一所にお出　多「マァ待て下せへ伯父さんは物堅い人でがんすからろんな事を聞かせたら濟まぬでがんす分家へ行く事は御勘辨を願ひ升〳〵　龜「ろんならなぜ離緣狀を書ないのだよ　多「なぜ書ねへだつて死だおとつ樣の遺言で夫婦別れをするやう事でもあると草葉の蔭から勘當するといはしやつたに因て離緣仕ては濟み升せねへからお榮がわしを氣に入らずば家内と切れても表向は夫婦といはして下せへやしどうぞ是だけは聞屈て下さい拜み升〳〵　龜「夫程義理を知つて居るならなぜ分家のお作といたづらをしたのだよ〔ト煙管にて膝を打つ」　多「おつかさん痛うムり升　龜「痛くば有体にいふてお仕舞　多「夫はあんた無理でがんすが　龜「無理とは何が〔ト打つ」　多「おつかさん堪忍して下さい　龜「エヽモしぶとい子だのう〔ト續打に打つ多助泣おがら詫る下手家体より太左衛門出て來り此体を見てお龜を止め」　太左衛門「コレお龜さんマァ待て下さい　多「伯父さんでござせへやしたか〔ト丹三郎恂りして居住居を直す」　太「今寄合から歸りがけ久しう無汰

太を去た故に寄て見たれば多助の折檻お龜どん是はどうしたのじや　龜「何あんまり多助が大膽故腹が立つて叩きもし是からお前さんの内へ連て行うと思つたのもあの御城内の原さんとアノ何今お出になり升たので」ト紛らしていふ」　太「夫ではあなたが多助から承つてお り升る旦那樣でムり升るか是迄お目通りを致し升せぬ故どなた樣か存じ升せず誠に失禮を致し升た　丹「イヤ手前も飛だ所へ參り合して甚だ迷惑を致した　太「夫ははやお氣の毒な事でムり升るじたいこいつが生智なしでムり升われは擅原の相續人此内の心棒たゞ其一軒の主たる者が假令どういふ惡い事があればとて母でも無闇に打たれるといふ譯はない多助何をしたのだ　多「皆わしが惡いのでがんそから詫言をして下さい　龜「お前さん人に談も出來ぬ事でムり升か實はお内のお作さんと此多助がいたづらをして親の目妻を忍び逢ひ夫も他人の事なれば知らぬ顔も致し升せうが本家分家の間合でろんな事があり升ては世間の手前が濟み升せぬ故折檻は親の役夫で斯うして打升たのサ　ト又煙管にて多助の額を打つ多助ハッと額を押へる是にて眉間に疵附く」　太「コレお龜どんなぜ多助に夫程の誤りがあるならば此伯父にはつしやらぬ痩ても枯ても一軒の主の額に疵迄を　多「ア、モシ伯父樣何もいふて下せへやすおわしが爲にゝ親なり伯母おりどうも致し方がムりましねへ　太「シテ又お作と譯があるとは　龜「此證據を見て被下升せ」ト帛を太左衛門の前へやるを取上げ」　太「成程是は娘の帛なれど此書振りでは娘の方から彼此いふても多助が得心せぬ樣子よしかしな事があつたにせよ内証でいふてくれたら娘は親が呵りもしお前へ詫びの仕樣もあらうに餘他人樣のお出の席で事荒立て下さつては親類中の好身もなし爰の内なりわしの所の家の耻になる事故是はわしに負けて下さい　龜「イエ是斗りは伯父さんの御挨拶でも濟され升せぬ多助がさういふ恨性ではお榮が可愛想でムり升から今の内に切れて仕舞ふてお榮には實のある堅い亭主を持たせる心離緣狀さへ取れば宜しいのでムり升から多助はお作さんの聟にするともどうとも御勝手にお被下升せ　太「サアさうでもあらうがまだ色事を仕出かしたといふではなし穩便に濟まして貰ふたら世間へも知れぬといふもの　龜「いけ升せんよ夫がおらぬ事なれば今ゝら私は娘を連れて何所へでも出て行き升わいなア　太「是はしたり何もお前がお榮を連れ出て行く譯もあるまいし又わしが娘だとて亭主のある骸ではなし濟まぬといへば濟まぬものゝ　龜「イエモシお前さんのお娘御には圓次郎といふ幸右衛門さんの息子さんが養子に行く約束があつたではムり升せぬか　太「サア其約束ゝあつたれど去年非業の最期を遂げ今は主のおい骸夫でなくとも結納を取かゝした譯でもなく本の親が口約束左すれば間男といふでもなし世ゝは立派な亭主持でも間男をする奴が　三人「エ　太「幾らもあるではないかいの　丹「サア こつちにそんな覺へがおければ安心な事なれど夫は大方

榮「多助さんの樣な人でムんせうぞいなァ　太「イヤ多助には決してなけれど世間の親や女房には　龜、榮「エ、　太「お榮おりや今日斯ういふ弥を拾ふて來た」ト以前の手紙を出す」　榮「ヤ夫は　太「此弥の文面では然も去年の六七月頃から悪い事をしておつて其亭主が邪魔になる故追出さうといふ悪工み○コレ手を出して何をするのだ名前は丹三郎樣參るお榮より」ト三人面目なきこなし　多「そんなら夫はお榮より旦那樣の御子息へ　太「コレ多助麁相をいふなお人柄のあなた樣にこんな猥らは決してない筈お榮は素より一通りの夫婦にあらぬ從弟同士間男をする筈もなければ餘所外の親子の者が男狂いの弥なれど同じ名前を思ふて見れば世間は廣いものじやなァ○ろこでお龜どん此手紙と何所のいたづら者のは知らねど落したは其身の罰主は知れても知れいでも世間へ出せぬ弥なれば娘が書と此手紙と一所に燒棄たいと思ふのじやが是も娘と思はずに此太左衛門に下さるまいか　丹「成程是い穩便の取計らひ跡の證據にならぬ樣望みに任してあれなる手紙は」ト「やつて仕舞へといふこなし」　龜「成程あなた方のお口添なら　太「此太左衛門に下さるか　龜「其代りには今見る前で　太「お龜どん此通りじや」ト佛壇の燈明の火にて二通の手紙を燒棄てる」　丹「夫で一家の其中に涙風立ず無事の治り　龜「夫で私も　榮「此身も安心　多「わしも安堵致しやした」ト太左衛門佛壇の前に住居　太「コレ多助お龜どんにもお榮にも一寸爰へ○此位牌は知つて居樣去年六月三十日兄角右衛門殿が死なれた時わしを呼寄せいはつしやるにはお榮は多助と從弟同士今の母は實の伯母一家に血筋が寄集り相續する故擂原の家に取ては此位な又と目出度事はなければ若し多助お榮の中にもめる事でも出來して夫婦別れ抔する樣な事でもあつた其時はわれが後見になつてくれと頼まれたのが此世の別れ其遺言が反古にならぬ樣此後は身を慎み夫婦中よく暮らしてくれよ　多「ハイ有難うがんすおとつさんの遺言は決して背きは致し升せん　太「ム、そちさへ其心ならおれも安心といふものだ然しわしはお暇を致し升せう　丹「マァよいではないか　太「ちと宅も急ぎ升れば　丹「さうか身共も餘程銘酊致しおれば暫時一間を借用致さう　龜「サァお出被成升せいなァ」ト太左衛門丹三郎に會釋なし忌々しいといふこなしにて附添ひ下手家体へ這入る是より床の淨るりになり」　淨るり「跡には獨り擂原多助邪見の母や女房の道に背きしいたづらを身には憎しと思へども親への孝と義理合に口へも出さず喰しばる主の心を思ひやり飛で出たる下男の五八」ト上手より五八ッカ〳〵と出て來り」　五八「多助樣嘸口惜しかんべい悔しかんべい○わし蔭で聞てさへ腸が煮へ返へるに能く辛抱さつしやつた今あんたが燒へ起して内を飛出しでもさつしやつたら直ぐにあの原親子に此家を取られねばなり升せんからわしもあんたと一所になつてどんなつれへ事をしても家の爲に働きやすこのら我慢をして居て下さいよ家が大事でがんすから　淨「主人思ひの

忠僕が詞に多助涙を流し　多「ナ、五八能くいつてくれた原親子の事を言立れば血で血を洗ふ家の恥おとつさんの位牌へも泥をぬすくる事と思つて今迄いはずにこらへたなれど實にモウつらくつて耐へ切れない事が度び〳〵五八察してくれ　五「御尤でがんす不斷からおかゝ樣が意地の悪い事斗りさつしやる故外へ出るとは泣ながら馬を引て歩かんすので泣き多助〳〵と世間の人にいはれるは情ねへ事ではがんせぬか此下新田で誰あらう三百石の田地持盡原の若旦那樣が親や女房の其爲に家に居る事も叶はず襦絆一つで馬を引き外へ出るとは其跡へ原親子を引込んで酒喰らつたり寐すべつたり夫さへ口惜しくつてたまんねへにあんたを突出すべへとさつしやるのは鬼でがんすか蛇でがんすか人間の皮被つた者には出來ねへ業ではがんせんか　多「夫もみんな前の世からの因果とおれや思ふて居るわい　五「其氣で居たら辛抱の出來ぬ事もがんすめへからどうぞ何所へも往つて下せへやすなよ　多「夫は決して案じてくれるな此家を捨てゝ出てはおとつさんへ濟まねへから　五「夫聞てわしも安心したでがんす　淨「主の多助が心底を聞て安堵の折柄に樣子を立聞く親子の者「ト下手家体にお龜お榮樣子を聞居て」　龜「イヱ出ぬといつても出さずには置れぬわいなア「ト両人出て來る」　多「さういふはおつかさん　五「何で出さねば置れぬのでがんす　龜「最前は太左衛門が彼此いふて面倒故一旦事は濟ませたなれどまだ濟まされぬは人殺し　多「エヽ　龜「多助お前庚申塚で圓次郎を殺した覺へがあらうがな　淨「思ひも寄らぬ詞に恟り　多「モシおつかさん外の事とは違ひやすわしが圓次郎を殺したとは寐耳に水の其疑ひ誰がそんな事をいひやした　榮「多助さん其所が天知る地知るの道理其夜歸つて來て何とおいひだへお前さんが馬を曳くと歩かないで圓次郎さんが口を取ると動くといふたじやムんせぬか私ゝ馬の事抔は知らぬけれど數年曳馴れた其馬がお前さんが曳くと動かず圓次さんが曳くと歩くといふ樣なそんな馬鹿らしい事があり升のいなア　龜「夫といふも圓次さんを殺して御膳籠の荷物を盜み人知れず賣つて小使にでも仕樣といふ其了簡の恐ろしさ荷を返したの馬が歩かぬのと親迄だます面憎さ夫も今日迄いまずに居たれど仕舞に親の寐首でもかき兼ない根性だからモウ恐ろしくつて片時も一所には居られぬ故早く出て往つておくれ　淨「餘りの事の難題に多助は惘れ詞も出ず母の顔のみ詠むれば五八は泣聲ふり立て　五「コレおのみさん最前もあれ程迄若旦那に無理いひかけ又改めてろんな事を擔ぎ出して來さつしやるとはどうすりやそんなよ多助樣があんた方は憎いでがんす形もねへ事いはしやんすな其御膳籠はわしが擔いで其晩屆けてやりやした事は圓次郎どんの親御の所へ往つて聞けば分るでがんす　龜「夫はさうでもあらうけれど殺したに違ひはない人殺しは内に置ぬれぬ早く出て往つておくれ　淨「と多助の手を捕り引立れば　多「アヽモシ外の事ならおつかさんのいふ事は背くめへとい

ふ頭掛けてがんすが圓次どんを殺したとはろりやあんまりお情けない一つ村の竹馬の友達何意趣あつて殺しやせう神掛け覺へは微塵もがんせん　榮「イエお前さんと言かはして居るお作さんの養子に行く約束のある圓次さん故末長く樂まうといふ心から殺したので厶んす哩なァサァ夫程お作さんと添度ば離緣狀さへ私に書て下さんしたら誰憚らず夫婦になれるじやムんせぬか私しや人殺しをする樣お恐ろしい人は否で厶んも夫じやに因て早く書て下さんせェ、モウどれつたい男だねへ　淨「親の威を借る女房が詞に流石柔和の多助も　多「だまれお榮おつかさんは何をいはうとおりや決して詞返しを仕た事はおけれどもわれ迄同じ樣に覺へもおい事廉に取つて離緣狀を取らうといかとつさんの御遺言を忘れたか其御遺言さへない事ならわれが方から望まいでも離緣仕度は山々なれどおとつさんに濟まねへから言度事も堪らへて居れば附上つてのいひたいがいろりや多助がいふ詞だわい　淨「常に變つてあら〳〵しき多助が詞にこなたも募り　龜「何だへ多助娘に向つて利た風な事をいふのは親のわしにいふも同然アノ爰な親不孝め　淨「髮掴んで引倒せば五八は驚き縋り止め　五「おかみさんコリャ若旦那をどうするんでがんす　龜「どう仕樣共親の儘引込んで居な　五「イヤ引込んでは居られねへわしが爲には大事の御主人マァ此手を放して下さい　龜「イヤ〳〵思ふ存分折檻せねば　五「其折檻は最前もさつしやつたじやァがんせんか放して下さいおかみさん○　淨「と泣立て止むれどこなたはいつかな聞かばこそ大の男を引廻さ打つ叩きつさいなまれ多助は宥しを求むれど免るさぬお龜を漸うと引放さたる下男の五八「ひどい事をさつしやり升おモシ若旦那嘸つらい事であんべいが今あんたが辛抱仕兼て此内を飛出したら墓原の家が潰れ升辛抱をして下せへよ　多「五八よおつかさんに打たれても決して何所へも行く事じやァない必ず心配してくれるな　五「有難うがんす〳〵　榮「イエ〳〵内に置ては掛り合　龜「人殺しの科人には添はして置れぬ娘のお榮　五「コレおかみさん二言目には若旦那を人殺といはつしやれど多助樣ゑ限つて人殺しをするやうなお人ではねへよしんば人を殺してもあんたの爲には子じやがんせぬゝ甥じやがんせぬか何所迄も蔭になり日向になつて隱すのが夫婦親子の中の人情夫を親や女房が先に立つて人殺しとわめかつしやるは悶れたもんだ○「ト多助止めるを聞入れず「イヤ〳〵多助樣止めさつしやるなあんたは爰の相續人貰はれて來たは十四年跡の八月又おかみ樣は其年の九月に來て明の年の十月に先のおかみ樣が死だに附此お方を後妻にと太左衞門樣が勸めたけれど旦那樣には年の若けへ女房持ては世間へ對し耻かしいとて達て辭退さつしやつたが多助樣には實の伯母故女房に持た方が万事都合がよかんべへと此家へ入れた時あんた有難てへこんだ果報燒がするだんべいと涙を流して泣たでがんせう其昔の恩を忘れて多助樣を邪見にしては世間へ對して濟みやす

か　淨「遠慮會釋も内義の悪口聞兼多助押止め　多「是はしたり五八モウ大概にして貰んかよモシおつかさん五八は酒によつぱらつておりやすから了簡して下せへやし　五「イヤ〳〵五八は去らふでがんすまだ〳〵いふ事はしこだまあるのじや　龍「娘今は面倒故奥へお出邪魔を拂つて又多助よ　五「イヤ若旦那にいふ事おらわしが代つて聞升べい　榮「エヽモうるさいしたる親と子に附纏ふたる五八が强情一間の内へ入る跡に多助が胸とつおいつ思案にくれて居たりしが何思ひけん心に悟り　多「今よう〳〵考へれば去年圓次が殺された其夜内へ歸つた時魂消た顔をさつしやつたおつゑさんの樣子を思へば胸に當る今日の難題無理に科をぬすくるわおらを追出す斗りでなくてつきりあの夜の人殺しは多助を殺す了簡で圓次を切たに違ひねへ其證據にはあれから後丹治が家へ來る度びには必らず青が嘶くは畜生ながら顔を見覺へ夫でなくに極まつた其人殺しの一件をお作の身から思附きおらをば無實の罪に落しおのれの科を遁れべいとの原親子の悪工みと今氣が附て見る時はおつかねへ爰の内ア〻どうしたもんであんべいなア○　淨「腕を拱き盥原多助如何はせんと思案を凝らし「さうだ幾らおとつ樣の遺言を背いては濟まねへとて命がおければ此家の爲になる事も出來ねへ道理だコリヤモウいつろ命のある内爰を出るより外の思案はモウ駄目だ○　淨「といひつゝ立て佛壇の養父の位牌に打向ひ「おとつ樣あんたにゝ濟ましねへが爰の家に居る時は打切られるも知れやしねへ命がなければ矢ッ張あんたに孝行も出來ましねへからわしと今から江戸とやらへつッ走つてどんなつらい奉公でもして金を溜めて立歸り假令家は潰れてもわゑが急度盥原の家は起して見せやせうのら暫くお暇を下せへやし○申とつさん○　淨「生るが如く爺親の位牌に詫る孝子の心痛ましくも又哀れおりヤヽあつて涙を拂ひ「夫にしても高平迄豆を積んで行く約束夫を投やりにしては濟まねへ譯青にも今日を限りの別れドレ豆を附けて行くべいか　淨「又もや向ふ佛壇の父の位牌に打向ひ額づく目にはいつぱいの涙を含む稱名も口の内なる忍び泣き袖を襦らして出て行く「ト多助回向のこなしあつて涙を拂ひ下手家体へ這入る上手家体より丹三郎お龜お榮出て來り」　丹三郎「今日は飛だ所へ來合して太左衞門にお榮の手紙を出された時にはぎよつとした　お龜「一体あの手紙はお榮どうしたのだへ　お榮「サアあれはさつき主名樣の所の子守を賴んで角十迄持たしてやつたのでムんすが　丹「受取る事は受取て讀で袂へ入れたに違ひないが何所で落した知らん併し燒棄て證據がないとはいひながら譯ある事を知られて見れば事が面倒　龍「夫故どうでも多助をば追出さうと人殺しの事をいひ出したれど是も五八が口を出し面倒故に其儘には仕て置たが何でも此事を言立て多助を追出す私の心底　榮「其次手に五八も一所に暇を出さねば邪魔に

なつていけ升せんよ　鯉「夫は元より其積りさ　丹「何にしてもこんな跡故今日は　榮「ちつとでもお休みあさつて夫からお歸りなさんせいなァ　丹「イヤ〳〵壹の白中寢て居る所を誰ぞに知られては彌々事が面倒なれば　鯉「アレマア氣の剛い今更そんな逃口上を　榮「大方私が否になり夫ですげなういはしやんすか　丹「何のさうではなけれども親共といひ拙者迄　鯉「是も定まる因緣と　榮「思ひ諦めいつ迄も　丹「添遂げ度は山々なれど　鯉「悪い浮名が立ば立　丹「スリヤ夫程迄に身共等を　榮「私が心を推量して下さんせいなァ　丹「然らば二人が詞に任せて　鯉「今宵は寛くり　丹「ム、〇モウ一盃呑と致さう　〔ト宜しく思入にて拍子幕

六　幕　目　沼田ヶ原麥馬別れの場

役人替名

一盤原多助　一後家お鶴　一多助女房お榮
一原丹次　一原丹三郎　竹本連中

本舞臺平舞臺打扳の草原所々に雜木の立木眞中に振りよき松の大樹此傍ゑ物見の松と記せし苔蒸したる立石向ふ油畫野末の山の遠見正面電氣燈の滿月松の釣枝都て上州沼田ヶ原の体但し滿月の光を用ゐて他の點燈を使ゑぬ好み風の音時の鐘にて幕明く〔ト床の淨るりに　なる」　淨るり「暮て行く野は順禮の笠斗り行く程伸びし夏草のいきれを拂ふ涼風の青色を運ぶ牧笛の人里遠き沼田ヶ原晝の暑さを取返す夜道をかけて盤原多助今日ぞ故郷の名殘りぞと見返る空の望月に嘶く駒の足並も屠所の羊に異ならず別れを惜しむ畜類の心有氣に見へにけり〔ト下手の後ろより多助菅笠を冠り錢の入りし麻財布を肩にかけ馬を曳き野中を行く心にて草立木越しに上手より廻つて出て來り」　多助「コレ青よおれモウ爰で別れにやァなんねへ隨分達者で居てくれよ〇　淨「いひつ、馬の面を撫「ア、われとは長い馴染であつたなァ〇數へて見れば十四年跡われは大原村の九兵衛どんが南部の盛岡の市から買て來たのをおらのおとつ樣に買はれて來た其時おれ八つであつたがわれの脊中へ乘つて此沼田の下新田へ來てから久しい馴染にて十二の時から曳馴れて畜生でも兄弟同樣じてへわれは達者な馬で今迄内漏一つ起し噫一つ仕た事なく足に血溜り一つ出來ずどんな坂を越へるにもつらい顔をした事なく能く勤めてくれたから段々年を取るに隨ひ樂をさせてやるべいと思つて居たが今はなんねへ〇われ知つて居る通り内のかゝ樣とお榮が了簡違ひなやつでおれを殺すべいとするだ〇ソレ去年庚申塚で此おれを殺そべいとの間違ひで圓次郎を殺した時われも駈出した位だから樣子は分つて居るであらう〇是からおれ江戸へ出て奉公をして金を溜め歸つて來るがおれが出れば五八も追出されるに違へねへさうそるとわれに搆ふ者もねへから可愛想でなんねへが何も時節と諦めておれが江戸から歸つて來る迄必らず丈夫で居

てくれろ■ウ〳〵〳〵○ 浮「我兄弟か雇人に物いふ如くいひ聞かす詞も果て涙にくれ聲を上げて歎きしが漸うに泣目を拭ひ「せめては秣の飼ひ仕舞ふ青よたんと喰つてくれ○ 浮「涙ながらに取下ろす叺を首に掛卷も神おらぬ身の今日爰で手飼の駒に別んとは夢にもいざや白馬の秣も月に善惡を見分けてはます野邊の草「今日も上下で四里の道疲勞がへつたであらう寛くりとたべてくれ○ 浮「いへども馬は口さへ附けず多助の顔のみ詠むれば「是いしたり青何で喰はぬのだ皆茶草斗りだよ早く喰へ〳〵つてくれ○ 浮「猶樣々に進むれど馬といつかなはみもせず首うなたるれば「コレどうしたよわれ何所ぞ悪いらなせ喰はぬのじや○ 浮「馬の面を差覗けば左も悲し氣の面持にて目には涙の玉の露草葉に置を見るよりも多助たまらず叺取退け「チヽ青われ泣て居るか有難てへ畜生でさへ恩義を知り名殘りを惜んで草さへ喰はず泣てくれるよ人間の皮を着ながら現在の實の甥なり從弟なり舞や亭主でありながら殺さうとは何事だんべい○ 浮「鳥や獸に劣つたる人非人めと拳をば握る涙の恨泣「コレ青よおれが出れば原親子が直ぐに跡へ乘込んで家を潰すに違げへねへや嘸やわれもつらかんべいがおれが歸る迄辛抱をして呉よ○ 浮「といひ聞かしつヽ傍へなる持參の財布手に取上げ「是は今日の豆の代金が二分に錢一貫是から江戸への路用といふたらはまちの錢の僅六百是で足り樣道理はなけれど持ぶけり仕たといはれてはおらの耻なり家の疵此財布は我の背に附けて置からか袋に渡してくれ○ 浮「心柄正直眞法の多助が跡に殘し置財布を荷鞍に結附け馬をも虫に喰はせじと糸立取て脊に打着せ「是で青よ別れるから必らず丈夫で居てくれよ○ 浮「行んとする袖くはへ留め「コレ何をするのだ夜が更てはなんねへから放してくれ〳〵○ 浮「無理に振切り行く足の草鞋を踏ればつたりとこける多助が襦袢の袖くはへて又も放さねば起上つて涙にくれ「コレまだ留るかおれも別れ度はねへけれど居るに居られぬ家の有樣推量して放してくれよコレ青頼むわい〳〵 浮「頼むと斗り振切れば又踏留る飼馬の情斯くては果じと盛原多助心強くも馬押退け名殘り惜氣に出て行く折柄酒に正躰も夏野の原を千鳥足（ト下手の後ろより丹三郎お榮の手を捕り出て來り）「アレ丹さん浮雲ムんすわいなア 丹三郎「大丈夫〳〵惚れて通へば千里が一里通ひ慣れたる沼田が原今夜は屋敷へ連歸り氣兼なしに寐る積りだ 榮「夫は嬉しうムんすわいなア○（ト此内向ふを通り上手へ廻り來り「チヤ此馬は内の青だがどうしてこんお所には 丹三「夫は多助が高平から今が歸りで馬を繋ぎ用でもあつて何所ぞへ往つたか但しは其所らで小便でも 榮「夫なら馬を曳て行かねばならぬ筈殊におあしの入た財布を荷鞍に斯うして附けてあるのは 丹三「イヤ是も一つの小言の種馬を曳て行がいヽ 榮「デモ私しやこはくつて 丹「そんな事で能く今日迄百姓の女房になつて居たな 榮「ハイどうせ左樣さ私しや百姓の女房故

此馬を曳て行升わいおァ　丹三「おらいい〳〵夫でこそ多助といふお百姓のおかみさん〳〵〳〵○〔ト此内馬の綱を解き馬お榮の肩先へ喰附く「此畜生め噛みやァがつたな〔ト刀を拔き馬の胴腹を貫く馬は丹三郎の肩に喰附く両人血紅を使ひお榮苦痛のこなしあつて逃げにかゝるを馬も苦しみながらお榮よ喰附く丹三郎よろめきながら馬の尾を捕らへて引戻す是にて馬はお榮の片腕を喰ひちぎる両人逃廻るを馬追駈けて噛附く始終凄味にて馬お榮の喉笛に喰附きお榮落入るを腹を喰破り腸をくはへ出す丹三郎よろめきながら馬の胴腹を貫き馬は丹三郎に喰附き一所に倒れて丹三郎は落入る下手の後ろより丹次お龜出て來り」お龜「旦那マアお待なさいよ　丹「コレ何所迄附て來るのだ今日は畳の手紙の一件があるから泊つては工合が悪い　龜「泊つて悪るくばお屋敷へ參り升よ　丹「デモ屋敷へは忰がお榮を連れて先刻龜「娘が泊りに參つたら親の私も行升わいなァ　丹「是は難義な事だなァ○〔ト草原の向ふを通り上手より出て來り「ヤ馬が爰に倒れて居るが　龜「ナヽ是は慥に内の青　丹「其馬の胴腹を貫きながら死したるは正しく忰丹三郎　龜「娘も爰にむこたらしう　丹「扨は馬ゑ両人共龜「嚙殺されたゝ　両人「ナヽ〔ト馬起上り丹治を喰附に來るを身をかはし刀を拔て馬の胴腹を突く是にて倒れる」　丹「忰の敵お榮の仇○〔ト馬に片足踏かけるが木の頭畜生め〔ト馬の喉に突立てゐぐる」　龜「娘やァい〔ト死骸ゑ取附き泣落す此模様宜しく早めの合方風の音にて拍子幕

七幕目

（八崎在庵室の場
（岩上村多助盗難の場
（同吾妻川岸邊の場

役人替名

一盥原多助　丹治　一次立の仁助
一庵主覺心尼　一山口屋善右衛門　一百姓女房お虎
實は又旅お覺　一仝手代和平　一同お貞
一道連小平　一後家お龜

本舞臺三間の間常足の二重本椽附椽づかの蹴込み藁葺家根破のある欄間見附鼠の破壁上手瓦家根の地藏堂此内に幾つも瀧掛仕たる石の立地藏尤堂の中落間にて石の線香立同じく花立軒に子安地藏尊の額を掲げ下手葺下ろしの片家根三尺の臺所の入口是に繩簾を掛け是より破のある鼠壁敲疊花道附際に正面藁葺家根栗丸太此上の方柱際生垣の見切り片開きの折戸ずつと下手に草井戸松の釣枝都て上州八崎在地藏庵の模様二重に瓦燈を點じ覺心坊主鬚鼠の着附腰衣澁團扇を持ち土の火鉢にて數遣を焚居るお虎お貞百姓女房妊娠の拵へにて二重に腰をかけ木魚入りの合方にて幕明く　覺心「今晩は大層遇うに御參詣でムり升たゐ　お虎「

サア早うとは思ふたなれど何分幾時の事なれば今夜なべを仕舞ふと直ぐに來たのじやわいなア　お真「夫といふもお虎さんといひ私といひ今月が產み月故此子安の地藏樣へ連立ての無夜の參詣　虎「本に女子といふ者ゑ此程がある故に誠に詰らぬ者じやわいなア　覺「夫といふも精出して餘り夜なべが過る故明日は休んで早うお參り被成升せ　真「アハヽヽヽ常は堅い顏をして居るお庵主さんが今夜に限つて笑談口は珍らしいわいなア然し庵主さんは取揚げが功者おとの事どうぞ虫氣の附た時には迎ひと一所に來て下さんせ　覺「そりやモウ私も手掛けた事故何をするも人の爲呼びに寄越して被下升せ　真「ろんならお虎さん行うじやないか　虎「さうせうわいなア　覺「ろんならモウお歸りでムり升か　兩人「又明日の晩逢ひ升せうわいなア」ト兩人枝折戸を明け下手へ出て花道へ行く此內向ふより丹次小紋の脚半草鞋着流し大小尻端折大きな風呂敷包を脊負ひ編笠を持ちお龜着流し常の拵らへ草鞋ばき菅笠を持ち杖を突き足を曳おから出て來り花道にて行會ひ」丹次「少々物が承り度此邊に地藏堂があるとの事いづれでムるな　真「夫ならッイ此行當りが　虎「地藏堂でムんすわいおア　丹「左樣でムるか　お龜「夫は大きに有難う存じ升るわいなア　兩人「イエどう致し升て」ト行違ひお虎お真は向ふへ這入る丹次お龜は門の所へ來り」　丹「御免下さい　覺「ハイどなたでムり升る○」ト繩簾をあげ「見れば旅のお武家樣何ぞ御用でムり升るの　丹「手前途中にて日を暮らし不知案內の事なれば女を連れて甚だ難澁只今夫にて承れば當村には宿屋もなく困る者は此庵を賴んで泊る者ある由どうか宿の無心はおるまいか　覺「夫ゑ嘸お困りでムり升せうわしは年寄りの事で人樣がお世話も出來升せずたべ物も着て寐る物も蚊屋さへもない抵帳一つ夫で能くばお宿仕り升せう　丹「夫は早速の承知忝いお龜こつちへ這入るがよい」ト お龜門の內へ這入り」　龜「誠に御深切に有難う存じ升るわいなア　覺「其井戸で足を洗ふてこちらへお上りなさい升せ」ト丹次內へ這入り風呂敷包を取り栗下駄を二足持ち出て來り」　丹「此下駄を借りてもよいかお　覺「どれなと履て被下升せ」ト兩人草鞋を脫ぎ丹次脚半を取り兩人井戸の所にて足を洗ひ下駄を履く此內覺心は二重を掃き居る兩人繩簾の內へ這入り丹次風呂敷包を提げ二重へ來り兩人下手よ住居　丹「誠に今晩は無躰な事を願ふてお氣の毒な事だ　龜「是が本の地獄で佛といふのでございい升せう　覺「ヲヤあなた方はお江戸でムり升るな　丹「如何にも生れは江戸の者だが　龜「シテ御庵主樣には　覺「實は私も江戸の者でございい升よ」ト お龜覺心の顏を見て惚りなし」　龜「ヤ姿形は變つて居れどお前はお覺さんではムんせぬか　覺「チヽお前さんは鹽原角左衞門さんのおかみさんでございい升たか　龜「モシ旦那此婆アさんがお榮を勾引した又旅のお覺でムんすわいおア　丹「スリヤ是が其惡婆であつたか不屆奴め」ト刀を取る」　覺「アヽモシ御腹の立は御尤でございい升が婆々アのいふ事ゑ

聞被成て被下升せ○私も親子連れにて旅で悪事を仕尽し升たが段々取る年に隨ひ我身ながらも恐ろしく思ふ所へ悴小平はお縄を頂き去年牢死一人の子を殺したが彌々我身の意見になり是もみんな悪事の罰と夫から心を洗ひ愛へ天窓を剃て托鉢に此邊を廻る内慈悲ある人のお世話にて此地藏様の堂守に這入り升たは今年の正月毎晩〳〵お地藏様に若い時分の懺悔を致しお詫事を致しており升る其お前さん方ゑ又爰でお目ゑ掛るも悪事の報ひ實に恐ろしい事でムり升る南無阿彌陀佛〳〵○どうぞ此天窓におめんになすつて御勘辨を仕て下さい此通りでござい升〳〵〔ト手を合して拜む〕 龜「モシ旦那憎い婆々ァではムんそが改心したとあるからは宥してやつて被下升せ 丹「夫が眞以て誠なら命代りの頼みがあるが何と聞てはくれまいろ 壹「そりやモウ助けて下さい升なら命の親のあなた方どんな事のお頼みでもお心置なくおつしやつて下さい升せ 丹「手前事は沼田の城主土岐伊豫守の家來にて原丹次といふ者だが不圖した事から此お龜と夫婦同様の中となり又悴には其方が勾引たる娘のお榮と割おき契を結びし所夜前悴お榮には手銅の馬に嚙殺され玄が其悴は家督にて上みへ對して濟み難く昨夜の内に出奔せしもまだ其外に何や角や濟まぬ譯があつての事 龜「其濟まぬ譯といふは娘のお榮は多助といふ夫のある骸にて此旦那の御子息と忍逢ふて居る事は誰も知つたる其上に馬に喰はれた夕べの最期私も去年後家になり此旦那と忍逢ふ内嵐を宿してモウ七月夫も娘が生て居たなら又どうか仕様もあれど夕べのしぎ故跡が面倒人目を忍ぶ身の上故今日は去る所で日を暮らし出て來た所お前に逢ふたは誠に不思議な縁といふ者壹「ろんなら七つの年から育てたお梅は馬に嚙殺され升たか○ヤレ南無阿彌陀佛〳〵 丹「夫故お前に頼みといふは月滿て產落し肥立迄の所をば世話が致して貰ひ度 壹「夫は能うおつしやつて下さい升た實は勾引のお詫びが仕度と思ふておつた此婆々ァどうぞ何時迄もお出なすつて下さい升せ夫にお地藏様は子安の地藏其堂守を致す次手に取揚げを致し升から其段は安心して下さい升せ 龜「夫はおれも安心した○草臥休めに一盃やつて寐度といふ注文だが爰らに酒屋はなからうか 壹「ヲイ其所にござい升が買ふて參り升せうか 丹「氣の毒だが一升提て來て貰はうか〔ト胴卷の中より金をざら〳〵と出し小判一枚覺心へ渡す〕 壹「是は小判でござい升か 丹「夫で釣を取て來てくれ 壹「畏り升てござい升然し往つて來る間蚊が多くつてなり升せんから蚊帳の中へ這入つてお出なさい升せ○〔ト下手の内より薄き蒲團枕二つ紙帳を持ち來り〕「一寸爰へ釣升せう 龜「イヱ夫は私が釣升せう 壹「夫では誠に憚りながらお願ひ申て私は往つて來升せう〔ト二重の下手へ這入る向ふより仁助旅形り一本差にて出て來り〕 仁助「どうか居てくれゝばよいが○〔ト舞臺へ來り門の内へ這入り〕「チイおつかァ居るか婆ァさん〳〵○〔ト覺心一升徳利を持

ち縄簾の口よりッカ〳〵と出て來り仁助の横面を續打ょ打つ「チイおつかァ何をするのだ 覺「何も糞もあるものか手めへが意地を附けたばつかりで悴を牢死させる樣に仕やァかつて 仁「チイ馬鹿な事をいひねへな 覺「馬鹿も絲瓜もあるものかサァ爰へ來い名主へ一所に連れて行くから〔ト横面を打つ〕 仁「ァ、痛い〳〵 覺「何こいつ〔ト覺心德利にて仁助の天窓を打ながら手を引張つて向ふへ連れて行く兩人此体を見て居て〕 龜「モシ旦那どうしたのでムんせう 丹「サァ何だかさつぱり分らぬが中々氣丈な婆々ァだ 龜「然し紙張を釣升せうかいおァ 丹「さうして貰はう大變に足を喰はれた〔ト丹次手傳ふてお龜紙張を釣る向ふより覺心仁助引返し出て來り〕 仁「ろんならさういへばいゝにァ、痛へ〔ト頭をさする〕 覺「じたいおめへが鈍間だからだおれが尼になつて居る事を知つて居ながら内へ這入つておつかァ〳〵とは何の事だ客の居るのを知らねへか 仁「可愛想に何のおれが知るものか夫に兄イが牢死仕たとは何だ 覺「夫は今夜泊つて居る奴がおめへも知つて居るお梅の實の親のお龜よ其連の侍がおれを切る權幕だから改心して尼となり小平は牢死を仕たといつて置たにおめへが來ちやァ化の皮が顯はれるぢやァねへか其所でおれが打たのだ 仁「ひどい事をするじやァねへか 覺「さうして小平は 仁「岩上迄來て居るよ 覺「ろいつは幸ひだ耳を貸ゑ 仁「ム、何だ〇〔ト覺心仁助に呼く〕「ム、そんなら其侍がどつさり持て居るのか 覺「さうよ其所で斯うする積りだ〔ト又呼く〕 仁「ム、成程〳〵 覺「い〻か早く兄イに吹込んでくんな 仁「よし夫じやァおつおァ 覺「コレ〇さういふ間抜だからぶんなぐつたのだ 仁「いまだに天窓がぐわん〳〵すらァ 覺「さま見やァがれ〇〔ト仁助は引返して這入り覺心は舞臺へ來り生垣の外より〕「旦那お龜さん嘸惚りなさつたでござい升せう 龜「チ、お覺さんお歸りか 丹「今のは何だ如何したのだ 覺「何あいつは仁助といふ護摩の灰で悴に智惠を附て悪い者に仕たのでござい升があいつの爲に悴が牢死する樣になり升たから憎いと思つて居る所へ這入て來升たから何でも名主へと引張つて行く内どう〳〵逃して仕舞升た 丹「夫は殘念な事を仕たな 龜「さうしてお酒はへ 覺「お前さん方か何か知らんとお案じなすつてお出と思つて一寸知らせに歸り升た是から名主へ今の事を一寸屈けて直ぐ買て參り升 龜「夫ではどうぞちつとも早く 覺「直ぐでござい升〔ト覺心舌を出し向ふへ這入る〕 龜「モシ旦那丹三さんといひ娘といひ考へれば考へる程可愛想な事を仕升たが夫でなくば茶鞋を履てこんな思ひを仕おくつても宜しいのでムんすが夕べの死樣を思ふと心細うなり升ねへ 丹「何假令知行を捨ても金さへあれば又有附は出來るといふもの悴や娘の事は時節と思ひ諦めるがいゝ 龜「サァ其締めを附けた故有金を六百両着物も八九枚持出して來升たから當分不自由はないものゝこんな山の中に居るのもつらい事でムんすなァ 丹「其所が辛抱といふものだ當分此庵

室に隠て居て尊の消へた其時分江戸へ出て業をすれば今の苦勞を取返へすといふものだ 龜「そんなら夫を樂しみよ 丹「蚊帳の中へ這入つたらどうだ 龜「本統にひどい蚊でムんすなア〔ト両人紙張の中へ這入る向ふより覺心德利を提げ出て來り〕覺心「男の足ならモウ大概時刻もよからうドレ氣を附てお仕事に掛らう〔ト德利の口より酒を呑み〕「エ、イ地酒はどうも叶はねへなア〔ト酒を呑みながら來り遽しく走り這入り〕「モシ大變でござい升よ〳〵〔ト紙帳の内よりお龜帶を卷附けながら丹次は帶解廣けにて大小抱へ出て 丹「大變とは氣使はしい 龜「お覺さんどうしたのだへ 覺「サア今名主へ往つた所が〇ア、苦しい〇〔ト酒を呑み〕「お前さん方の人相書が廻つて〇ア、苦しい〔ト又酒を呑む〕 丹「何だ手前共の人相書が廻つた 龜「旦那御用心なさいよ〔ト両人帶をしめる〕 覺「御用心所ではござい升せん其次第を聞て見るに沼田の下新田の鹽原角左衛門の後妻のお龜が御領主七岐樣の御家來原丹次といふ人と悪い事をした斗りか其娘といひ息子といひ親子揃つて間男して子は馬に喰殺され親は亡名したといふのでお手當の人相書夫にどう嗅附けたか今赤房の十手が爰へ來るのでござい升よ 丹「スリヤ手先の者が此所へ 龜「旦那早くお支度をなさい升せいなア 丹「包みを寄越せ脚半は何所だ〔ト両人狼狽廻り丹次脚半をはく〕 覺「モシ是からお立になるのでござい升か 丹「さういふ事になるからは中々爰に斯うしては居られぬ 龜「お覺さん草鞋を出して下さんせ 覺「マアお待なさい升せよいづれさういふ樣子で乙出口〳〵に張つて居るでござい升せう〇旦那是から裏道を岩上村迄御案内致升せうから夫から何所へでも脱けなさい 丹「夫は千万忝い 龜「お覺さん賴むわいなア 覺「ろんなら早くお支度を 龜「旦那樣 丹「ナ、〔ト平舞臺へ下り風呂敷包みを脊負ふのが木の頭〕 龜「どうぞ草鞋を早く〳〵〔ト両人狼狽へる此摸樣宜し〳〵早めの合方にて道具ぶん廻す

本舞臺通し常足の二重岩組の蹴込み上手書心に飾り古びたる宮一面の杉林此後ろ黒幕上下岩山の張物雨落より杉の梢を見せ山の張物を引出し花道いつもの板の上り口此左右岩の張物にて見切り都て山の半腹の体山颪合方にて道具納る〔ト直ぐに花道の下にて〕仁助「ナ、イ兄ィ待ねへ〳〵〇〔ト花道の下より小平旅形り胴金の一本差にて菅笠を肩にかけ跡より仁助呼びながら出て來り〕「待ねへといつたら待ねへな 小平「べら坊めあのお龜といふ女は遺恨のある上金を持て居ると聞ちやア早く網を張らにやアならねへ 仁「お前ろんな事をいつて待合す所を知つて居るのか 小「何所で待のだ 仁「夫見ねへ知りも仕ねへ癖に道でも聞違つたらどうする積りだ 小「さうしてお袋は何所で待てといつて居た 仁「此岩山の道陸神の宮で待てとよ 小「ろんなら爰だな〇手めへ火打道具を持て居るか 仁「其所らが旅の仕事師だ鎌と石は年中腰附けに仕て居るのだ〔ト両人捨臺詞にて莨を呑む花道の下より多助管

笠を冠り出て來り」多助「夕べ沼田が原は出たなれど伯父さんが手分をして追駈けさせでもさつしやるめへかと白井の山の奥へ這入り空寺で日を暮らし山越しにやつて來たが月わあつても山に隱れて暗くつてどうもなんねへ○〔ト二重へ上つて來り「少々物が承り度がんす前橋へはどう出たらようがんすか　仁「前橋は此山を向ふへ下りて眞直ぐに往つて左りへ曲つて又突當ると向ふに橋が見へる夫を渡ると直きだ　多「ハイ有難うございやす〔ト行うとするを此内小平扨はといふ思入あつて　小「ヤイ待て〳〵手前は沼田の下新田の多助だな　仁「何だ多助だ　多「ハアどなた樣でがんすこの　小「久し振で逢つたなア〔ト多助透し見て悔りなし」　多「御免なすつて下さい〔ト逃げにかゝるを小平首筋へ捕らへ　小「ヤイ待ちやアがれ　仁「成程多助だ妙な所へ來やアがつたな　小「ヤイ多助手めへの所へおつかアとぐすりに往つてしくじつた故寺參りの歸りを待伏せお梅をさらふと思つた所邪魔侍が出やアがつてとう〳〵夫もやり損ひ今に上州にうろ附て居るのは意趣を返さうと思つて居るのだ〔ト蹴倒す」　仁「ヤイ多助手めへ前橋へ行くといふは何れ懐に持て居るだらうナア兄イ　小「持て居なくつてどうするものか身ぐるみ脱て置て行け　多「イエわし金持つてはおらんでがんすお栄も心得違ひを仕やんしてわし家に居られねへで六百の錢を路銀にして是から江戸で奉公をする身の上御勘辨なすつて下せへまし　小「陸をいへ三百石の田地持ちが六百斗りの端た錢で江戸へ行く筈がねへ　仁「早く裸になつて行なじたばた仕やアがると殺して仕舞ふぞ〔ト小「お願ひでがんす命斗りは助けて下ないわし是から江戸へ出て辛抱をして國へ歸り盡原家へ恩返しを仕なければ死だおとつ樣に對し濟まねへから御勘辨なすつて下せへやしお願ひでがんす〳〵　小「ヤイ延喜が悪いや神や佛じやアあるめへし拜みやアがるなへ○サア出しやアがらねへと打切るぞ〔ト刀を拔て振上げる」　多「モシ出し升〳〵命斗りはお助けなすつて下せへやし　仁「サア脱げ〔ト着物を脱がせる是にて下福袢一つになる」　小「サア金財布を出しやアがれ○〔ト多助の首に掛けたる財布を取り「仁助福袢も剝て仕舞へ　多「どうかお慈悲に是だけは　仁「ならねへエヽ脱ぎやアがれ○〔ト無理に脱がさうとする多助は脱ぐまいとする爭ひの内多助誤つて大せりへ落込む「ナイ兄イあの野郎め落やアがつた　小「何だ谷へ落たか　仁「然し妙だなお袋を仕事に仕樣と思つた所其悴迄が網にかゝりやアがつたとは悪い事は出來ねへな　小「ろりやこつちの事だ然し六百とぬかしやアかつたが此財布の重味じやア餘ッ程ありさうだ○〔ト財布の中へ手を突込み探り見て「ヤコリヤみんな鐚錢だ　仁「そんならあいつのいつた通り六百か　小「いめへまし藏骨を折らしやアがつた〔ト財布を下へ叩附ける」　仁「何た捨るのなら貰つて置う〔ト捨つて懐ろへ入れる花道の下にて」　覺心「モシお浮雲なうでざい升よ　小「今の辭と惜にお袋〔ト仁助

多助の着物と帶を抱へ」仁「是は本の前藝だ是からが本藝だ　小「手めへは斯うしな〔ト呼き
仁助は下手藪疊の後ろへ小隱れなし小平ハ上手宮の内へ這入る此内花道の下より覺心先に
丹次風呂敷包を背負ひ片足に草鞋をはき片足素足お龜草鞋を持ち素足にて丹次に手を引れ
出て來り」お龜「私しやモウ此岩で足が痛くつて　覺「だから草鞋をおはきなさいといつたよ
龜「どうしてそんな暇があるかいなァ　丹次「然し暗くつて困るな　覺「提灯を持つて來ればよ
うござい升たね　丹「どうして〳〵提灯があつてたまるものか〔ト二重へ上り」　覺「爰がモウ
岩上村でござい升から是でお別れ申升　丹「さうか能く深切に連れてくれた　龜「御緣があつ
たら又お目にかゝり升せう〔ト両人氣のせくこなしにて行にかゝるを」　覺「アゝモシ一寸待
ておくんなさい　丹「何ぞ用か　覺「ハイ實はお禮があるだらうと道案内迄仕て來たをハイ左
樣ではひどいねへ　丹「是は氣が附かなかつた心がせく故了簡してくれ○〔ト胴卷より小判
を一枚取出し「少しではあるが今晩の禮に取て置てくれ〔ト渡す」　覺「成程是は少しだね
龜「何れ世に出た其時はたんとお禮をするわいな　覺「馬鹿な事をおいひなさんなお前方の世
に出る迄お覺の壽命がござい升せんよ　丹「シテ今晩の其禮は　龜「幾ら欲いといふのだへ　覺「
幾らかくらといはねへから胴卷の金は固より身くるみ脫で貰ひ度のサ　両人「エヽ　覺「夫が欲
さの送り狼此お婆アさんに見込まれたら只は通しは仕ねへからハイといつて置てお出　丹「
扨い改心したとは偽りにて　龜「まだ心が直らないのだね　覺「知れた事よ十五の年から六十
迄ざつと積つて四十年人の懷ばつかりでおまんまも頂戴すればお酒も頂いて來た者が何で
心が改り白髮天窓を剃るものか尼になつたは身のぼく除けおめへ達も位牌間男赤い信女が
孕だ爵と思へば諦めが附くだらう　丹「如何にも金はくれてやらうサア受取れ〔ト扨打に肩
先へ切附ける」　覺「ヤコリヤおれを切りやァがつたな〔ト宮の内より小平藪疊の蔭より仁助
出て來り」　小「何だおれのお袋を　小、仁「切りやァがつたか　丹「誠にわれは去年出會つた　龜「
お覺が悴の小平とやら　覺「悴仁助やつて仕舞へ　小、仁「知れた事だ〔ト小平仁助拔連れお覺
は出刃庖刀を出し立廻りの内丹次仁助を切る覺心お龜を捻伏せ喉を突うとするを丹次覺心
の背中を切り仁助丹次の背中を切る」　龜「コリヤ旦那をば　仁「うぬも一所に〔ト双方立廻
りお龜危くなり大せりへ飛込ひ　丹「ヤコリヤお龜には　覺「其身を遁れて　小「遁かの谷間へ
仁「うぬ〔ト丹次に切つてかゝるを丹次切下げ仁助落入る是より三人立廻りあつて能き見得
より二重をせり上げるトヽ丹次覺心を切倒し止めを刺す小平丹次の肩先へ刀を突込み両人
落入る此内道具をせり上げ上より霰を下ろし三人を消す舞臺は二重の蹴込みより山幕附て
上り一面の山幕となり跡山おろしにてツナギ後ろの道具出來次第山幕を切て落す
本舞臺上下高二重上手岩組の蹴込み下手草上手の蹴込み丸太の橋を架け向ふ坂になりし谷

川の急流上の方山の裾下の方土堤越しに在体の夜の夜見下手二重際より舞臺前へこのけて蛇籠に見切り是より上手流れの浪布すつと上手岩山の出しこのけ下手橋の際に道知るべの立石松の立木同じく釣枝都て岩上村吾妻川の体爰に松の枝に小田原提灯をかけ橋の上に多助水に濡れし以前の拵らへ善右衛門旅形りにて多助に藥を呑まし居る和平若き手代旅形りにて菅笠の上に割掛の荷を置き多助の介抱をして居る時の鐘水の音所々鶏笛にて幕明く　和平「人ヤアイ——　善右衛門「コレ和平人といふ呼様があるか　和「夫でも名前が知れ升せぬから　善「イヤ〳〵身には襦絆一つあれども大方是は旅人であらう今の藥が通つたれば息の戻るに違ひはない旅人といふて呼んで見ろ　和「畏り升た旅人ヤアイ——　善「心を慥に持なさい　○「ト両人呼活け水を壯かす事あつて「氣が附たか　多「ハイ　和「コレしつこのり仕なさいよ〳〵　多「此山は針の山で爰は三途の川でがんすか　和「馬鹿な事をいひなさい爰は上州の岩上で此川は利根の枝川　多「ハア夫ではわしは生て居るのでがんすか　善「成程一旦死人同様息の絶へた骸故さう思ふも尤だがわしは通行の旅人にて宿屋の女が時を違へ立したので難義仕ながら來た所其蛇籠に人の死骸がかゝつて居る故此供の者に言附けて介抱をさした所息の戻つたお前の骸　和「何で爰で死で居たのだ　多「イエ決してわしから死だのではがんせんわしは是から七里程在方の者でごせやすが辛い悲しい事がありやして錢六百を路銀にして江戸へ出升て奉公を仕様と思つた所此山の上でがんせうか追剝に出會錢も着物も取られた揚句崖べりから辷り落ち夫から跡は何にも知らず其儘死で仕舞升たら養父の家も立られず濟まねへこんでがんしたにあんた方のお蔭を以て生返つたは命の親何とお禮を申べいか　善「イヤ禮には及ばねど養父の家を立ねばならぬ骸とは　和「一体夫はどういふ譯だへ　多「ハイ是をいふと親の恥やわしの外聞を振舞はねば成らぬ事でがんすから是ばつかりはどうもハア　善「其子細は何か知らねど今の一言で心底は分つたが奉公に望みがあらつしやるか　多「イエ望みといつてはねへのでがんす只金が溜め度のでがんす　和「慾張た男だな　多「夫も路用の錢は取られ着物は剝れて江戸へも行かれず又内へも歸られずア、困つた事になつて來たなア　善「何とお前私の所へ奉公せぬか　多「エ、○何とおつしやいやす　善「私は江戸の佐久間町で炭問屋を渡世にする山口屋善右衛門といふ者たがお前の難義を見捨て別れるも氣の毒なり又正直らしい男故奉公よ望みがなくば私の所へ來てはどうだお前さへ得心なら私と一所に江戸へ來なさい　多「何にも申升せぬ旦那様死た者を元の骸に仕て下せへやした上に内へ來て奉公せへとはわしが爲にハ氏神同然此御恩ばつかりは死でも忘れは死しやしねへ有難うがんす〳〵　善「兎角人間といふ者は少し自分でどうかなると直きに元の事を忘れる者故決してさういふ心を出さず今の詞を忘れぬ様　多「勿体ない事おつしやいやそな今日

の難義を忘れては天道樣へ濟まぬでがんす 善「然し濡襦袢では（コレお前其濡襦袢を捨て仕舞つて此合羽を着て行なさい〔ト自分の合羽を脱ト」 多「捨るなんて勿体ねへ此襦袢の糸一本でも皆人の手で撚をかけたもんでがんす 善「デモ骸の毒だから 多「夫では御深切に甘めへやして合羽は拜借致しやすが此襦袢は持て行やす〔ト合羽を受取襦袢を脱で着る」 善「さうして名は何といふ 多「多助と申やす〔ト此内和平提灯を取り」 和「夫では旦那參り升せう〔ト割掛の荷と管笠を取る」 多「其提灯も荷もわしが持て行き升べい 和「イヤ〳〵夫には及ばぬ 多「何是が奉公でがんす〔ト荷物を取て肩にかけ提灯を受取り濡襦袢を持つ」 善「夫では和平 和「旦那樣 多「お先へめへりやす〔ト先に立ち善右衛門和平二重を下りる上手より お龜髪をさばき着附所々破れたる以前の拵らへにて出て來り」 お龜「此身に恙はなこつたなれと案事られるは旦那の身の上〔ト此内三人花道へ行き」 多「ヤ髨はどうやら 善、和「女の樣だが〔ト多助提灯を上げ舞臺を見る此時顔を見合せ」 龜「ヤそなたは多助 多「おつかさんか ○〔ト悔りして提灯の火を吹消すのが木の頭「旦那樣夜が明けて參りやした〔ト此模樣宜しく木の頭より遠見の向ふへ西洋仕掛の日の出を發し烏笛驛路入りの馬士唄よて拍子幕〔ト幕の引附けと一所に多助合點の行かぬこなしにて善右衛門和平附添ひ向ふへ這入る

八幕目

（筋違内廣小路の場
同戸田家門外の場
壇原角左衛門長家の場
佐久間町炭問屋の場）

役人替名

一山口屋下男多助　一奏賣屋亭主伊助　一早川藤助
一道連小平　一伊助女房お辨　一善右衛門悴善太郎
一山口屋善右衛門　一辻番の親仁甚作　一丁稚幾松
一角左衛門妻お清　一仲間の勘太　一壇原角左衛門
一手代和平　一同新助　一仕出し大勢
一荷主八右衛門　一小家主女房お松　一輕子大勢
一鎌田市作妻お菊　一同お竹　竹本連中

本舞臺平舞臺上手石垣の上に草土手の書割此上に柳の立木下手葭簀張りの奏賣店伊助亭主の拵らへにて海苔卷の鮓を拵らへ勘太新助渡り仲間の拵らへにて立かゝり茶碗酒を呑み女房お辨一升徳利の口を押へ居る正面二軒に仕切りし葭簀張りの小家上下共に三尺の入口是にお松お竹小家主女房の拵らへにて立かゝり此前に惣出の仕出し立かゝり居て辻打よて幕

明く、お松、お竹「お這入り〳〵」　○「此でろれん左衛門の噂アハよつぽど味いな　△「又こつち
のよぼくれ坊主も味くやるせ　松、竹「お這入り〳〵」　×「どうだ聞て行うか　□「イヤおれは向
ふの豆藏を見て來る　皆々「ヤア刀を呑んで居る〳〵」〔ト皆々捨臺詞にて橋掛上下の小家へ
別れて逼入るお松お竹も内へ這入る」　伊「床机が明ており升が内へ這入てお上り被成ては
どうでムり升　新助「夫さういふいゝ世辞だものダカラいつでも一盃呑む所は二盃になるの
だ　勘太「臺が明て居るなら入れて貰はう何所で呑むのも同じ直だらう　お辨「どなたもお這
入り被成升せいなア　両人「夫じやア内へ入れて貰はう〔ト両人内へ這入る向ふより吉田八
右衛門脚半草鞋半合羽にて風呂敷包みの手荷物を提げ早川藤助羽織着流しにて出て來り」
藤助「八右衛門さん久し振でお目にかゝつて御馳走になり升た　八右衛門「イヤ最前もいふ通り
今度親父が病氣に附て始めて江戸へ仕切を取りに來たわし故せうもない料理屋へ連て這入
て嘸御迷惑でムり升たらう　藤「どう致し升て大層頂戴致し升た　八「然し私に搆はずと往つ
て被下升せ　藤「お歸りになり升たら皆さんへ宜しく又おとつさんの御病氣も御大事に被成
升せ　八「ハイ有難うムり升　藤「左樣なら〔ト上手へ這入る八右衛門舞臺へ來り」　八「成程江
戸といふ所は何所も賑やかな事じやなア〔ト餘念なく邊りを見て居る向ふより小平商人の
拵らへにて遑散に走り出て來り八右衛門に行當り八右衛門の前へ俯向に轉げ小平も後ろへ
ひつくり返り　両人「アイタ、、、〔ト伊助お辨走り出て來り」　伊「モシどう被成升た　辨「早
うお起被成升せいなア　両人「アイタ、、、〔ト小平は漸う起上り」　小平「有難うムり升飛だ麁
相を致し升たアイタ、、、　辨「モシあなたお起被成升せいなア　八「起られ升せぬ〳〵　小「
是は誠に申譯があり升せん柳原の土手で怪しい奴が附て參り升たが懷には金があり心配仕
い〳〵參つた所そいつが小便を仕升た故其間に駈けて來たはづみに飛だ麁相を致し升た御
免あさつて下さい升せ〔ト八右衛門を引起し砂を拂ふてやる」　小「アイタ、、、怪我といへ
ば仕方もなけれど人の横つ腹へ石を打附けたがな　八「何石ではムり升せんッイ天窓が當つ
たのでムり升　八「ひどい堅い天窓だなアアイタ、、、　伊「其所に居てと馬や車があぶあう
ムり升からこつちへお這入り被成升せ　小「夫は御深切に有難うムり升○夫では爰の見世を
借て持合せの藥がムり升から夫でも上つて暫くお休みなさつて下さい　八「さうでもさして
貰ひ升せう所詮是でいあるけ升せん　小「モシ夫では暫くお見世を拜借しても宜しうムり升
うか　伊「サア〳〵お這入り被成升せコレお辨傍にお客があるから對立で囲ふてお上げ申せ
辨「アイ〳〵〔ト内へ這入る」　小「夫ではあなた私の肩へつかまつて下さい〔ト伊助手傳ひ
小平八右衛門を肩にかけて内へ這入る引違へて新助勘太お辨出て來り」　お辨「モウお歸りで
ムり升の　新助「隣へ生醉の客が這入つて來たからひよつと間違でも出來てはナア勘公　勘「

さうだ喧嘩でも出來るといつでも折助から吹かけた樣に思はれるから障らぬ神ゑ祟りなしだ錢はあそこへ置たよ　蕣「夫は有難うムり升が今のは生酔ではムり升せぬわいなァ　新「夫では中氣でも起つたのか〔ト伊助出て來り〕」　伊助「イヱ今あの人が爰に立つて居升たら跡からあのたな風の人が走つて來て突當つた其拍子に骸をひどく打たと見へ歩けぬのでムり升　蕣「夫も酒臭い所を見ると何所ぞでお酒を呑んだ上あんな目に逢ふたので逃上をしたと見へ升わいなァ　勘「夫は何しろ浮雲事たが　新「酒を呑むと用心を仕ゑやァならねへな　勘「然し出掛やうか　伊、蕣「毎度有難うムり升〔ト勘太新助上手へ這入る葭簀の後ろより小平出て來り〕」　小平「誠にモウ斗らず御厄介になり升て有難うムり升る　伊「お前さんも時の災難シテあのお方はどう被成升た　小「ハイ持合せの藥をお上げ申升たら少しは痛みも去つたかして今すや〳〵と寐入てゞムり升是はちつと斗りでムり升がお茶代に取て置て下さい升せ〔ト財布より錢を百斗り出して無理に伊助に渡す〕」　蕣「夫はマアおよし被成ば宜しいに　小「私は横山町三丁目の播磨屋と申袋物屋の奉公人で小八と申者でムり升が主人の急用で本郷迄金子を持て參らねばなり升せねば今にもあのお方がお目が覺め升たらどうか宜敷お詫びをば　伊「宜しうムり升お目が覺たらさう申て置升せう　小「夫ではどうか何分宜しく　伊「然し澤山ゑ　両人「お茶代を　小「イヱ何〇〔ト内懐へ手を入れて一寸思入あるが道具替りの知らせ「どう致し升て〔ト小平は上手へ這入る此摸樣宜しく辻打にて道具ぶん廻す本舞臺眞中二間數臺附の辻番見附板羽目是に六尺棒捕繩を掛け前側の左右木戸下手前へ出して黒塀此内瓦葺の雪隱の家根を見せ上手海鼠塗の屋敷塀松の釣枝都て筋違内戸田家邸外の体辻番の内に甚作辻番の爺の拵らへにて膝隱しの對立を前に置揚枝を削り居る此摸樣時の太鼓合方にて道具納る〔ト上手より小平跡を振返りながら出て來り〕」　小平「モシお願ひ申升一寸手水場を拜借致し升　甚作「よし〳〵〔ト小平こちらへ來り邊りを氣使ひながら股倉より以前の八右衛門の半合羽を出し又脊中より草鞋と脚半を取出し持て下手黒塀の内へ這入る向ふより多助轡の紋の附きし洗晒らし淺黄筒袖の半被の上に小倉の帶をしめ尻の切れし藁草履をはき天秤棒にて炭を四俵擔ぎ出て舞臺へ來り」　多助「ハイ御免なさいわしは佐久間町の炭屋の善右衛門の所から炭を持てめへりやしたが此戸田樣の御家來に鎌田市作樣といふがありやすか　甚「御通用門へ往つて聞け　多「其御通用門と申やすは　甚「うるさい奴だな是に附て曲るのだ〔ト上手へ指をさす〕」　多「有難うごせへやす〔ト上手へ這入る塀の下手より小平脚半草鞋以前の半合羽を着たる拵らへにて出て來り懐中より八右衛門の手風呂敷包を出し投足を仕ながら花道へ行く〕」　小「さつきの野郎が呑みながら話しの先は佐久間町の炭問屋〔ト甚作見て〕」　甚「通れ〔ト大きくいふ小平恂りするのが道具替りの知らせ」

小「悔りさしやァがつた〔ト向ふへ這入る此摸樣宜しく合方にて道具ぶん廻す
本舞臺一面の板塀眞中に板家根三尺の門此柱に鎌田市作と記せし表札松の釣枝都て戸田家
邸内長家の体合方にて道具納る〔ト床の淨るりになる」淨るり「太刀は鞘弓は袋に納れる太
平の世も武士の治に居て乱を忘れざる竹刀の音の絶間なき屋敷〳〵の其中に一際勵む戸田
家の邸内音勇ましく聞へける〔ト合方竹刀の音になり橋掛りより多助炭俵をかつぎ出て來
り」多助「辻番でいふた通り通用門で聞て見たら深切に教へてくれ此二軒目といつたつけが
○〔ト表札を見て「能く仕たものだ鎌田市作とけへてあるハイ御免下さへ〔ト内にて」お菊「
コレ御案内があるではないかお君はおらぬのか○〔ト家中女房の拵らへにて出て來り「ろ
なたは炭屋か　多「ハイ山口屋善右衛門から四俵持て參りやした　菊「そんなら二俵だけ内へ
入れて置ておくれ　多「長りやした　菊「本にあの男は田舍者の樣子じやが體の御紋附とは頂
戴物か外に何ぞ謂れでもあるのか面白い形りではあるわいなァ〔ト此内一俵宛門の内へ運
び出て來り」多「お臺所の脇へ置やしたがようがんすか　菊「夫でよいがお前の其御紋附の着
類は何ぞ譯でもあるのかへ　多「何譯は何もありましねへがこんな古着ががんした故德用と
思ふて買たのでがんすさうして此二俵はどうするでがんす　菊「夫はお隣のお宅へ手前方か
ら申たとて持て行きな　多「夫はようがんすが代を貰ひてへもんでがんす〔ト受取書を出す」

菊「代物と跡で一所にやるよ　多「夫でも跡で炭取た覺へはねへとでもいはれたらわしは田舍
者で仕樣がねへのでがんす主人が大事でがんすのらそんなら二俵だけ戴いて置升へい　菊「
本におかしな炭屋ではある欲くば代物を渡すのらこつちへ這入りな　多「ハイ有難うがんす
〔ト お菊に附添ひ門の内へ這入る下手よりおとせ下女の拵らへにて出て來り」　おとせ「御免
遊ばし升せ御新造樣お宅よでムり升るか　菊「ハイどなた○〔ト出て來り「チヽ今度お國の
ら附て來たお隣のお召使か只今炭屋が參り升たよ　とせ「夫い誠ス憚り樣でムり升る昨日お
國より參つた斗りで少しも勝手が分り升せぬ故あなたへお願ひ申升たが實は夫を伺ひに參
つたのでムり升る　菊「夫は丁度宜しうムり升た○コレ炭屋　多「ハイ○〔ト門の内より財布
を卷なから出て「おかみさん偖に代は戴き升た　とせ「ナホヽヽヽあなたをおかみさんと申
ており升る　菊「イエモウ田舍者と申が誠に正直な面白い炭屋で○コレ炭屋此お隣のお召使
と御一所に持て行な　多「夫では一所に參り升べい　とせ「左樣から御新造樣大きにお世話で
ムり升た　菊「イエどう致し升て〔ト是を合方木なしにて道具廻る
本舞臺續きの板塀矢張板屋根三尺の門此内に盥原角左衛門荷物と記せし木札を附けし明荷
拵包の荷物を片寄せて置き都て以前の道具に續きし長家の摸樣半廻りに納る〔ト両人廻り
に附て來り」とせ「爰が宅故其炭俵は内へ入れて置ておくれ　多「ハイ畏りやした○〔ト おと

せ先に多助炭俵を擔ぎ門の内へ這入り暫くして天秤棒に鍵縄を括附けおから出て來り「犬が小便をかけると焚て臭ひから戸を建かけて置やしたようがんすか○ 淨「いひつ〳〵傍の荷物を見やり「盥原角左衛門荷物○ 淨「といふ名に恂り「ヤおらが實のおとつ様の名前も盥原角左衛門なら下新田の養も盥原角左衛門まだ其外にも盥原角左衛門といふ人があるのか知らんて○ 淨「暫し小首を傾けしが「若しや是か別れた實のおとつ様ではあるまいか 淨「心附ては矢もたまらず隣の内へ〔ト多助遽て、上手へ行かけ躓て轉ぶ此内木なしにて道具廻る

本舞臺元の道具に戻る 淨「走り行く〔ト廻りに儘ひ多助膝をさすりながら門の所へ來り」 多「モシおかみさん〳〵 淨「と遽しく呼ぶ聲に何事やらんと立出る内室 菊「炭屋何だよ 多「此隣は元から此お屋敷の殿様でがんすか 淨「といふもせき立つ顫ひ聲 菊「此炭屋はれかしな事斗りいふよお隣様はアヽモウ十三四年前方に新規お召抱へになつてからお國詰を言附かり今度始めて此江戸へ 多「そんおら若しや其以前は阿部伊豫守様の御家來じやがんせんか 菊「偖にさうだと聞たよ 多「夫では彌々○有難うがんす 淨「と立つ足さへも早腰を抜かす斗りのしどろ足元の長家へ〔ト又木なしにて道具廻る

本舞臺元の半廻りの道具に戻る 淨「駈戻る 多「御免下さい〳〵炭屋でがんす〳〵 淨「案内を慇し床しの胸押靜めてぞ〔ト是を木なしにて又逆に廻る

本舞臺上手の正面玄關の前側左右杢戸眞中障子建切りあり是より下手前へ出して常足の二重二間に仕切り上の方の見附小摸様の襖玄關に綴きの横手障子を建し肱掛窓次に下地窓の小壁此見附唐畫の唐紙前側葭障子取合の柱より前へ出して建仁寺垣下手落間跡へ寄せて建仁寺垣此前松の立木石燈籠植木棚松の釣枝すつと上手以前の門の裏を見せ以前の明荷拭包の荷置あり淨るりにて道具納る 淨「入りにける同じ長家の其内にも一際目立家造りの身分有氣に見へにけり多助は息もすた〳〵と走り入たる玄關前 多助「モシおかみさん炭屋でがんす〳〵 淨「呼立聲に妻お清奥の一間を立出て お清「うなたは炭屋代物でも貰ひに來やつたか 多「イエちと聞度事がありやして參りやした 淨「といふに不審の宿の妻 清「シテ聞度事とは 多「爰の内の殿様は元阿部様の盥原角左衛門様でおかみさんのあんたはお清さんといひやすか 淨「と委しく知つたる詞に恂り 淨「如何にもそなたのいやる通り私はお清といふ者じやがそなたは 淨「問はれて多助泣聲振立 多「成程別れて廿一年逢ひましねへわしだから忘れさつしやつた筈でがんすわしやお前の子の多助でがんす 淨「聞て恂りすり寄つて 清「エヽろんなら多助であつたるか 多「おかゝ様でムりやしたかあつかしうムりやす 淨「おなつかしやと親と子が絶て久しき對面に先立ものは涙なりお清は彌々涙を拭ひ 清「本にマ

アなつかしいといとうか思ひがけない無事の對面夫にしても合點の行らぬはどうしてろなたは此江戸に炭屋の下男になつて居やるぞ　海「いはれて多助は去〳〵泣き　多「是には段々悲しい譯がある事でがんすが此年月おとつ様やかか〻様にお目にかゝりてへと神信心をしたなア　海「又も涙に吳竹の臥しておつたる角左衛門寐耳にかゝと聞くよりも次に來つて隔ての障子はたと建切る物音に妻も多助も惘れ顔〳〵下手前側の障子を引拔き角左衛門壹寐を仕て居たる思入にて樣子を聞き次の間へ來り窓の障子を建切る」　濟「ヤあなたは我夫　多「そんなら今のゝおとつ樣か　海「といふを障子の内に聲立　角左衛門「だまれ親とは誰を申假染にも殿樣のお傍近く勤めをする此盧原角左衛門炭屋の下男に知るべは持たぬ成程昔を顧みれば上州小川村に浪人して山稼ぎを致せし頃同國沼田下新田の百姓盧原角左衛門の悴多助を里に取り八歳迄養育せしが親元へ引渡せし時謝禮に贈りし五十兩其金子より當家へ有附き三百石頂戴致すも皆下新田の角左衛門殿の恩義でないか身共お召抱へになると間もなくお國詰を仰附けられ數百里を隔ておれば文通の自由もならず又おまじいに便り致せば其多助といふ者が我々を實の父や母ありと若しも心得違ひの致し實父に不孝な事でもありはせぬかと態と便りも致さゞりしに江戸にて賤しき拳公するは親の心に適はずして勘當されし者なるか但しは酒色に身を落し此江戸に彷徨おるか何れにしても親の家を捨て出しは不孝の罪人目通り叶はぬ出てうせう　海「義を金錢の爺親が怒る詞を障子越し聞くに多助も母親も涙の瞼押拭ひ　濟「成程其お腹立は御尤に厶り升れど若い時に酒や女に身を誤ると儘ある習ひ假令家出を仕たればとて廿餘年が其間逢見ぬ子をば其樣にひどたらしう呵らいでも　海「といふをいはさず目に角立　角「ヤア麁相申な元の親へ戻したれば赤の他人の我々夫婦どう落ぶれ樣と搗はねど夫では武士の義理が濟まぬ長居致さば手討に致すぞ　海「態と聞かする高聲に多助は恐れて身を縮させ　多「ア、おとつ樣參り升〳〵わい其命が惜い斗りに國を出てから長々の難義苦勞も養父の爲家が立度身の願夫を今打切られては死だおとつ樣に言譯ならず命斗りはお助け被成て下さいまし　海「父がおゞしを誠ぞと思取つたる正直者母は詞を聞咎め　濟「コレ多助死だ親へ濟まぬとは若しや盧原角左衛門殿には　多「八年跡に死なしやり升た　濟「エ、　多「夫に附て悲しい譯の一通り聞て下せへやし○中々わし女や酒におとつ樣の金を使ひ國をも出ねは勘當をもされたのではがんせんおとつ樣には八年跡に死なしやり升てわしが家を繼やして嗅も持たでがんそけれど其女房といふ者はおつか樣には妹の○夫にはいとれぬ譯がごんして今は何にもいひましねへがわし國を出ねへでは命に拘はる事があつて家の潰れるも分つて居れど江戸へ出て奉公して金を溜めて國へ歸り家を興さ

ねば死れた親に濟まねへ事と國を夜脫けして出た途中路用の錢も着物も取られ死だ骸を今の主人山口屋善右衛門樣に助けられ今日迄形りにも突搏はず奉公大事と此樣な姿をしてかりやす故逢つては親の耻と思つて逢つて下さらねへのでもがんせうけれど決して不埒な事をして國を出たのではがんせんから堪へて下せへおとつ樣　淨「有し樣子も憚りて皆はいはねど母親と　濟「チヽさうであらう〳〵子供の内から物の理を辨知つたそなたをば阿つたはこちらの誤り親への義理も孝行も辨知つた悴なら逢ふてやつて被下升せ　淨「と密の障子に手を掛れば角左衛門ちやつと押へ　角「イヤ待て女房早別れて廿餘年逢はぬ彼が今の詞不審にもあり又健氣にもあるなれど逢ふては彼が爲にならぬ○イヤサ家の爲を思ひ誠恩義を存じおらば死た親はいふ迄なく今の主人にも死る命を助けられたる恩義があるとの事なれば忠義を勵んで勤め上げ元に增りし盥原の家再興を致してこそ子たるの道と申者我は僅八歳迄養育致せしのみなれば義理も恩も些細な事其夫婦に心引され顏が見度抔といふめろ〳〵とした根性では所詮一家はなき難しそちも武士の悴でイヤサ假令百姓の子にもせよ夫程の事は辨へおらん立派な人になる迄は目通り叶はぬ立歸れ　淨「口にはいへど心には不便の者やとせゞり來る涙呑込み入りければ妻も涙に呉竹の節ある夫の言の葉に纖穗も泣目拂ひつゝ是非なくこなたへ立戻り　濟「コレ多助聞きやつたか迚もお逢ひにはならぬ故歸つたがよいわいのう　淨「と本意なげに言聞ければ　多「ハイ歸り升分りやした八つの年にお別れ申お顏も祿に覺へ升せず今おつか樣の顏を知り猶なつかしいはおとつ樣只一目見せて下せへやしたら此後途中で逢ひやしてもお達者で居らゝしやると思へば詞はかはさずとも心丈夫に奉公が出來やすけれど逢はつしやらねば是非ねへ事でムりやす　淨「我を忘れて樣側よ賴び心のいぢらしさ聞く母親も保ち兼　濟「何れわしが執成て置程に今日の所はいんでたもひのう　淨「力を添へて說論せば多助は咽ぶ涙を呑込み　多「何わしも男でがんす立派な人とならぬ内はモウ逢ひには參りましねへおとつ樣へどうぞ宜しく　淨「いひつゝ立て行かけるを母は本意なさ限りなく　角「コリヤ女房炭屋を一寸待たしてくれ　濟「畏り升た○　淨「夫の呼ふは心解け對面ゆるす事もやと心嬉しく女房お清「コレ多助おとゝ樣が待てとおつしやる一寸待てたもひのう　淨「我子を暫しと止め置夫の居間へ打通れば角左衛門手箱より金取出して妻を招き　角「此金子は其昔角左衛門殿に惠まれし五十両當家に有附きしも角左衛門殿の蔭なれば盥原の家再興の足にせよと渡してくりやれ　淨「と差出せど妻は受取り　濟「成程夫はよい思召でムり升る○　淨「力泣々母親は元の座敷に立歸り我子多助に打向ひ「コレ多助おとゝ樣のおつしやるには是は其昔角左衛門殿より惠まれし五十両ろなたに渡して盥原の家再興の足しにせよとの夫のお詞受取たがよいわいのう　淨「と渡せば多助は思案顏　多「思

召は受けやすか塩原の家を興すは多助の義理でがんすから親にも伯父様にも厄介は掛やしねへ金はお返し申やす　濟「夫はそあたもわんさり氣强い　多「遠者で居て下せへまし　濟「勝をも見ずして走り行く母と餘りの本意なきに保ち兼たる恩愛の涙にくれて居たりしが女心のやる瀬なく　濟「本意ない別れも是非なけれど若しや短氣な心でも出しはせまいこの○夫を思へば今一度　濟「行んとするを一間より　角「アイヤ待ちやれ○　濟「いひつゝ立出る角左衛門妻を押止め「我とても別れ程經し悴故逢ふて無事をも悦び度けれど態とすげなく言なせしは彼が心を勵ます爲去ればこそ金子迄戻して行し心の廣さと養父の家を引興す器量見へて頼母しく　濟「夫じやといふて親と知り折角逢ひに來た者を　角「逢はずにつれなくいなせしも養父へ立る武士の義理　濟「夫を思へばなほ中に今の出世が恨しい　角「コヲヤ不足を申な是も角左衛門殿の情でないか　濟「サア夫故にあの子迄恩を忘れぬ義理立に　角「名乘も合はで健氣にも　濟「養父の家を再興の　角「其金子迄戻せしは〔ト金包を取上る〕　濟「大方親の心を恨んで　角「イヤ左樣でないあいつ中々○〔ト金包を下に置くのが道具替りの知らせ〕「感心な奴だ〔ト此摸樣宜しく三重にて道具ぶん廻す

本舞臺通りの欄間是に入山形に善の字山口屋と印せし紺暖簾をかけ此上瓦家根二階の張物上の方三間常足の二重金網すかしの蹴込み見附眞中暖簾口上の方店戸棚帳簞笥帳面諸國來狀差の書割下の方二間の落間此正面入山形に善の字の印附し暖簾を掛し出入口下手土藏の書割此前用水桶都て炭問屋店先の摸樣二重上手に帳場格子を置き此内に和平住居小平二重に腰を掛け善太郎子役商人息子の拵らへにて住居幾松丁稚の拵らへにて小平に茶を出して居る稽古唄にて道具納る　幾松「お茶をお上り被成升せ　小平「是はお搆ひ被下升な　善太郎「只今おとつさんにさう申升たら是非奥へお通り下さる樣と申ており升ればどうぞあちらへ　小「ハイ有難うはムり升るが只今申通り親父が病氣中にて片時も歸りを急ぎ升れば　和平「左樣でもムり升せうが　小「決ておお搆ひ被下升るな〔ト奥より善右衛門羽織着流にて出て來り〕　善右衛門「善太郎此お方か　善太「ハイ　善「左樣あらあなたが八左衛門さんの御子息でムり升るか　小「ハイ私は下野國安蘇郡飛駒村の炭荷主八左衛門の悴八右衛門と申者でムり升が夫ではあなたが善右衛門さんでムり升か　善「ハイ只今悴から聞升ればおとつさんは御病氣ださうでムり升が如何でムり升　小「ハイさしたる病氣でもムり升せぬが寐所で證文と手紙を書て代りに行けと申され升た故始めて參つた譯でムり升か直ぐに扇橋から船に乘つて歸る積りでムり升から八十金お渡しを願ひ升○〔ト風呂敷を開くと手紙と十露盤入れあり此中より證文と手紙を出し「是が親父の添狀でムり升〔ト證文と一所に出す善右衛門開き見て〕　善「成程宜しうムり升○和平どん八十両出して下さい　和「畏り升た○〔ト戸棚を明け金簞笥

より八十両の金を出し「夫では是に八十両　善「どうぞお撿め下さい　小「ハイ〔ト金を受取る」　善「和平さん此証文と添状を仕舞ふて置て下さい〔ト和平手紙を開見て」　和「成程是は八左衛門さんのお手に違ひはムり升せん○〔ト証文も撿め帳箪笥へ仕舞ひ「いつもならば御一泊を願ふ所でムり升が親御の御病氣とあつては據ない事でムり升な　善太「せめておとつさん御臨でもお上げ申てはどうでムり升　善「成程さうだまだお支度前でムり升せう〔ト此内小平金を手帳と一所に風呂敷に包み」　小「イエ支度も致して參り升たが是が親父から話に聞た若旦那でムり升るかお年に似合はぬ心の屈たお利口な若旦那であなたもお樂しみでムり升な○是は大きに左樣なら〔ト包を持ち下手へ行く此以前橋掛りより多助出て來り小平を見て用水桶の蔭にかゞみ樣子を窺ひ居て」　多助「コリヤ泥坊待て　小「ヤあれは〔ト逃て行くを」　多「われ逃がしてたまるか○〔ト後ろより抱留め小平振放さうとして一所に倒れ多助を捻伏せ天窓を打つ多助は小平の胸倉を捕らへ「皆來てくれ泥坊だ〳〵〔ト暖簾口より輕子大勢出て來り」　皆々「何だ〳〵　多「泥坊だ〳〵　小「こいつが泥坊だ　皆々「イヤ多助どんは内の奉公人だ〔ト小平悔りなし」　小「エそんなら多助はあの炭屋の　多「泥坊だ〳〵　小「こいつたまらねへ〔ト逃やうとする輕子小平の髪を捕らへ足捕り手捕てになして舞臺へ引摺て來る」　善「多助是は下野の飛駒村の荷主の息子　和「八右衛門さんといふお人なれば皆

手荒い事をしてはなり升せんぞ　多「モシ〳〵夫が油斷でがんす是は多助が國を出た時路用の錢も着物も取られ死た命を旦那樣に助けられた其時の追剝の泥坊で道連の小平といふ奴でがんす　皆々「打殺せ〳〵〔ト有合ふ割木にて袋叩きにする」　和「コレ幾松若旦那にお怪我でもあつてはならぬ奥へお連れ申せ　幾「畏り升たサアお出被成升せ〔ト善太郎を連れ奥へ這入る和平皆々を止め」　和「コレ皆待たぬか疵でも附けたら跡が面倒其包を取てくれ　皆々「是でムり升か〔ト小平の持し風呂敷包を引たくり和平に渡す」　和「モシ旦那油斷がならぬではムり升せぬか　善「デモ証文の印形といひ添狀も八左衛門さんの手に違ひないに一体是はどうしたらう　多「夫は何所ぞで盗んで來たのでがんせう〔ト此以前橋掛りより八右衛門伊助に連れられて出て來り」　伊助「夫は全く此お方が盗まれたものに違ひムり升せぬ　多「さういふあなたは　八右衛門「實は私が八左衛門の悴八右衛門でムり升る　善「そんならお前さんが　皆々「アノ誠の　伊「夫は斯うでムり升私は筋違内の煮賣店伊助といふ者でムり升が何がお前さん私共の店先で此泥坊が此お方に行當り横ッ腹を打て歩けぬので私共の店の内へお入申て上げた所の此泥坊が上げた藥が眠藥で荷物の包み迄どうして持て逃げ升たか此お方が目が覺めての泣ての騒ぎあんまりお氣の毒でムり升たからお内へお送り申て參つて見ればお店の騒ぎ　八「飛だ災難に會ひ升てムり升る　善「マアこちらへお上り被下升せ　八「夫では御

発被成て被下升せ「ト二重へ上る」 和「然し其泥坊は打たれたなりさうして居るが死だのではあるまいか 皆々「死だかも知れ升せん 和「夫は大變だコレ水を持て來い 善「畏り升た○「ト暖簾口より手桶を提て來り「ハイ持て參り升た「ト置て這入る」 和「其水をふつ掛てやつてくれ ○「忌々しい盗人め「ト本水をかけ」 皆々「去つかりしろ〳〵「ト足ふて動かす小平息を吹返せしこなしにて」 小平「サア殺せ殺してくれ 皆々「どうしたと 小「サアどうともしろ何の遺恨があつて息の根を止める迄おれをぶちやァがつた 善「コレ〳〵元より遺恨はなけれども金をかたつたそつちに科があればこそろんな目に會ふたといふもの 小「何だ金をかたつたこいつ言掛けを仕やァがるないつおれが金をかたつたサア何所に金がある見てくれろ「ト始終骸の痛むこなしにて丸裸におり着物を振ふて見せる」 和「コレ其かたり取られた金も多助が歸つたばつかりに無難に戻つた八十両夫は爰に斯うしてあれば持て居やう筈があらうか 小「其持て居ねへ者を何でかたりとぬかしやァかつて死ぬ程なぐりやァがつたのだ「ト いひながら草鞋を脱き脚半を取る」 八「此男は何所迄太いか分らぬ男だ金は取ても取いでもわしに眠薬を呑まして合羽から脚半草鞋手荷物迄持て逃げ夫でかたりに來たでないか 小「こいつァ終に見た事もねへ野郎だが合羽をいつ取た脚半草鞋は何所にある手荷物とはどんな物だおれは見た事もねへぞ 伊「コレ若いのそんな遁捻な事をいひなさんな証人は此伊八お前出る時横山町三丁目の播磨屋の手代小八といふ者だといつた故さうかと思つて居た所思ひも寄らぬ紛失物人に毒を呑ますといふは輕からぬ事であらうせ 小「何時おれが毒を呑まして誰を殺した覺へのねへ事をぬかしやァがつて無疵な骸に疵を附け打ちやァがつた此仕打は一体どうしてくれるのだ「ト善右衛門思入あつて」 善「和平どん廿両出して下さい 和「何に被成升 善「ハテ何にしてもいゝから爰へ「ト和平廿両の金を出し」 和「左樣なら廿金 善「小平さんとやら此金を持つて歸つて下さい「ト小平の前へ金を出す」 小「何だ此金は 善「サア何とも名の附け樣のない金なれど此佐久間町でちつとは人にも知られた山口屋善右衛門其店先で彼此あつては世間の閑へも悪いから事穏便に此場を治るいはゞ内濟の扱ひ代どうぞ持て歸つて下さい 小「イヽヤ歸らねへ是がはした商人なら隨分持ても歸らうが今もおめへのいふ通り人も知つたる山口屋の店で欲に悪名附けられ打のめされた内濟が廿両じやァ歸られねへ 善「シテ又金に望みでも 小「勿論望みは百両だ 善「エヽ 小「どサいふ所じやァあるけれど事を好まぬ氣性に負け悪名を附けられた八十両は一文うけても歸られねへ 和「モシ旦那こんな奴は突出してお仕舞被成升せ 伊「成程夫が宜しうムり升せう 八「どうぞさうして下さり升せ 小「サア突出せ何科あつて突出しやァがるのだ 多「コレ小平おれどうなるかと思つて見て居れば能くマァろんな事がいはれたもんだ人は夫で承知して

も此多助斗りは承知がなんねへ　小「どうしたと　多「胸に手を當て考へたら分るだんべい○此多助が訴へたらわれ一体どうするだ人の娘を勾引おらか所へ金をゆすりに來た事もあるだんべい寺參りの戻りを待伏せお菜をさらはうとしておら迄をでけへ目に合はしたぞトゥの果が岩上でおらが路用の錢を取り着物迄おつぱいで殺さうと迄仕た事をどうもるおらが骸一つに附ても夫程の科があるだんべい左すれば廣い世界だからどれ程の事を仕てゐるかしんねへぞ　小「カウ多助手めへに出られちやァ叶はねへモウ何も角もいつて仕まふ今日両國で一盃やつて居た所隣に其間坂が連れと酒呑談を聞て居れば親が病氣の名代に佐久間町の炭問屋山口屋善右衛門へ八十両の仕切の金を取りに行くとの談しをば聞ちやァ遁さぬ地獄耳跡をつけて轉んだ振りで横ッ腹を天窓で打ち呑ましたは痛藥だろれで骸の動を止め引ッさらつた雜物で首尾よくかたつた其金もどちは組んだが手めへ達なら悔りとも仕ねへけれど此多助の身に附ては重なるおれが身の凶狀こいつに一番出られちやァ如何なおれも閉口だ　和「モシ旦那あれ程強くいつた者が多助のお蔭で自身の白狀　八「是では廿両の其金も伊「渡すゑは及び升まい　小「又やらうといつても貰はねへのだサァ繩を掛けて引てくれ　善「イヤかたりといつては猶の事私の店から繩附を出す事と好まぬから得心づくで上げる金是を持て歸りなさい　小「イヤ金は貰はねへ其代り多助を抱て行にやァならねへ　多「コレおれを抱て何所へ行くのだ　小「手めへを連れて牢へ行くのだ　多「エヽ○「ト氣味の悪くなりして なしにて「コレわれ悪い了簡でねへの何もさう牢へ斗り行たがる事はねへでねへか　小「だまりやァがれどうせ細つたおれが素ッ首何れ仕舞は小塚ッ原か鈴ヶ森へ板附で晒された其時にやァいゝ氣味だといつて笑つてくんねへ其代りにや此多助を抱て行にやァ腹がいねへのだ　多「旦那樣わしから事を起してお店へ難義をかけては猶濟まねへ事でがんすから抱て行くとあれば致し方のねへ譯でがんすコレ小平おれ悪い事の覺へいねへがわれ連れて行くなら勝手にしろ殘ら氣を揉でおれを殺すべいと云て命の盡ねへ中は死ぬ氣使へのねへものだ悪黨といふ者は人の情も辨へねへで命をどんせへにするが可愛想だから意見をするだが旦那樣が二十両下されば幸ひだから出家にでもなるか又と堅氣の商ひでも仕たら今迄仕た悪事も消へて疊の上で死ねるだんべいわれがお袋は又旅のお角といつてわれに劣らぬ悪黨だが一体われの親父といふ者は何だへ大方女房が悪黨でわれの樣な子が出來たに因て離緣をせねばなんねへ所で悪黨は悪黨連れで出たかも知んねへが其親が善人なら跡の心持はどうであんべい○アヽあいつが眞人間ならおれは心配を仕ねへものをどうか堅氣になつてくれろ今一度逢ひてへもんだと片時忘れる氣使はねへがやコレ大騒ぎやつて首を投出し取た所が其金高は小さな八十両夫に引替へおれ所の旦那を見ろ僅一時の間に二万も三万も儲け

る事を知つて居る人に較ぶればあんなり小せへ考へだからモウ止めろ悪い事はいはねへか
ら〔ト此内小平感じて俯向き居て〕小「カウ多助能くいつてくれた成程首から投出して田舎
者の眞似迄してかたつた所が金はたつた八十両こつちの内の旦那抔は蒲團の上にくはへ煙
管で首て一つひねくつたら一時の間に二万三万儲ける人よ較ぶれば成程虫より小せへもの
だ夫に又思ひ出すはお袋が離縁になりおれを連て出て行く時親父がはろりと泣おがらおれ
が悴にこんな又悪黨が出來るとは何たる因果な事だらうと俯向て泣た事を今考へるとおか
しな氣持になつて來やァがつたおれとモウ歸ると仕様〔ト着物を着て帶を去める〕菩「素直
に歸つて下さるなら約定通り二十両是を持て行なさい 小「モシ旦那思召は有難へが今此多
助の詞を聞て何だか無常氣になつて來やしてこいつの前へ對しても金を貰つちやァ極りが
悪くつてどうも爰が歸られ升せん其代りよは跣でも歸られねへから草履があるなら多助く
れ 多「柯だ草履をくれ廿両の金の代りに遣る草履あら何足だんべいコレ皆奥藏へ往て藁草
履を二千足程持て來て下さい 皆々「合點だ〜〔ト暖簾口へ這入り内より藁草履を荷ひ出
て山の様に積上て這入る〕小「こりやァ一体どうするのだ 多「二十両だけの草履をやるべ
いと思つて 小「馬鹿をいひねへ一足貰つたら夫でいゝのだ 八「然去あなたのお宅では大層
草履を 伊「貯へてお置被成るのでムり升な 菩「イエ何是は其多助が落した藁を拾集めて

和「寐る目も寐すに 皆々「作つた草履 小「ろんなら是はあのおめへが 多「コレ小平物は仇に
はなんねへものだよ○忘れも仕ねへ八年跡おれが江戸へ出る時に岩上でわれに出會ひ山か
ら落た其時に此旦那様に助けられ命の親のお主だから無給金で勤めて居るだ其代りには捨
る物と夜る寐る間のお暇を貰つて作り溜めた此草履塵が積つて山となり藏に一ぱい詰つて
居やんす 小「成程是を見るに附けても只取る金故惜氣もなく湯水の様に使つたが中々おろ
ろうには使はれねへおァ夫をば只取る商賣故此盗人程世の中に冥利の悪い者はねへなァ○
〔ト時の鐘になり「アリヤモウ暮六つ○夫じやァ草履を貰つて行くせ 多「サァ〜〜みんな持
て行つせへ廿両の金に代へたら是だけよなるだんべい 小「其横つ倒しをいつてぐずりつけ
たは今の誤り 菩「ろんおら 和「菩「こおさんは 小「今日から心を改めて何ぞ商賣でも仕升せ
うよ 多「能く改心をしてくれたなァ 小「おれも同じ人間だ是から辛抱して堅氣になつて逢
ひやせう〔ト草履をはく〕菩「夫ではモウ歸りなさるか 小「どなたも誠に濟去ねへ事を仕升
た今度逢ふ日は多助さん道連の小平じやァねへよ○〔ト骸の痛びてなしあつて〕「アイタ、
ゝゝゝ 多「どうした〜〜 小「何是もみんな悪事の罰だどなたもお邪魔を致しやした〔ト向
ふへ這入る〕 八「既に金をかたられる所を無難に濟んだも其お人のお蔭でムり升る 菩「然
しお前さんも御深切に能く此お方を送つて來てお上げ被成升た 伊「何にしてもお前さん所

にはい〳〵御奉公人があつてお仕合せでムり升此草履では實に恂り致しやした 八「誠にどうも感心な人でムり升なお前のお蔭で金も取られず又泥坊も事に因たら改心仕さうな今の口振り夫にしても此金子はお貰ひ申ても宜敷うムり升せうか 善「サア〳〵夫は證文をこちらへお貰ひ申たからあなたの金子でムり升（ト八右衛門風呂敷包を開き金を廿両取出し紙に乗せ）」 八「モシ多助さんとやら是はわしがお前へお禮どうぞ取て置て下さい 多「イエ入りませぬへ宜しうございやす 八「サア少し斗りであるなれど年季が明て國へ歸る時の路銀にでも仕て下さい 伊「折角おつしやる事だから貰つてお置なさい 多「わし荷主樣にした事ではがんせんから戴きやせん爰の内で間違ひが出來やした故家の事を家の奉公人がするのは當り前でがんすから禮を受ける筈はがんせん其代りにはわしがお願ひががんすが叶へて下せへやせうか 八「わしはお前の氣性に惚れたから出來る事なら何なりと 多「夫でハいけませぬしねへ慥に叶へてやると返答をぶちなせへ 和「コレ多助荷主の御子息へりんな事をいふといふが 八「イエ番頭さん宜しうムり升何でもわし聞升せう 多「夫は早速御承知下せへやして有難うございやすが千両の荷が送つて貰ひ度のでがんす 皆々「エヽ 多「何も魂消ねへでもようがんすわしモウ禮奉公共三年立つたら炭屋の店を開くべいと思つておりやしたが今日斗らず實の親に逢ひやしたがわしの身形がきたねへで乞食を見る樣にいはれやしたが心外でたまんねへでがんす夫故今にくわんとやつてどうだと親に見せたいのでがんすが夫も只貰ふのではがんせんわし其荷物を賣こなして金入れるだ金入れゝば又荷を送つてくれる譯にするんだからあんたも得意が一軒殖へわしも利益を見るんだから急度送つて下せへよ 八「宜しい急度荷を送り升せう 多「夫じやァ若し間違つたら千両の金を只やるべいといふ書附を一本下せへ 八「面白い書升せう○（ト持紙へ證文を認め印形を捺し）「是で宜しいか（ト多助見て）」 多「結構でごせへやす其さへあれば其時は 八「いつ何時でも千両の荷物は夫なる證文通り 和「モシ旦那大層な事を願つたではムり升せんか 善「夫も日頃の心掛がよい故人も得心して 伴「送る積荷が千両とし 多「番頭さん 和「何だ 多「旦那 善「ナイ 多「是もあなたの○（ト證文を開くのが木の頭「皆お蔭でムり升る（ト證文を戴く此樣宜しく合方にて拍子幕

九幕目

（本所四ツ目掛茶屋の場
（藤野屋李右衛門内の場
（相生町多助住家の場

役人替名

一計炭屋多助　一手代和平　一裏店噂お傳
一非人お龍　一藤野屋下女お芳　一佐助伴佐太郎

一藤野屋李右衛門　一茶店婆々お倉　一藤野屋丁稚國松
一樽屋久八　一お鶴悴万太郎
一藤野屋娘お花　一綿打佐助

本舞臺上手四ッ目と記せし橋の出し掛け此傍に葭簀張りの出茶屋是より下手一面に忍返し附の黒塀此内三尺の開戸中より見越しの松柳の梢と見せ松の釣枝上手川越しに町家を見たる中遠見都て四つ目川岸通りの摸様茶店の内にお倉茶店婆々の拵らへにて團子を燒居るお傳長家噂の拵らへにて炭を持ち立かゝり居る頃浪の音にて幕明く　お傳「お婆アさんいつもの炭屋はまだ來ないのかへ　お倉「ハイ結構なお天氣でムリ升　傳「お婆アさんの聲にも困るねいつもの炭屋はまだ來ないかよ」ト耳に口を寄せて大きくいふ　倉「アヽ炭屋さんかへまだ來升せんよダガモウ今ゴ來る時分でムい升　傳「そんならお婆アさん炭屋が來たら此炭の中へ十六文入れて置から貰つて置ておくれ　倉「ハイ夫へ置て行なさい」ト お傳炭の中へ錢を入れ床机の上に置」　傳「夫ではお婆アさん賴んだよ」ト橋掛りへ這入る向ふ久八樽買の拵らへにて」　久八「樽はござい明樽はござい○」ト いひながら出て舞臺へ來り「おつかアいヽ天氣だの　倉「ヲヽお早うござい升マアお掛けなさい　久「さうして多助さんはまだ來ないかへ　倉「ハイ禪を今日は忘れて來たのでござい升　久「何サ炭屋の多助さんはまだ來ないのよ

倉「ハイ今日はあなたの方がお早くつてまだ炭屋さんは見へ升せん　久「夫では今日は一番勝つたな」ト向ふより多助炭賣好みの拵らへにて」　多助「炭や炭」ト いひながら舞臺へ來る」　久「遲い〳〵判官殿どうだ今日は多助さん一言もあるまいな　多「ヤア今日は閉口でがんす　倉「多助さん其炭の中へ入れて置てやつて下さい今賴まれ升たから　多「夫は毎度憚りでがんす○十六文かな○」ト炭の中へ炭を計つて入れ「夫ではおばさん爰に置やす　久「おばさんお茶一盃ふくれ　倉「ハイ是ではお天氣も續き升せう　久「多助さん此婆アさんにも困るね　多「餘ッ程遠いのでがんすな　久「其癖早く聞へる時もあるが○お茶を一盃おくれよ　倉「ハイ○ト茶を汲み來り「お馴染だから手で御免なさいよ」ト茶碗を受取り」　久「マア何にしても斯う寒さに向つて來ると是からがお前の世界だがいヽ商賣を始めたよ　多「仕合せと日々にお得意が殖へる斗りでがんす　久「おいらも樽屋を止めて多助さんの子分になろうか知らん膝の抜けた股引をはいて草鞋がけで樽はございといつた所で誠に利の細い商賣で否になるよ　多「夫は何商賣でもおんなじ事さ　久「然しこんな事を仕て居ても末には旦那といはれる樣になるだらうか年中味い物は喰はず面白い物見ずこんな詰らない商賣でも一生懸命に十年の間稼だらどの位金が溜るだらう　多「わしは又金を溜る積りはないでがんす　久「ろんなら何を見當に稼ぐのだ　多「夫は稼げば金の溜るに極つたものだがわし佐久間町で醴拳公とも

千一年首尾よく勤め上げて相生町に家を借り計り炭といふ事を思附て斯うして賣つて歩きやすが何でも金の溜らない樣にして居るのでがんす此人間といふ奴は金が溜ると油斷をしてなんねべものでがんす○コレ金能く聞けおれ寐る目も寐ずに稼いで居るにわれは何だ錢箱の中で樂斗り仕やアがつてさう味くはいかねへぞ早く出て稼いで來い〳〵と金の尻ッぺた打つと金め痛へもんだからとヨコ〳〵と出て往て稼いで歸り仕舞には金が疲れてモウ働ちけねへからどうか置ておくんなさいモウ何所へも行きや仕ねへと取附て働かねへからそんなら置てやるべいといふ是が本統に天然自然に溜るといふものよ　久「アハヽヽヽ成程是はさうだな然し多助さん段々金が溜つて來ると附合が廣くなつて味い物も喰ひい〻着物も着なければならぬ樣になつて來るよ　多「所がわしはさうはさせねへでがんす着物が身にうとするとコレ飛でもねへ着物だといつて寄附けねへだ又味へ物が口へ這入らうとしてもわれが樣な穢れた物はおらが口へ這入れねへといつて打のめすださうすると疲て來てう附んな事といはねへで少しべい喰つておくんなせへどうぞ着て下せへと駄ッ附て離れねへからうんなら着てやらう喰つてやるべいといふのが求めずして天から授かる衣食といふものでがんす　久「成程是は違ひなしだ　多「其所で久八さん空樽買は空樽買計炭屋は計炭屋旦那樣は旦那樣是は皆其人の德不德にあるのだから何でも搏はず家業を勵み金を内へ寄せ附けねへ樣よ働かずが肝心でがんすよ　久「是は多助さんのいふ通りよくなるも惡くなるも皆其人の德不德で空樽買は空樽買かねへ　多「立派な旦那樣にならないでも正直にして天地の道に叛げねへ樣にさへして居れば誰にも恥る所はねへからぼろを下げて澤庵の尻尾で麥飯喰でも持はね事さ　久「恐入つたね多助さんの覺悟には神田の方へ行くと皆お前の事を譽めて居るよ　多「何惡くいはれやうがよくいはれやうがこつちでさへ間違を仕なければ安心な者だ皆天地への奉公おれば死迄骨を折るがようがんす　久「ろんなら其氣で廻つて來やう　多「久八さん行き被成か　久「又歸りには爰で逢ひ升せう　多「夫では久八さん稼で來なんせ　久「樽はござい空樽はござい〔ト橋を渡つて上手へ這入る〕　多「ア、久八さんも能く稼ぐ男だなア○〔ト是を獨吟の琴唄になり多助自身に茶を汲みながら思入あつて〕「おばさんあの琴を彈て居るのは爰の内の娘でがんすか　倉「結びをお上りでござい升ゥ　多「何辨當を喰ふのではないあの琴を彈て居るのは爰の内の娘ゥといふ事〔ト大きくいふ〕　倉「私は此通りちつと斗り耳が遠うござい升から琴の音は聞へ升せんが何でも爰のお嬢さんは琴を能く彈くといふ事でござい升よ　多「さうして一体何を家業にする内でがんす　「是は公儀の御用達で藤野屋杢右衛門といつては此四つ目五つ目かけての物持でお駕御用を勤る帶刀御免のお方でムり升よ　多「道理で立派な内だと思つた〔ト いひながら茶を呑む上手の橋よりお龜非人の

拵らへ盲目のこなし万太郎十一歳の男の子殺非人の拵らへにて手を引き出て來り」 万太郎「おつかさんおなかゞすいてならないから向ふに賣つて居るあの甘藷を買つておくれおな 龜「爰に三文あるから是で譯をいふて少しでも賣つてお貰ひ」〔ト錢を渡す〕 万「アイ○おばさん是で甘藷を賣つておくれ 倉「何だへ乞食はたべ物の店の前へ來て 多「おばさん甘藷を買に來て居るのだ 倉「チヽさうでございか 万「是だけ賣て被下升せ〔ト出し臺の前へ錢を置く〕」 倉「何だ三文では困るねへ 龜「お困りでも厶り升せうが俄盲の親子の非人昨日から此悴が何も物をたべ升せぬ故御迷惑でも厶り升せうが賣てやつて被下升せ〔ト此内多助お龜の顔をつく〳〵見て〕」 多「ヤわんたは伯母さんではがんせんか 龜「何私を伯母とおつゝやるは 多「ハイ十一年跡沼田で別れた多助でがんすよ 龜「エヽ 多「伯母さん能く無事で居て下せへやしたなア 龜「多助であつたか面目ない〳〵〳〵 多「あんた面目ねへといふ事が分りやしたか○アヽ情ない事だ元は八百石取りのお侍の家に生れお嬢樣ともいはれた身が若い時から心掛けが悪うがんして色事をして家を駈出し夫婦となつたは實のおとつさんの家來で岸田宇内といふ人其男が死だ後わしが貰はれて往た下新田の養父の後妻となつた縁で親子となつた其内におとつさんが連れて歸つた娘のお榮をわしに添はした夫婦の中でありながら丹三郎と不義密通其上あなた迄其親と忍び逢ふたる親子の間男夫をわしが荒立れば血で血を洗ふ家の耻と堪らへて居れば夫をハアいゝ事にさつしやつて無理難題の責折檻仕舞に殺すべいとさつしやるからわし家出をそれば盡原の家を潰すは泣つては居れぬ命せへあつたなら家を立る事もあらうと僅か六百の錢を以て國を出た其時の心の内はどうでがんせう其路用さへ途中で取られ難行苦行を致しやんして今江戸に斯うして居るも金を溜めて國へ歸り養父の家が起してへばつかりゝテ又どうして眼がつぶれあんたは乞食におりあさつた 龜「お前に逢ふては面目ない在し昔の此身のいたづら年に不足もない身にて原丹次と密通なしお前をつれなくいぢり出し丹三郎をお榮の養子に入れる心の悪工みお前が高平へ往つた夜にお榮丹三郎は沼田ヶ原で青の爲に喰殺され目も當られぬ非業の最期 多「エヽそんならお榮丹三郎には馬に喰はれて死やしたか 龜「ハイ 多「アヽ夫も罰でがんそなア 龜「夫故國に居るにも居られず原丹次と亡名をした其明の夜岩上の山中にて道連小平の爲に原丹次よは敢ない最期 多「ムヽ其明の夜はわしも丁度小平の爲に路用から着物を取られた其晩だのろんなら其時岩上の麓で伯母さんあんたをば見かけた事がでせへやしたが其折丹次は殺され升たか 龜「ハイ 多「アヽ夫も罰でがんすなア 龜「其時路銀も取られて仕舞江戸へ出て難義の末茶屋奉公をして居る内去年の秋から目がつぶれ今では人の合力にて命を繋ぐ非人の境界 多「夫も罰でがんすぞや 龜「夫に違ひはないわいなア〔ト又泣く〕」 多「夫

にしても青はどう致し升た　鶴「其馬は沼田ヶ原で娘が喰はれて死た時丹三郎よ刺殺され馬諸共に果敢ない最期　多「エ、夫では青は丹三郎に殺されたのでがんすのか○ア、畜生とはいひながら庚申塚で圓次郎が身代りに立つた時一足も先へ進まず主を助けた其上にお柴丹三郎を喰殺して死たとはおれが敵を取てくれたか別れた時に涙をこぼし袖をくはへて引止めたが此世の別れであつたかい○コレ青よおれ此江戸で辛抱したも金を溜めて國へ歸り墟原の家を立我が無事で居る顔を見べいくと夫斗りを樂しんで居た甲斐もなくわれ打切られて死たかいくと「トすゝり泣よ泣く」　万「モシおつかさんろんなら此兄イさんは不斷お前が話をした多助さんかへ　鶴「ナ、私の爲にと甥なり聟の多助じやわいのう　万「モシ兄イさん始めてお目に掛り升るわしは此おつかさんの子の万太郎と申升る者今話を聞升ればみんなおつかさんが悪うムり升る堪忍して被下升せ　多「モシ伯母さん是とあんたの子でがんすか　鶴「ハイ　多「あんたが不了簡さへ起さなんだら舍らぬ子ではがんすけれどあんたといひわしといひ今の身にとなるさいもの子に迄難義をさするのもみんなあんたの心からア、可愛想なものだなア○「トお茶店の所へ行き「おばさん「ト手招く此内お倉茂實の蔭へ這入て居て出て來り」　倉「何でござい升　多「此甘藷を十二文下せへ　倉「ハイ〳〵夫にしてもお話は分り升せんがどうかお前さん此乞食を知つての様でござい升ね　多「エ○イエ何あんまり可愛想な乞食故甘藷を買てやらうと思つて　倉「夫はよい功德を被成い升さうして此三文はどう仕升せう　多「夫は返してやるから爰へ下せへ「ト三文の錢を取る」　倉「ハイお甘藷「ト多助受取り」　多「サア是たたべやんせ「ト万太郎に渡す」　万「有難うおつかさんお甘藷をこんなに買て貰つたよ　鶴「夫はマアよく買つて下さつた早くおたべ「ト万太郎かつくして喰ふ」　多「モシ伯母さんあんたが是迄の不埒をばわしに對して濟まぬといふ心が附たら直ぐに善人あんまり氣の毒でがんすゝらわしが方へ一所に來なさい　鶴「そんなら殺さうと迄した者を憎いとも思はずにお前助けて下さるか　多「夫も内へ入れやしてはおとつさんの位牌に對し濟まねへ事でがんすから敷居を跨ぐ事はなりさしねへが幸ひ裏に明家があれば這入て居なさい飯は運んで上げ升べい　鶴「何にもいはぬ添い心得違ひの罰とはいへど目のいの見へぬ其上に子に迄憂目をさゝうより此子諸共淵川へ身を投やうゝ首縊らうかと思はぬ日とてはなかつたに仇を情の有難さどうぞ助けて下されいのう　多「ようがんすどうなと致し升　万「そんならモウ今日からひもじい目はせぬのだねへ　鶴「ナイのう　万「伯父さん大きに有難う　多「ナ、是は今の甘藷の三文伯母さん是を「ト以前の三文を渡す」　鶴「ナ、さうゝいのう　多「おばさんわしは歸るよ因て樽屋さんが來たら先へ歸つたといふて

下せへよ　倉「何さだ正午には早うござい升よ　多「情ない聲だお○〔ト樹をかつぎ「ろんな
ら伯母さん　万「おつかさん　聖「思へば清さぬ事じやなア〔ト多助先にお兼万太郎に手を引
かれ向ふへ這入る此時舞の戸を明げお花豪家の娘の拵らへにて庭下駄を履き琴の爪を取り
ながらお芳下女の拵らへにて附添ひ多助の跡を見送りながら出て來り」お芳「何とマアお嬢
さん感心な人ではムり升せぬかいなア　お花「さいのう今琴を彈きながら話を聞けば敵同士
の親子をば助けてやらうといふ志しは誠に感心なお方じやわいなア　芳「夫に商ひに精を出
し雨が降つても風が吹ても時刻違へず炭や炭と賣聲を聞かぬ日はムり升せぬわいなア　花「
迚も女子ゑ生れたなら　芳「あんな男と夫婦となり　花「共に稼ぐ事あらば　芳「こんな樂しみ
はムり升まい　花「どうぞ此身の願ひには　芳「あなたお惚れ被成升たか　花「コレ其樣な事を
いふたらおとつさんに呵られるわいの〔ト開戸の内より李右衛門豪家主の拵らへにて庭下
駄を履き出て來り」　李「右衛門「イヤ呵りはせぬ能く惚れた　花「ヤさういふあなたは　芳「旦那
樣　李「おれも二階から聞て居たが其深切な氣立といひあれは只の人間ではない計炭を賣う
といふ辨利を考へた工夫が味い　花「今にあのお人は立派なお方になり升せう　李「夫が見込
みでろちは惚れたか　花「アレおとつさん其樣な　李「イヤ〳〵子を見る事は親にしかずとお
れはどうゐら氣のある事を悟つて居る　芳「モシお嬢樣旦那樣が御承知なら立派に惚れたと
おつしやり升せいなア　花「そんならいふても大事ムり升せぬかいなア　李「何の大事がある
ものかおれから先へ惚れて居るのじや　花「夫では私も　李「はの字であらうがな　花「ハイ〔
ト羞かしきこなし」　李「チヽ能く惚れた感心だ炭屋の心に惚れたのは親も世間へ自慢が出
來る娘よいぞどうじや嫁にやつてやらうか　花「夫があなたの誠にて嫁にやつて被下升たら
おとつさんを孝行に致し升るわいなア　李「チヽ早速嫁にやり度があの炭屋の内は何所だか
芳「夫は爰のおばさんゑ聞たら分るでムり升せう○モシおばさん　倉「チヽ是は藤野さんのお
芳どんでござい升か　芳「アノいつも爰の店へ來て空樽買と話をして居る炭屋さんのお内は
何所でムんすへ　倉「炭屋さんの内でござい升か一向に知り升せんが何ぞ御用でござい升か
芳「用といふはお嬢さんがあの炭屋さんに惚れ升てな　花「是はしたり芳其樣な大きな聲で
芳「デモ聲でムり升るのら　李「イヤ〳〵是はいつもの樽屋に聞たら分かるであらう〔ト橋の
上手にて」　久八「樽はござい空樽はござい　芳「モシ旦那樽屋があれへ參り升た　李「夫と丁
度幸ひだおれは娘を連れて茶室で待て居るから此切戸から呼入れてくれ　芳「畏り升てムり
升る　李「夫では娘　花「おとつさん　李「早く談が仕度ものじやが〔ト両人入口へ這入る上手
より久八出て來る」　芳「モシ樽屋さん　久「空樽の御用でムり升か　芳「何でもよいから早う來
て下さんせいなア　久「シテあなたはどちら樣でムり升　芳「私は此藤野屋の奉公人でムんす

が旦那様が御用があるとおつしやつた故早う〳〵　久「夫は矢ッ張樽のお拂ひで厶り升せう　倉「モシ樽屋さん炭屋さんが先へ歸ると言置て行升たよ　芳「夫に附ての旦那のお談　久「エヽ　芳「早う來て下さんせいなァ〔ト此摸樣宜しく唄浪の音にて此道具廻る

本舞臺常足の二重本式の茶の間爐に釜掛けあり上下跡へ寄せて風雅なる庭掃下手植込みつくばいの手水鉢木煙籠庭木のあしらひ飛石都て茶室の摸樣二重に李右衞門お花住居合方よて此道具納る　李右衞門「賣物には花といへばお花そちは髪も撫附け着物も着替て來るがよい樽屋にも逢はせねばならぬから　花「ハイさう致し升せうわいなァさうして御酒を出す樣に申附け升せうか　李「何れ酒も出さねばならぬが來たら先へ菓子と茶をば　花「お薄でもお立被成升か　李「先が迷惑をしてはおらぬから煎茶がよからう　花「夫では私が持て參り升わいな　李「大分お働らきだな　花「ハイ働らき升せいでかいなァ〔ト奥へ這入る〕　李「アヘヽヽ、流石親に小理屈をいふ程あつて惚れた」が而白い〔ト橋持りにて〕　芳「サア早う來て下さんせいなァ〇〔ト久八の袂を捕らへ出て來り〕「一寸爰に待て居て下さんせ〇〔ト こちらへ來り〕「旦那樽屋さんを連れて參り升た　李「さうかこちらへお通し申てくれ　芳「ハイ畏り升たモシ樽屋さん是に旦那がお出で厶り升からどうぞこちらへ　久「夫では御免被下升せ〇〔ト こちらへ來り〕「左樣ならあなたが旦那樽で厶り升るか只今承り升れば何か御用があるとの事何れ樽のお拂ひで厶り升せう〇併し御免被下升せ〔ト二重に腰をかけ莨入を取出し煙管の詰て居るこなしにて二重の敷居にて叩く李右衞門迷惑なるこなし〕　李「イエちと承り度事があつてお招き申升たので厶り升る　久「ヘエヽ夫では樽の御用では厶り升せぬか何の事で厶り升〔ト煙管の通らぬこなしにて立て行き庭木の枝を折り煙管を堀る久八の無心を迷惑なるこなしあつて〕　李「いつもお前さんと一所に此裏手の茶店で話をしてお出の炭屋は何所の者で厶り升か　久「ヘエヽあれは相生町で私の隣りの者で厶り升が去年迄神田佐久間町の炭問屋に奉公をして居たさうで厶り升が其奉公中に捨る小炭を拾集めて十一年の間に七百二十俵溜つたさうで夫をば賣つて居るのですから安く賣れヽば辨利もよし實にあの男斗りは恐入た者で厶り升〔ト莨の吸殼を吹出し足にて踏消す〕　芳「アヽモシ樽屋さんさう踏み散らしてはお庭の苔が代なしになり升わいなァ　李「イヤ〳〵大事おい今の話を聞ては彌々見上げたあの炭賣中々苔位は厭ふて居られぬモシ樽屋さん是へ上つて下さい　久「イエ私は草鞋掛けで厶り升から　李「草鞋の儘で大事厶り升せぬ　芳「旦那樽あなたもマア不斷から塵一筋あつても彼此おつしやるお茶室へ草鞋の儘でも大事ないとは　李「エヽうちの樽ふ事ではない貴樽は奥へ往つて茶を持て來いといへ　芳「ハイ畏り升た〔ト橋掛りへ這入る〕　李「サアどうぞ樽屋さん　久「夫では御免を蒙り升せう〔ト草鞋を脱ぎ二重へ上る奥より

お花好みの衣裝に着替へ煎茶道具を持來りて」お花「あなた能うお出被成升た　久「是はお初にお目にかゝり升私は岩田屋久八と申升樽屋でムり升が何か御用があるとおつしやるので　花「夫は能うお出被下升た○お茶お一つ　〔ト茶と汲で出し李右衛門の前にも置く〕　久「どうぞお携ひ被下升なお頂き申升る○〔ト茶を啜り「大層甘い茶でムり升がお砂糖でも這入ており升かな　李「お花お菓子を上げなよ　花「ハイ　〔ト茶立口を明け奉書紙に蕎麥饅頭を積みしを取り久八の前へ差出す」久「モシ有難うムり升がこんなには戴け升せん　李「イエ餘つたら持て歸つてお子供衆にでも上げて下さい　久「イエ私は子もなければ嚊もムり升せん併し一つ頂戴致し升せう〔ト饅頭を喰ふ」花「さうしてアノ炭屋さんはお嫁さんがムり升かいなア　久「あの男も御同然で矢ッ張一人者でムり升　花「そんなら御獨身でムり升かいなア○あなたお菓子をたんと召上つて下さり升せ御酒も申附けてムり升れば　久「滅相な事をおつしやり升せ一体御用は何でムり升　李「實は是におり升るは私の娘でムり升るが何と此娘の願ひをば叶てやつては被下升せぬか　久「何お娘樣のお願ひを叶へてやつてくれろとは　李「あの炭屋さんに惚れたさうでムり升る　久「エヽ　李「サア親の口から申は耻入た次第ではムり升るが一通り聞て被下升せ○日外から樣子を見るにどうか炭屋さんに心有氣な娘か素振り所が今日當人の口から惚れたといふはよく〳〵の事と娘が心そは推量する程無理ならぬあの炭屋の心立實は今では娘より親が惚れての此お願ひどうか是を嫁にやる仲立を被成ては被下升せぬか　久「モシ〳〵笑談をおつしやり升な此本所の四つ目では誰知らぬ者もない公儀お駕籠の御用達藤野屋さんのお嬢さんが昨日今日取附の身の上の其身には詞もなまる田舍者眞ッ黑な炭賣へ惚れたの嫁にやり度のと人を馬鹿に被成升おこちら抔の御大家ではお隙で御退屈て居らつしやるから樽屋を呼んで遊ばうとの御笑談でもムり升せうが日の短かい十月に面白くもない何の事だ〔ト立腹のこなしにて草鞋をはきかけるを」李「マア樽屋さん待つて下さい家業を妨げては甚だ濟まぬ事なれど決して遊ぶのではムり升せん此通り手を突てお頼み申升る　久「ろんなら笑談ではないのでムり升この　李「外の事ならイザ知らず初めて逢つたお前さんにこんな笑談がいはれ升せうか　久「モシお嬢さんもさうでムり升かお花「誠にお羞かしい事ながら宜しうお願ひ申升るわいなア　久「どうも妙だ是は不思議だ斯う見た所が釜の掛つた此お座敷の樣子では親御さんもお娘ッ子さんもよつぽどお茶人と見へ升なア〔ト茶立口よりお芳出て來り」お芳「モシお嬢さんお願ひは如何でムり升た　花「まだ何ともお返事がないわいのう　久「イヤ宜しうムり升る夫があなたの誠なら屹度仲立致し升せう　李「エヽスリヤお頼みを聞入てお仲人を仕て被下升とか　芳「モシお嬢樣お望みが叶ひ升たわいなア　花「サア其叶ふたは嬉しいけれど先樣が御承知をして下されうかいなア　久「夫は

お前さんするの何のと其段に御心配はムり升せん計炭屋の女房に帶刀御免の御用達のお饅樣が望んで嫁になりたいとの此談を聞かし升たら如何な腹の大きなあの多助も卽座に大地に両手を突て低頭平身三拜九拜手を打て悅ぶよ違ひムり升せん一億万よ一つても違ひ升たら懼りながら此樽屋の首をお渡し申升せう　茅「夫程儘におつしやればモウお饅樣御安心でムり升るわいなア　本「マア何にしても樽屋さんに一寸一口　久「イエちつとも早くあの男にも悅ばしてやりたうムり升れば御馳走は御婚禮の晩迄お預け申て置升せう　本「成程夫では御苦勞ながら　久「此饅頭は頂戴致して參り升せう「ト紙の儘饅頭を取上げる」　茅「どうぞあなたのお骨折にて　本「親も娘も安心する樣　茅「よいお返事を　久「ヘイ○「ト立上る是にて持し饅頭一つ平舞臺へ轉げ落る久八恟りして駈下り饅頭を拾取り砂を吹くのが道具替りの知らせ「お待なさつて被下升せ「ト此摸樣宜しく合方にて道具廻る

本舞臺上の方家根附腰羽目中窓の鼠壁此上手三尺引戸の入口桶側の井戸此後ろ跡へ下げて長家の惣雪隱下手家根附の腰羽目の鼠壁三尺の入上戸建切りあり都て表長家裏手の体爰に多助竹釣瓶を持ち井戸の水を汲上げ米炊桶へ入れて居る下手に佐助職人の拵らへ洗濯盥にて雑巾を絞り涼み臺を拭て居る稽古唄にて道具納る　佐助「多助さん早かつたね　多助「ハイ道で逢ふた人がありやしたので途中から歸りやした　佐「多助さん抔はわつち等の樣ななまけ者と違つて能く稼ぎ被成るから偶にゝ骨休みにもいゝのさ　多「さうして今日は大層お働きでがんすね　佐「何聞ておくんなせへわつちの商賣は知つての通り夏は遊びの綿打職其所で噂に甘酒店を出さえたので床机は餘所で借物なり噂ア左衞門が不性者と來て居るので今日迄打やつて置きやアがつて先から釵突を喰つたのでせう事お去に洗つて是から返す積りさ　多「夫は先のかこるのも尤でがんす　佐「だから噂アに小言をいふのサ○噂アといへばお前かみさんを持つてはどうだへ　多「中々わしなぞは女房を養ふ事が出來ぬでがんす　佐「眯くいひ波成るでお前の樣に稼で居て養へぬといふがあるものかさうして商ひから歸つては爰焚迄自分の手でやるといふは大騷ぎだ一軒の内に女房がないといふものか何かに附けて不自由だから　多「何是が却て氣樂でがんす「ト橋掛りより世話形り男の子供出て來り」　子供「ちやん横綱の伯父さんが來たからお歸りと　佐「何だ横綱のげじ〳〵が來たあのお多福め留守だといつて置きやアいゝに借金の言譯一つ出來ねへ女房を持ても困るな　子「ちやん早くお出よ　佐「情ない奴が來たなア「ト子役と一所に橋掛りへ這入る」　多「あの人も心掛けの悪い人だなア「ト米をかして居る上手の入口の内よて」　久八「多助さん〳〵〳〵は何所に居る多助さん〳〵○「ト出て來り息の切れたるこなしにて「チヽ多助さん其所に居るのか○アヽ苦しい水を一盃呑まして頂戴　多「さういふは久八さんどうしたのでがんす　久「どうの

斯うのといつてお前の身に附て素敵滅法界ない〻談が降つて來たから四つ目から一目散に走つて來たので息が切れて〳〵　多「ろりや一体何でがんす　久「マヽ水を一盃くんなさい○〔ト釣瓶の口より水を呑み「アヽ助かつた　多「さうしてどんな事でがんす　久「運は天から授かるものだとさつきお前のいつた通り違ひない今日がお前の運の向き時多助さん味い事をそるせ〔ト多助の脊中を叩く〕　多「何だかさつぱり分らんが　久「モウ是からはお前の手で米を磨くにも及ばねは朝晩寐所のあげ下ろし掃除万端引ッくるめて世話をさせる人か出來たから多助さん悦びなさい實にお前はい〻月日の下ま生れた男だ書生め〔ト又脊中を叩く〕　多「何を脊中ヨり打て居るのか　久「打てもい〻よ殺してもい〻程憎い男だマヽ此床机へ掛けなせへ　多「イヤわしは米を磨がねばならんから夫からいふて下さい　久「夫では談が出來ねからマヽ掛けおさいといふに○〔ト無理に床机へ掛けさせ「時に多助さんッレいつも休ひ四つ目の茶店の後ろの内は何だか知つて居なさるか　多「サヽ聞けばあれは公方様のお駕籠御用達とやら　久「さうサ藤野屋李右衛門といつては帶刀御免の御用達マヽあの内へ這入て見なさい丸で大名の屋敷へでも往つた様だ　多「久八さん能く知つて居るたが這入て見たのでがんすの　久「見た所か茶を御馳走になつた上蕎麥饅頭をこんなに貰つて來たが一つたべて見なさい〔ト以前の饅頭を出す」　多「夫では一つ呼れ升べい○〔ト饅頭を取て喰ひ「是はどうも　久「味からうがなまだ此跡に酒を出さうといつたのを婚禮の晩迄延ばして來たがあの内の娘の器量は實に大名代呂物サ　多「成程娘のある事は今日聞たでがんすがどういふ縁でお前藤野屋へ往つてこんな饅頭を呼ばれたり酒の馳走を婚禮迄延ばして來るとは合點が行かぬが其娘へ聟でも來るのでがんすか　久「何嫁に行くのさ　多「ハヽさうでがんすか何れ嫁に行先も指折りの大家でがんせう　久「其所が誠に妙な談で嫁に行うといふ先は娘の望みでお前の所さ盥原多助といふ此色事師の所さ　多「馬鹿にさつしやるお腹をへらして歸つて來て是から飯焚て喰ふべいと思つて居るに人を捕らへて遊ぶでがんすかそんな隙はない男でがんす　久「是さ多助さんさうおこつて仕舞はずと此久八の話を聞たら天窓が今に自然と下るからおいらのいふ事を聞なさい實い斯ういふ一件さ○何が藤野屋のお嬢さんがお前にぞつこん惚込んで是非嫁に行度から仲人を仕てくれと旦那迄が両手を突て此久八への平頼みようでさい升と走つて來たも貰へば長持か幾棹に田地が幾ら附て來るか何れ持參のある方は受合ひ夫も娘が鼻つ欽とか又は目ッかちひよつとこか片輪者なら考へ物だが器量は今もいふ通り年も今年が十八才其お嬢様が嫁に來たいといふ談は廣い唐にも天竺にも又とあるまい此縁談何と多助さんお前天窓が下るだらう夫におこるといふがあるものか　多「モシ久八さん夫は本統の事でがんすか　久「嘘や笑談なら自分の内を明けもせずお前の所へ飛

込むものか併し直ぐに此返事をする約束だが何時お前貰ひなさる日のいゝは幾日だが一寸家主で暦を借て〔ト立うとすると〕多「イヤ久八さん待て下せへ御深切は忝いがわしはろんお嫁は否でがんす〔ト久八悔りなし〕久「何だとへ　多「先が物持分限でなくば又考へもがんすけれど此女といふ者は誠に淺猿い者でがんして都て身元を鼻にかけ高ぶる者でがんそからそんな者を嫁に貰へば多くは女を相手にする計炭屋の事なればあの女房は世辞がないの顔が高いのと世間の人にいはるれば商賣の邪魔炭屋へ向かぬ嫁でがんそから是ぢどうか斷つて下せへやし　久「コレサ多助さんろんな事をいつちやァ困るがなおいちが立派に受合つて首堵迄して來た事をどう今更先方へ斷りがいへるものか　多「わし得心もせぬ者を受合ふとはどうでがんす　久「夫もお前に談をすれば二つ返事で悦はねば成らぬ嫁だと思つたから　多「誰が家業の爲よおらぬそんな嫁を悦んで貰ふ馬鹿がありやそか　久「何時おれが馬鹿にした　多「又馬鹿にせいでか　久「何だと〔ト立かゝる上手の入口より和平出掛り樣子を立聞居て〕和平「マァあなたお待被下升せ　久「チ、さういふお前さんは　多「和平さんでがんす　和「多助どんどうした者だお隣の樽屋さんが深切におつしやて下さる事をろんな斷りのいひやうがあるものかモシお腹も立升せうがこんな男でムり升からどうか了簡してやつて被下升せ〔ト床机の眞中へ腰を掛ける〕多「そんなら今のいざこざを　多「和平さん聞たのでがんすか　和「サアこつちの方へ來た次手に寄つた所が表は明けて内には人の影もなくどうした事と裏口へ廻つて見れば今の一條藤野屋と云本所で人も知つたる公儀の用達其大家の娘御が嫁に來度とは多助どん願ふてもない身の仕合せお前の運が向て來たのだ　久「夫見なさい誰でもさういふだらうチエモシお前さん先は大家の娘ですからたいした持參があるでせうシテ見れば是は天ごら授つた幸ひではムり升せんか其世話をしたが如何といつて恨を受ける筈はないですがお前さん何と思ひなさる此樽屋が無理ですか　和「中々無理所ではムり升せんあなたの御深切は厚う受けねばなり升せん　多「和平さん其深切はわしも受けやそが餓合ぢれ程金があらうと使へばなくなるものでがんせうわしが嫁は俱稼でなければなんねへにお嬢樣では飯も焚なければ味噌漉提げて買物にも行けぬでがんせう夫故女中でも附て來て朝寐をしてお引摺で琴でも彈て居る樣では身上の爲になりましねへから否だといふのが無理でがんすか　和「夫は決して無理ではない尤だ　久「モシ一寸こつちを向て下さい○成程女中は附て來升せうけれど里は大家の事なれば拳公人の喰扶持抔は多助さんの厄介になりさうな事はムり升せん　和「成程さうでムり升せう　多「モシ和平さん○夫がわし否でがんす假令錢一文でも世話になるやうな事では女房に天窓が上り升せん　和「さう〳〵貴樣のいふのも尤だ　久「モシお前さん○夫は望で來るからは金で亭主の面をはり決して尻に敷く樣な

娘ではない積りよしや少々天窓を下げても相手は帶刀御免の用達別に恥でもムり升まい名を取らうより德の世の中其慾を知らぬのは馬鹿者でムり升 多「何でおらが馬鹿者だ 久「又馬鹿者ではあるまいか」ト双方立かゝるを和平止め● 和「是はしたり又してもさういひ上つて貰つては中へ這入た私が迷惑早い談が多助どん立派な大家の娘故養焚の世話から小買物向にも不都合故斷りをいふのであらう 多「さうでがんす 和「併し先が得心で水も汲めば飯も焚き下女兼帶で働くのが承知であつたら貰ふ心か 多「そりやモウ子に臥し寅に起き喰物はいふに及ばず一切わしと同じ樣に働らく事が出來やして倶稼が承知ならわし否とはいはぬでがんす貰ひ升べい 和「モシお聞の通りの譯ですが夫を承知で來升せうか 久「夫は無理でムり升飯といつたら此通り挽割七分五米三分三度〳〵此飯に菜といつたら澤庵か生味噌に盤を嘗め明七つから夜の九つ迄どうして牛馬でも働らけ升せう別して先は大家の嬢樣夫が出來るか出來まいか大概積りにも知れたものでいムり升せんか 和「夫が出來ずばない緣と諦めてお貰ひ申より外に仕樣はムり升まい 久「夫ではどうも先方へ此久八が濟み升せん 和「左樣でもムり升せうが家風が守れねば致し方がない譯ではムり升せぬか 久「お前さんはさうおつしやるが首迄渡さうと受合ふた此久八どうぞ人一人を助けると思召て成る樣な談よ其所をば 和「サア御迷惑でもムり升せうが此人のいふ所も無理あらぬ事なれば先が承知なればよし不承知なればよい樣にお斷りを願ひ升 久「ろんならどうでも此談は 和「言出した事は强情で跡へ引かぬ男故悪からず思召て被下升せ 久「ア、情ない事になつて來たなア 多「飛だ談に掛り合つて腹がへつてたまらぬ和平さん御免あせへやし 「ト米を磨ぐ」 久「夫では多助さんどうあつても此久八の顏を潰すのだな 多「潰すといふ譯はなけれど今和平さんのいふ通り外に仕樣はないものでがんす 久「其所を久八を助けると思つて 多「駄目でがんすよ 久「夫ではどうでも斷りをいはねばならぬのか 和「嘸お困りでムり升せうが 久「困るといふのは此首を渡すと迄受合ふた談が今更纏らぬといふても行かれぬ事なれど捨ても置れぬ返事の約束何といつたものであらうかア、心配な事だなア 「ト久八思案を仕ながら橋掛りへ這入る」 和「あの人も心配らしい樣子だが多助どん兎も角も其嫁を貰つた上で家事向の談を仕たら先も否ともいふまいし又樽屋さんの顏も立から貰ふ事に仕たらどうだ 多「イエ貰つて仕舞へば一生涯連添はねばならぬ女房極る所は先へ極めねば夫婦和合をせぬ基所詮是は駄目でがんそよ 和「さうでもあらうが身にならでもない先は大家の娘 多「何稼げば金は出來やすが 和「デモ一人では何角に附て 多「結句是が○ 「ト釣瓶を井戸の中へ突込むのが道具替りの知らせ わし氣樂でがんす上 「ト水を汲上げ米炊桶へ入れる此摸樣合方にて道具ぶん廻す

本舞臺元の道具に戻る李右衛門お花お芳居て矢張合方にて道具納る　お花「サアお芳早く往て來てといふに　お芳「デモ相生町と開た斗りでお内が慥に分り升せんから　李右衛門「イヤ行いでも今に返事があらう　花「夫でもあんまり遲いでは厶り升せぬかいなア　芳「サアお返事を聞かぬ内は御安心もあり升まいが樽屋さんが首賭で受合ており升れば大丈夫で厶り升わいなア　「ト橋掛りより丁稚出て來り」　丁稚「旦那今店へ樽屋の久八といふ人が來ており升がは是へをこしても宜しう厶り升か　李「さうか樽屋の久八さんが來たか　芳「モシお嬢さん來升たといなア〳〵　花「國松爰へ通しておくれ早う〳〵　丁「ハイ畏り升た「ト橋掛りへ這入る」　芳「サア〳〵お悦び被成升せ　李「娘も是で安心でおらう　花「漸う心が落附き升たわいなア「ト橋掛りより久八思案仕ながら出て來り前へ行き兼ることなし　芳「其所へ來なさんしたは樽屋さん誠に御若勞樣で厶り升た旦那樽にもお嬢樽にもお待兼　李「どうぞこちらへ樽屋さん久「有難う厶り升只今夫へ參り升○「ト面目なきこなしにて二重へ來り「先程こお喧しう厶り升た其節戴き升たお饅頭は慥にお返し申升○「ト以前の紙包の饅頭を出し「誠に結構なお饅頭で厶り升から炭屋の多助さんにもたべさせ升たので數が不足をしており升が其所は御勘辨被下升せ　花「そんなら炭屋さんまお逢ひで厶り升たかいなア　久「エ○ハイ　李「饅頭杯はどうでも宜しいがレテ返事は　久「エ○サア其返事は　芳「定めてよい返事で厶り升せうなア　久「併しながらお嬢さんを嫁におやりなさるには別に女中衆拵が附て行く樣な事は厶り升まいなア　李「其所で厶り升何れ此お芳でも附けてやらずばなり升まい「ト久八悔りして「エヽ　李「夫も夫も少々の田地位は持たして遣はし升れば其段は厄介にならぬ心で厶り升　久「レテお嬢さんは水を汲だり飯を焚たり襷がけて働く事は出來升まいな　芳「夫がお出來にならぬ故私が附て參るので厶り升わいなア　久「さうして明七つ位にお目が覺升せうか　李「中々いつも是が起升と直き午時の豆腐屋が參り升　久「ホイ是はどうもおらん談だ　芳「先刻あなたがおつしやるには此事を聞かしたら卽座に大地へ両手を突て低頭平身三拜九拜手を拍て悦ぶに違ひないとおつしやり升たが定めて先樣にもお悦で厶り升たらうな　久「所が夫は大當違ひ根ッから悦ばぬので厶り升　李「エヽろんならさつきあれ程迄よ　芳「堅く受合つてお出被成たに　花「此緣談は整はぬので厶り升かいなア　久「マアそこらの事で厶り升「ト芳久八の胸倉を捕り」　芳「コレ樽屋さん　久「是はどうするので厶り升　芳「此事が億万一つも違ふた時は首を渡すと大言吐て受合ふたではムんせぬこの夫故御安心してお出の所へ能う其樣な事がのめ〳〵といふて來られたものじやわいなア〳〵「ト振廻す」　久「サア來られた譯では厶り升せんが成らぬに饅頭をお貰ひ申ては濟まぬ事と思ひ升てお斷り旁々其通り戻して來たのが身の潔白決して惡氣で仕たのではムり升せん御免なすつて下さい〳〵

芳「エヽモ腹の立樽屋さんじやわいなア」〔ト突放す久八咽の痛ひこなし〕花「モシおとつさん私しやどうせうどう仕升せうぞいなア　李「サア先方が不承知なら是非ない事畢竟娘が好き好んで行度といへばこう談も仕たれど先が否ならこつちも又望んでやり度事もない思切て仕舞がよいわい　花「イエ〳〵私しや外へ縁附く事は否でムんすわいなア　久「實は此樽屋もやり合ふたのでムり升が先のいふには大家の娘を嫁に貰ふは有難いが金は使へばなくなる物兎角大家で育つた娘は世事に疎ひものなれば商賣の邪魔にもなり何れ女房を貰ふ日には俱稼でなければならぬのにお嬢さんでは飯も焚けず味噌漉提げて買物にも行かれまい故斷つてくれとの言分あんな慾を知らぬ奴はムり升せん　芳「ろんならあながち否といふのではムんせぬゝ久「勿論さうでムり升が先の注文があんまりで所詮出來ない相談でムり升　花「イエ〳〵夫婦にさへあられ升ならどのやうな事でも致し升わいなア　李「どういふ先の注文か娘も是迄思込んだ事あれば添はしてやり度親の心　花「どうぞいふて聞かして被下升せいなア　久「夫程迄におつしやる事なら無駄と思つていひ升が先第一の注文は世辞をよくして計炭の商ひはいふに及ばず水も汲だり飯も焚たり　芳「夫はお可愛想にお乳母育のお嬢樽がどう致して水仕の業が出來升かいなア　李「イヤ〳〵夫も娘が了簡一つどうとや出來るか　花「イヤ〳〵致し升るわいなア　久「ろこで第二ケ條が子に臥して寅に起き働く事が出來升か　花「出來升せいでかいなア　芳「モシ〳〵お嬢さん夫ではあなた御寢なる間は二時より ムり升せぬぞへ夫も一日か二日あら出來升せうがどうマア一生涯御辛抱が出來升せうかいなア　李「併し娘は出來るといふがお花夫に違ひあいか　花「ハイるア　久「エヽ是は妙だ所で三ケ條は味噌漉を提げて買物に行け升か　芳「滅相な奉公人の私でさへ味噌漉提げて買物杯に往つた事はムんせぬ夫にお嬢さんがみつともない其樣な事が出來升かいなア　花「イヤ〳〵私しや厭ひはせぬ行くわいのう　久「是は誠に不思議だ其所で四ケ條は飯ですが三度〳〵拵割飯に菜は澤庵其外生味噌か擂を嘗めて辛抱が出來升か　花「出來升せいでかいなア　芳「アヲ お嬢さん何ばうお嫁に行度とてお肴が奸さで居らつしやるのに夫で御膳が上られ升のいなア　花「嫁に行けば我世帶儉約が肝心じやわいのう　久「どうも妙だ所で次の五ケ條は夫婦俱稼でムり升が亭主に負けず劣らぬ樣に働らく事が出來升か　花「夫は元より望む所夫が仕度さの此お願ひ　李「夫ではろちい注文通り　芳「皆御辛抱が出來升かいなア　花「出來るか出來ぬかおとつさん長い眼で見て被下升せ　久「そんなら彌々お嬢さんには　花「夫が斯うせいとの言附けなら決して背かぬ此身の覺悟　久「ろらい夫さへ聞けばモウ安心今度は大丈夫でムり升〔ト逸散に橋掛りへ走り這入る〕　芳「モシ樽屋さん待なさんせお嬢さんが御承知でも旦那樣の思召も聞かねばならぬに一人呑込み走つて往つて仕舞升たわいなア　李「イヤ往つても大

事あい娘さへ得心なら親は元より異論のない事　芳「夫では嬢さんあなた樣には　李「今の身分に引換へて　花「つらひ辛抱して迄も　芳「あの眞ッ黑な炭屋さんの　李「女房よりはなりたいか　花「ハイ〔ト袖にて顏を隱くす」　李「お芳〇〔ト持たる煙管にて莨盆の灰吹を叩くのが木の頭「餘ッ程是もいざ棄だな〔ト此模樣宜し〳〵合方にて拍子幕

大詰　鹽原多助婚禮の場

役人替名

一鹽原多助　一得屋久八　一山口屋善太郎
一角左衛門妻お清　一藤野屋下女お芳　一鹽原角左衛門
一李右衛門娘お花　一手代和平　一輕子大勢
一吉田八右衛門

本舞臺常足の二重金綱透しの蹴込み軒口に山形ゑ多の字鹽原と記せし紺暖簾を掛けし二階造りの前側見附鹽原と印せし暖簾口上手押入下手諸帳簿狀さしの書割二重に燭臺を灯し上下杉形りに積上げし炭俵の書割是に鹽原と印せし弓張提灯を澤山に掛け都て鹽原多助新宅の体爰に鹽原と染込みし印半天を着たる輕子大勢立かゝり居る唄祭の鳴物にて賑やかに幕明く　〇「何と人の運は知れぬものではないか爰の内の多助さんもッイ先度迄此先の小さな家に住んで居たが急に此家を賣ふて出て店開きやら婚禮の今日とお目出度　△「其嫁といふは人も知つたる本所四つ目の御用達藤野屋の娘とやら　口「夫も先から惚込んで望んで來た る今夜の嫁入　▲「まだ夫斗りか爰へ積んだ此炭はどうからの約束で吉田八右衛門といふ荷主から送つた炭の高ハ千兩　◎「まだ追々船が來るとの事なれば川岸へ往つて荷を待うか　×「夫では跡荷の來る間今日祝言の振舞酒を河岸の納家で引ッかけやう　皆々「皆來い〳〵〔ト橋掛りへ這入る向ふより山口屋忰善太郎羽織袴の拵らへ手代和平同じ拵らへにて出て來り」　和平「若旦那向ふが今度宅替した多助の家でムり升　善太郎「大層立派な家じやな　和「きづい出世じやムり升せぬかヤアお出被成升せ〔ト舞臺へ來る橋掛りより吉田八右衛門羽織着流しの拵らへにて出て來り」　八右衛門「ナヽ其所へお出は山口屋の坊さんお手代の和平さんでムり升せぬか　和「さういふは飛駒村のお荷主八右衛門樣ではムり升せぬか　八「今日は多助さんもお目出度事でムり升る　和「實は其嫁入りの仲人に頼まれ升て主人の名代の坊さんと只今連立て參り升た　八「私も日外多助さんに受合ふた千兩の炭荷をば今日送つて參り升た　和「夫は御深切ゑ有難うムり升　八「然し跡船の來た事を多助さんに〇ナヽイ多助さん〳〵〔ト奥にて」　多「ハイ〳〵〇〔ト黑羽二重の着附麻上下の拵らへにて出て來り「わしを呼んだはどなたでがんす〇ナヽ是は坊さん和平どんも能う來て下せへやした　善「多助今日はお

目出度う　多「ハイ有難うがんす　和「多助どん今呼んだのは八右衛門さんが炭荷を積んでお出とのこと　多「是は八右衛門さんでがんすか今日はでかいお世話になりやした　八「夫といふも今度爰へ見世を開き嫁も貰ふ約束で今日店開きと祝言を一所にするとの知らせ故爰が兼ての約束と千兩の荷を送り升たが何にしてもお目出度事でムり升　多「是も皆御主人やあなた方のお蔭で此多助も鼻が高う厶り升　八「イヤ夫もお前の辛抱故斯ういふ幸ひが來るといふもの　和「實に大旦那にも殊にお悦びでムり升せ　多「有難うがんす奥には實の二親も來てゞがんすからとぞうぞ入らつして下せへやせ　八「さういふ事なら遠慮なしに　皆「和平　和「多助どん　多「マア來て下せへやし〔ト皆々奥へ這入る下手より輕子出て來り〕皆々「モシ八右衛門さん〳〵荷主さん〳〵〔ト奥にて〕八右衛門「チイ〳〵何でムいやす〔ト出て來る〕○「今跡荷が來升たが何ン分川が狹いのでわの儘置ては外の船の邪魔になり升早く上げねばなり升せんから人を集めて來て被下升せ早く〳〵　八「よし〳〵　○「夫じやア早く頼み升〔ト橋掛りへ這入る〕八「手がたらんといつた所が勝手は罩らす○チイ〳〵多助さん〳〵〔ト多助出て來り〕多「ハイ〳〵○チヽ八右衛門さんわんたが呼んだのでがんすかマア〳〵奥へお出やんし　八「イヤ〳〵夫所じやない今跡荷が來た所川が狹い故外の船が通る事が出來ぬから早く大勢の手を借せとの事サアお前も早く來て下さい　多「ろんならわし人を集めて行やすからお前さん先へ往つて下せへやせ〔ト八右衛門橋掛りへ這入る奥より久八紋附羽織着流しの拵らへにて出て來り〕久八「多助さん嫁御も乘込んで來て居るし天窓數も揃ふたれば お前も席へ着て下さい三三九度に取掛らう　多「中々婚禮所の事ではない今跡荷が着たので是から炭を上げねばならぬ〔ト肩衣を脱かけ手拭よて鉢巻をする〕久「夫は大騒ぎだ○チヽイお花さんお芳どん〳〵〔ト奥よりお花白の振袖襠形りお芳紋附の着附着流しの拵らへにて出て來り〕お芳「遽だしい久八さん何ぞ用でムんすう　久「今炭の跡荷が來たので舅君も此通り爰が嫁の手見せ故サア働らいた〳〵　芳「まだ祝言も濟さぬといひ御近所へ顔繋きもせぬ内に嫁が門へ出升のも　お花「イヤ〳〵大事ない襠をかけてたもひのう〔ト帶の下締を解て渡す〕芳「滅相なあなた炭俵が擔げ升かいなア　花「何の擔げいでかいな　芳「夫ではろちらをお向遊ばし升せ〔ト襠を掛てやる事あつて〕「是では私もとつとしては居られ升せぬわいなア　久「此久八も手傳はすばなるまい〔ト羽織を脱ぎ尻端折る〕花「旦那樣私もお手傳致を升せうがお差圖被成て被下升せ　多「夫は能くいつてくれた不思議な縁で夫婦になれば是から先は俱稼ぎ其義でなければあんねへ〳〵〔ト橋掛りより輕子大勢名々炭俵を擔ぎ出て來り〕○「多助さん是は跡荷の　皆々「分でムり升　多「チツト受取た○〔ト皆々炭俵を投出して橋掛りへ這入る〕「ソレ是をそつちへ運んだ　花「ハイ〳〵畏り升たわいなア○〔ト炭俵を

持うとして上らぬこなし色々あつて「お芳此炭俵をどうぞしてたもいのう　芳「ソレ御覽なさい升せどうしてあなたに其炭俵が自由になり升せうかいなア　久「イヤ〳〵そんな事ではいなア「ト炭俵を引すりて上手へ持行く此内橋掛りより輕子皆々先操り炭俵を持來り置て行くを多助久八お芳お花上手へ運び積上げる事あつて」多「先是で一寸息休め〳〵　芳「どなたも御苦勞でがんした　芳「何とお孃樣のお働きはどんなものでムり升　久「是では言分とあるまいがな　多「イヤわし言分があるのでがんす　花「何がお氣に適ひ升せぬか悪い所はお所り被成て被下升せ　多「悪いといふはぶら〳〵とした其振袖邪魔にこそおれ役には立まい夫が第一費を知らぬといふものでがんす　久「サア夫も今日は婚禮の祝ひ儀式の曉小袖　芳「お孃樣のお召は皆お振袖でムり升わいなア　多「夫が皆奢の沙汰でおのれの見得を張るといふもの其了簡では世帶の爲にならぬでがんす　久「さだ祝言もせぬ先からさう喧ましくいはれては　多「私共の麁相の樣で　花「イヤ〳〵麁相に違ひはない其所に心の附かなんだはみんな此身が愚故お所りもあらう筈「ト邊りを見廻し薪の剪臺と鉈を持來り両袖を切る」　芳「ヤコリヤお孃樣には惜氣もなく　久八「今日の嚴着の振袖をば　花「是では如何でムり升る「ト切たる袖を見せる」　多「ふらい〳〵「ト横手を拍つのが道具替りの知らせ「夫で多助の頭でがんす「ト此摸樣宜しく家体雛子にて道具ぶん廻す

本舞臺平舞臺向ふ奥藏を見たる中庭の中遠見通りの欄間舞臺一面毛氈を敷結め上下に金屏風を建て眞中に鳴臺熨斗昆布取肴三ッ組の盃銚子を置所々に燭臺を灯し半廻りより祝言の謠にて道具納る「ト謠一くさりあつて奥より角左衛門繼上下ふ清着流しの拵らへ和平善太郎多助お花錦帽子を冠りお芳に手を引かれ八右衛門附添ひ出て來り」多助「モシおとつさん是が昨日お屋敷へ往てお談申たお媒人奉公中にお世話になつたお禮をもふつしやつて下せへやし　お滴「夫は最前お目にかゝりお禮は申たなれど今お前が此樣に立派な人にお成りの也皆御主人のお蔭といふ者何とあなた見事な住居ではムり升せぬか　角左衛門「イヤモウ先刻參りし節見れば軒に擂原と染抜きし紺暖簾は我も同じ苗字なれども是にて一旦家名の絶へし下新田の角左衛門が家再興せしものにして手前の義理迄相立しも多助が一身の皆働らき殊に嫁は帶刀御免の用達の娘と聞く夫といひ是といひ其方の働きには實以て感心致した夫でこそ此角左衛門が倅と申て耻かしからず親も自慢が出來るわい　久八「殊に今振袖を切た所はモシ皆さん此樽屋の久八が世話を致した嫁の氣性はどんなものでムり升　和平「イヤモウ大家のお娘御には似もやらぬ嫁御の御氣性　八右衛門「仕馴れぬ業を厭ひもせず見得を捨ての働きには　両人「實に感心致し升た　お芳「是から御夫婦俱稼ぎに　お花「精一倍働らき升て

多「此本所半分はわしが地面にする積り」 善太郎「多助慾張た事をいふなァ」 角「然らば目出度祝言の」 清「イヤ盃を」 芳「畏り升た〔ト宜しく祝言の盃をする事あつて納り」 和「先是にて婚禮の」 久「其盃も住の江の」 八「松の常磐の色變へぬ」 角「所も本所」 皆々「相生町」 清「祝して我夫御苦勞ながら」 角「ナヽ、〇あいに相生の松こそ目出度かりける〔ト謠ひ善太郎舞ふ事あつて納る」 皆々「お目出度ムり升る」 角「ナヽ、目出度〳〵〔ト扇を開く此模樣宜しく目出度打出し

讀劇 淵本 堀原多助經濟鑑 大尾

明治廿七年七月廿一日印刷
明治廿七年七月廿八日發行
（定價金拾錢）

著作者 大阪市東區備後町四丁目四十番屋敷 勝彦兵衛
勝諺藏事

版權及兼發行者 大阪市東區備後町四丁目四十番屋敷 中西貞行

印刷者 大阪市東區內本町橋詰町六十八番屋敷 前田菊松
周擴社

版權及興行權所有